新撰東洋史

例言

一本書は、中學校、師範學校、高等女學校、及これと程度を同じくする諸學校の、教科用書に充てむが爲に編述せるものなり。故に、組織、材料、文章、紙數等には、嚴密なる注意を加へたり。

歴史の教授は、從來、日本史、支那史、萬國史とせしが、近年に至り、日本史、東洋史、西洋史とすべしとのこと、既に世の定論となりぬ。然るに、東洋史の教科用に適當なる書は、未だ世に出でざりければ、本館は、茲に見るところあり、奮ひて原稿を起

し、これを京地及三地方の實地教育者に呈し、再三の訂正を請ひ得て、開版するに至れり。固より机上空考の著述と同一にすべきにあらざるなり。

一教科書と教案とは、比較上簡易なるものならざるべからず。此の注意を缺くときは、教師の運用自在を妨ぐるのみならず、生徒も、教科書の爲に力を費して、學科の眞趣を消化すること能はじ。且つ東洋史は、支那を中心として記述すべきものなるに、支那の地名、人名等には本來難字多し、故に難字には、一々假字を施せり。又從來の著書

を見るに、支那の原書を、そのまゝ直譯せしものは、渺なからず、是れまた大なる闕點なるべければ、本書は、勉めて文章を平易にせり。

一本書は、地名に雙柱、人名に單柱を施して、區別せり。

一時代を定むるには、支那の歷代を本據とし、年代を記述するには、我が國の紀元を本據とし、必要なる場合には、或は西洋紀元、或は支那の年號を用ひたり。是れ既に生徒の學得せる本邦史と直に聯關せしめ、また一方には、必用に應じて、西洋史と聯關せしめむと欲すればなり。

一東洋史と、日本史并に西洋史とは、素より相分離すべからず。日本史は、本館既に新撰皇國史を編述して、世に出せり、西洋史の本書と相待つべき者は、他日更に世に問ふべし。

一本書閲讀の際には、必ず沿革地圖を參照すべし。

明治三十一年三月

編者識す

新撰東洋史目次

第一編　總論

第一章　緒說……一頁

(一)國史と萬國史との別　(二)東洋史と西洋史との別　(三)東洋史の本領

第二章　地理……三頁

(一)地勢　(二)區劃　(三)地味氣候　(四)地理と開化との關係

第三章　人種……六頁

(一)世界の二大人種　(二)東洋史の人種

第四章　時期……八頁

(一)時期の區劃　(二)支那歷代の繼承

第二編　太古より秦の一統に至る

第一章　三皇五帝……一四頁
(一)三皇　(二)五帝　(三)堯舜
第二章　夏……一六頁
(一)夏の興起　(二)夏の滅亡
第三章　殷(商)……一八頁
(一)殷の興起　(二)殷の滅亡
第四章　周……二十頁
(一)周の興起　(二)周公　(三)周の制度　(四)周の東遷　(五)周の滅亡
第五章　春秋時代……二十八頁
(一)春秋の形勢　(二)五霸　(三)吳越の戰

第六章　戰國時代……三十一頁
(一)七雄　(二)七雄の形勢　(三)秦の勃興　(四)學術の勃興　(五)蘇秦の合從說　(六)張儀の連衡說　(七)列國の交戰　(八)秦の一統
第三編　秦の一統より隋の滅亡に至る
第一章　秦……三十九頁
(一)始皇帝　(二)外夷征討　(三)群雄蜂起　(四)秦の滅亡
第二章　漢楚の爭……四十四頁
(一)鴻門の會　(二)漢の三傑　(三)漢楚の戰　(四)楚の滅亡
第三章　前漢……四十七頁
(一)高祖の創業　(二)功臣誅除

(三)匈奴の侵寇
(四)呂氏の亂
(五)七國の亂
(六)漢初の文敎
(七)武帝の武威
(八)武帝の晩年
(九)宣帝の中興
(一〇)王莽の簒立
(一)王莽の滅亡
第四章　後漢……六十頁
(一)後漢の興起
(二)後漢の外交
(三)外戚宦官の專横
(四)清節の士
(五)漢末の擾亂
第五章　三國　蜀、魏、吳……六十八頁
(一)三國の分立
(二)三國の交戰
(三)三國の滅亡
第六章　兩晉及び五胡十六國……七十三頁
(一)兩晉の形勢
(二)八王の亂
(三)諸胡の侵入
(四)西晉の滅亡

(五)東晉の興起
(六)その內亂
(七)五胡の形勢
(八)淝水の戰
(九)江北の再亂
(一〇)東晉の滅亡
(一)五胡十六國の興亡表
第七章　南北朝……八十七頁
(一)南北朝の形勢
(二)南朝の興亡
(三)北朝の興亡
第八章　隋……九十五頁
(一)隋の隆興
(二)外征
(三)隋の衰亡
第九章　朝鮮……九十八頁
(一)開闢
(二)古朝鮮
(三)三韓
(四)三國
(五)三國の興亡

第十章　印度……百四頁
(一)印度の建國　(二)階級制
(三)釋迦　(四)印度の外交
(五)佛教の盛衰

第四編　唐の一統より宋の滅亡に至る

第一章　唐……百九頁
(一)唐の興起　(二)太宗の英明
(三)唐の制度　(四)唐の外交
(五)波斯の隆盛時代　(六)サラセン帝國の勃興
(七)武后の禍　(八)韋氏の亂
(九)安祿山の反　(十)藩鎮の跋扈
(二)學藝　(三)宦官の專恣
(三)宦官の專恣　(三)宗教
(五)唐の滅亡　(四)朋黨の紛爭

第二章　五代……百三十頁
(一)五代の形勢　(二)後梁
(三)後唐　(四)後晉
(五)後漢　(六)後周

第三章　宋……百三十七頁
(一)宋代の形勢　(二)宋の興起
(三)契丹の入寇　(四)西夏の入寇
(五)朋黨の爭　(六)王安石の新法
(七)文學　(八)朝臣の黨派
(九)金の興起　(十)遼の滅亡
(二)宋の中滅　(三)宋と金との和戰
(三)儒學の發達　(四)宗教
(五)蒙古の勃興　(六)西夏西遼等の滅亡
(七)金の滅亡　(七)蒙古の侵畧
(九)南宋の滅亡

第五編　元の一統より明の滅亡に至る

第一章　元……百六十一頁

(一)元の一統　(二)高麗　(三)元日本に寇す　(四)元室の衰勢　(五)元の滅亡

第二章　明……百六十七頁

(一)明の一統　(二)靖難の役　(三)明の外征　(四)宸濠の亂　(五)學藝　(六)倭寇　(七)新朝鮮　(八)日本、朝鮮を伐つ　(九)清の勃興　(十)明朝の黨爭　(十一)明の滅亡

第三章　西部亞細亞の形勢……百八十一頁

(一)西亞の三帝國　(二)帖木兒(チムール)の雄圖

第四章　印度及び後印度諸國……百八十四頁

(一)回教徒の侵略　(二)莫臥兒(モーゴル)朝　(三)葡萄牙人の來航　(四)和蘭人の來航　(五)英吉利人の來航　(六)佛蘭西人の來航　(七)英人の侵略　(八)莫臥兒朝の滅亡　(九)後印度諸國

第六編　清の一統より現時に至る

第一章　清初の治亂……百九十三頁

(一)清の一統　(二)三藩の亂　(三)臺灣の平定　(四)制度　(五)學藝　(六)宗教

第二章　清朝の外征及び內亂……百九十九頁

(一)外蒙古征服　(二)西藏征服　(三)準噶爾(ジュンガル)征服　(四)回部征服

(五)西南の征服　(六)内亂
第三章　西部亞細亞の勢形……二百〇三頁
(一)波斯　(二)阿富汗斯坦　(三)魯西亞の南侵
第四章　清國と諸外國との關係……二百〇七頁
(一)鴉片戰爭　(二)長髮賊の亂　(三)英佛聯合軍の來寇　(四)臺灣事件　(五)安南事件　(六)清佛戰爭　(七)魯國との關係
第五章　朝鮮獨立及日清戰爭……二百十七頁
(一)朝鮮の國勢　(二)朝鮮と佛米との葛藤　(三)朝鮮と日本との紛議　(四)日清戰爭
第六章　結論……二百二十八頁

新撰東洋史目次終

新撰東洋史

修文館編述

第一編　總論

第一章　緒說

國史と萬國史との別

(一)國史と萬國史との別。　地球上に、國を爲せるもの甚だ多し。而して何れの國にても、其の創建以來、諸種の變遷を經て、今日の形勢を爲すに至れるものなれば、みな其の國々の歷史ありて、一國の歷史のみを研窮するを國史といひ、世界萬國の歷史を通じて研窮するを、世界史又は萬國史といふ。國史を學びたる後には、萬國史を研窮せむこと甚だ必要なり。

東洋史と西洋史との別

(二)東洋史と西洋史との別。　萬國史といふときは、自國

と他國との差別なく、世界萬國を一と纒として研窮するものなれども、西洋諸國の起原發達と、東洋諸國の起原發達とを、歷史上より觀るに、近年に至るまで、互に相關係すること甚だ少なく、從ひてこれを一と纒として研窮すること能はざるものあれば、寧ろこれを別々に研窮するを便なりとす。而して東洋諸國に關する歷史を東洋史といひ、西洋諸國に關する歷史を西洋史といふ。

東洋史の本領

(三)**東洋史の本領。**　東洋とは、西洋に對する名稱にて、其の區域未だ一定せざれども、普通には、亞細亞洲の諸國といふなり。されば、東洋史とは、此の諸國の歷史を研窮するものにて、世界史の一半を爲せるものなり。而して東洋諸國の起原發達は、同軌ならざるものあれども、多くは支那を中心とするものゝ如し。故に、本書もこれを考察して、支那を中心とし、これに關聯する諸國の歷史を一と纒として記述せり。是れ即ち東洋史の本領といふべし。

地勢

區劃
亞細亞東部

第二章　地理

(一)**地勢。**　亞細亞洲の中央に、パミール高原あり。其の地甚だ高きゆゑ、世界の屋根と呼ばれ、是れより山脈諸方に分派す。東南方に延びて支那印度の境界をなすは喜馬拉耶の大山脈なり。東北方に走れるは、葱嶺天山亞爾泰山にして、西方に走れるは、ヒンドークーシュ、エルブルズ等の山脈なり。此の外、なほ山脈多く、河流其の間を流れて、地勢を區劃せり。

(二)**區劃。**　右の山脈によりて、亞細亞洲の地勢は、自ら東南西北の四部に分ち得べし。(一)東部亞細亞は、即ち喜馬拉耶山葱

嶺亞爾泰山等より、東方一體の地をいふ。其の中には支那朝鮮日本等の諸國あり。

南部亞細亞

(二)南部亞細亞は喜馬拉耶山脈の南方一體の地をいふ。印度緬甸(ビルマシヤ)暹羅(シヤム)安南(アナム)等の諸國、その中にあり。

西部亞細亞

(三)西部亞細亞は印度の西方諸國、即ち阿富汗(アフガニスタン)斯坦(ペルシヤ)皮路直(ベルシツタン)斯坦(シヤ)波斯亞拉比亞(アラビヤ)亞細亞(アジヤ)土耳其(トルコ)等の地方なり。其の北方にはヒンドクーシュエルブルズ等の山脈あり。

北部亞細亞

(四)北部亞細亞は葱嶺の西方、土耳其斯坦(トルキスタン)より、東北の西比利亞(ザイベリヤ)一體の地方をいふ。

地味氣候

(三)地味氣候。　地味は、大に山河の形勢と、氣候の良否とに關係す。而して亞細亞洲の東部には、黃河楊子江の三大河あり。南部にはカンボチヤ(カンボジヤ)メナム(メナム)アラマプートラ(ブラマプトラ)ガンジス(ガンジス)印度等の諸大河あり。西部には、チグリス(チグリス)ユーフラテース(ユーフラテス)の二大河あり。北部には、オビ(オビ)エニセイ(エニセイ)レナ(レナ)の三大河あり。其の他にも、河流甚だ多し。北部西比利亞の地方は、氣候寒く、地味瘠薄なれども、他の諸部にありては、氣候は溫熱、地味は大底肥沃にして、世界最良の豐饒地は此の諸地方なりといはむも、過言には非ざるなり。

地理と開化との關係

(四)地理と開化との關係。　人文の開明に赴くは、大に地理と關係あるものなり。地味瘠薄にして、穀果を生ぜず、氣候不良にして、健康に適せざらむには、人々自由に業務を執ることの能はざるのみならず、常に衣食に窮乏し、日々苦界に陷りて、決して、開明に進むこと能はざるべし。故に太古より、人民の早く繁殖し、國土の早く開明に赴きしは、地味氣候佳良にして、物産豐饒、交通便利なる地方に在るなり。支那印度等は、地理上最も優等なる位置に在れば、最も早く開けしこと、決して怪むに足らざるなり。

第三章　人種

世界の二大人種

(一)世界の二大人種。世界の人種は、一樣にあらず。膚色によりても黃色人種、白色人種、褐色人種、黑色人種、銅色人種等の別あり。其の中にて、西洋の開化をなせるは、白色人種にして、東洋の開化をなせるは、黃色人種なり。故にこれを世界の二大人種といふ。而して是等の人種は、更に數族に別るゝなり。

東西洋の人種

(二)東洋の人種。亞細亞の南部及び西部は、大抵白色人種の據る所にして、東部は、黃色人種の據る所なり。白色人種に關する歷史は、主として西洋史に屬すべく、黃色人種に關する歷史は、重に東洋史に屬すべし。而して黃色人種を總稱して、蒙古人種といふ。更に蒙古人種を小別すれば、苗族、漢族、「ツングス」族、蒙古族、都爾古族、圖伯特族及び韓族に分る。

蒙古人種

苗族は支那最古の人種にして黃河楊子江間の肥沃なる地に

住居せしかども頗る劣等なる種族なりしゆゑ、漢族、北部より次第に南下して、苗族を江南に驅逐し、中原の美地を占領して、遂に支那開明の基礎を成せり。故に漢族は支那にて最も重要なる種族なり。

漢族

都爾古族

都爾古族は、もと蒙古地方に蔓衍し、早く周代にも獯鬻(クンイク)、玁狁(ケンイン)などいひて、支那本部を侵し、其の後には、匈奴(キヤウド)、突厥(トツクツ)などいひて、大に中原の諸國を苦めたり。

蒙古族

蒙古族は、蒙古地方に住し、初め東胡と稱し强盛なりしかども、秦漢の際に、匈奴に敗られたり。後の鮮卑(センピ)、拓跋(タクバツ)、契丹(キツタン)、遼(リヤウ)などみな此の種族より出で、元朝起るに及びて支那を一統せり。

ツングス族

「ツングス」族は、上古に、肅愼(シユクシン)、靺鞨(マツカツ)などといひ、中世には、金國を建て、近世に至りて、清朝を起し、支那を一統せし滿州族も亦この種族なり。

圖伯特族韓族

圖伯特族は、西藏の住民にして、韓族は朝鮮に住せし人種なり。白色人種は、即ち高加索人種にして、本來、亞細亞の中部に發生せしものなり、而して其の一族なる「アリアン」族は、東西兩方に分れ、其の東に進みたるものは、印度に入りて、其の地の土人を南方に驅逐し、遂に印度波斯等の地方を占有し、西に進みたるものは、希臘人羅馬人となりて、西洋諸國民の大部を爲すに至れり。

アリアン族

時期の區分

第四章　時期

(一)時期の區分。

東洋史に於ける時期の區分は、未だ定論なしされど本書には、成るべく錯雜を避けんが爲、支那を根據として、左の區分に從ひ、叙述せむとす。

(一)太古より秦の一統に至る

(二)秦の一統より隋の滅亡に至る

(三)唐の一統より宋の滅亡に至る

(一)太古より秦の一統に至る。

支那の建國は、我が國の神代に在りて、太古より秦に至るまで、凡そ二千餘年間にして、秦の一統は、實に我が孝靈天皇の御代に當れり。故に其の早く開けしこと多く例なき所とす。

(二)秦の一統より隋の滅亡に至る。

秦より漢に及びて漢族と他族との關係、次第に繁く、漢朝亡びて、支那全土、大に亂れ、隋これを一統したれども、暫時にして又滅亡せり。此の間、凡そ九百年なり。而して此の時代には、西は西域諸國南は印度、東は朝鮮及び、わが國との交通を開きて、東洋史の區域大に廣まれり。

(三)唐の一統より宋の滅亡に至る。

唐の一統は、我が推古天皇の末年に在り。茲に至りて、支

(四)元の勃興より明の滅亡に至る

(五)清の興起より現時に至る

那の文明大に進み、其の勢威四夷に及び、漢族の勢力甚だ盛なりしが、其の後、蒙古族「ツングス」族等に侵入せられ、宋朝の滅亡に及びて、漢族の勢全く衰へたり。此の時期間は、凡そ六百六十年なり。

(四)元の勃興より明の滅亡に至る。

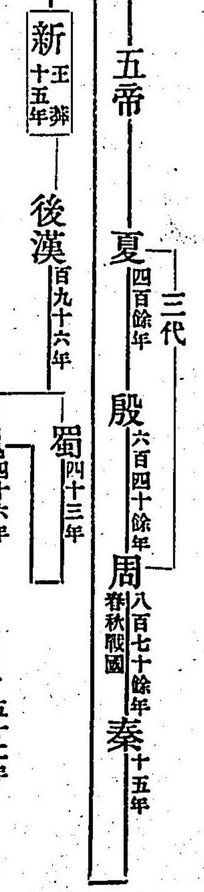
元は蒙古族より勃興せしものにて、其の支那を一統せしは我が後宇多天皇の御代に當れり。始めて、漢族以外の種族にて支那全土を一統せしのみならず、其の威力、遠く歐州に及べり。次に明朝は、漢人種より起りて、これに代はりたれども、支那本部を占有せしのみなり。元、明兩朝の間は、凡そ三百八十年なり。

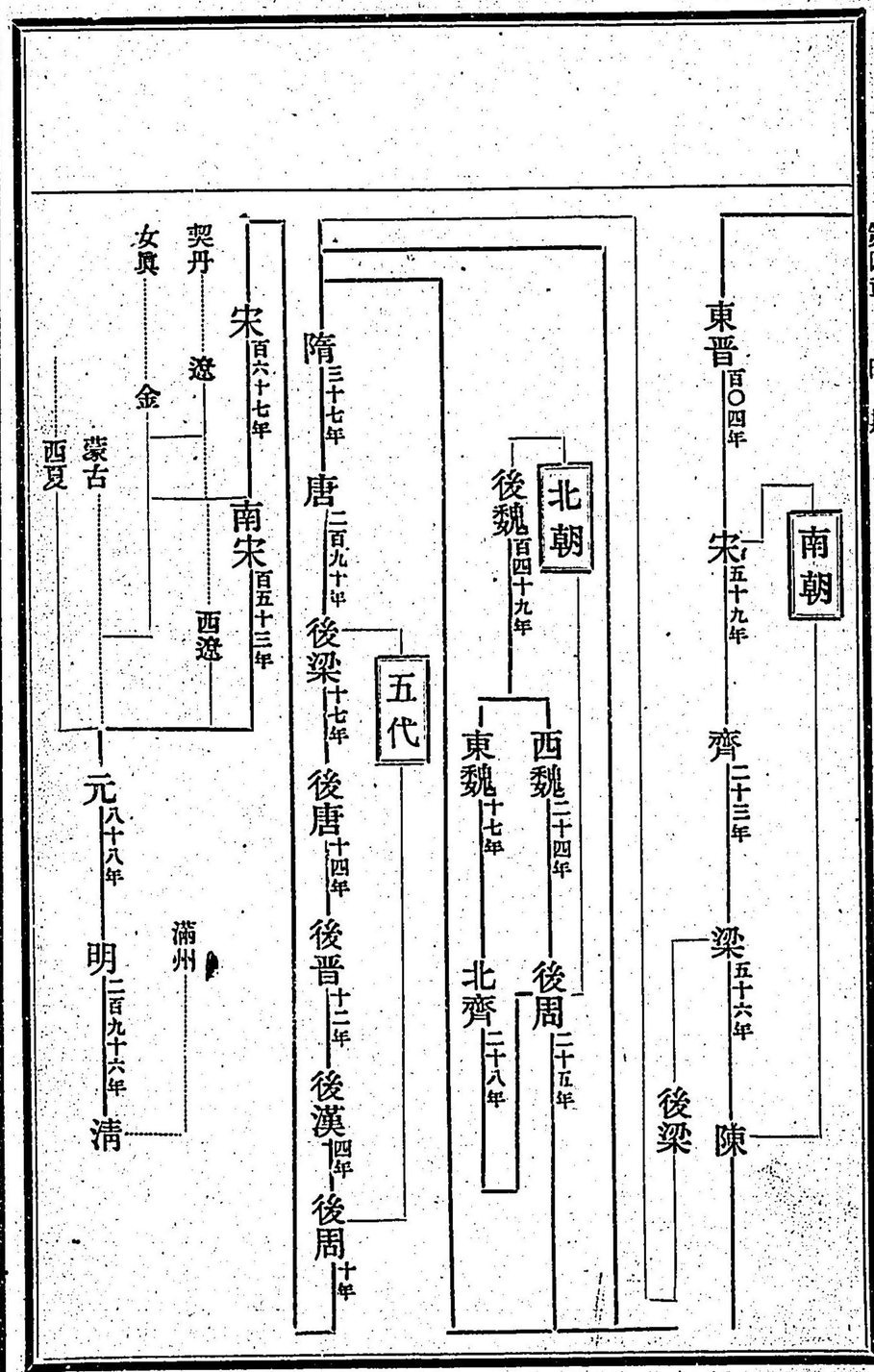
(五)清の興起より現時に至る。

清は「ツングス」の一族より起りて、漢族を征服し、支那を一統せり、是れ即ち現時代の帝統にして、此に至りて、廣く世界各國との交通を開き、黃白二人種一團の關係生じたりしがば、また東洋史、西洋史の別を立つる必要なきに至れり。

支那歷代の繼系

(二)支那歷代の繼承。東洋史の中心たる、支那歷代の繼承は如何、豫めこれを知り置かば、大に便利ならむ。故に今、年代と合せて左に表示すべし。





太古よりの概況

第二編　太古より秦の一統に至る

何れの國も、其の開闢の最初は、詳に知り難し。支那も印度も共に皆世界舊邦の一にして、今より四五千年以前に、既に人民頗る繁殖したれども、其の詳細なることは、審に知ること能はず。されど、人民の繁殖するに從ひて、これを統御する酋長生じ、其の酋長は、恰も後世の君主の如けれども、未だ全國を統一する大權力を有するものにはあらざりき。支那にては、三皇、五帝より夏殷を經て、周の世に至り、帝業大に成りけれども、周の中世より、群雄各地に起りて、天下大亂の世となりぬ。而して能くこれを統一せしは秦の始皇帝なり。今次ぎ〳〵に、其の間の歴史を述ぶべし。

三皇——五帝——夏——殷——周（春秋 戰國）——秦——

三皇

五帝

第一章　三皇五帝

(一)三皇。　漢人種の苗人種を驅逐して黃河楊子江間の地方を占有せしは、大凡そ五千年以前に在り。其の初めは、邈こして詳に知り難けれども、伏羲神農黃帝に至り、能く人民を統御せり。これを三皇といふ。

伏羲氏は、人民に漁獵を敎へ、神農氏は、耕作を敎へ、貿易の制を立て、黃帝は、舟車を造り、家屋を營み、衣冠を制し、其の他、音樂を定め、文字を造れる等、大に支那文明の基を開けり。又黃帝は武を用ひて、諸方を征し、其の領地、東は海に至り、南は楊子江に及べり。

(二)五帝。　黃帝の次に少昊(セウコウ)顓頊(センギヨク)帝嚳(コク)帝堯帝舜相繼ぎて立つこれを五帝といふ。少昊より帝嚳に至るまでは、黃帝の業を

帝堯

帝

述職

承けて、國土も次第に開けたれども、其の事蹟なほ明瞭ならず、堯舜以後は、史蹟漸く明かなり。

(三)堯舜。　帝堯は、帝嚳の子にして、陶唐氏と稱す。其の天子となりしは、今より凡そ四千一百餘年前にて、我が紀元前凡そ一千六百餘年なり。聖德ありて、賢臣を任用し、天下泰平にして、人民みな皷腹せり。堯の子丹朱不肖なりければ、舜を民間より擧げて、帝位を讓れり。

舜は、孝悌の心深く、又賢明の聞え高く、堯を助けて、天下を治め、終に其の讓を承け、有虞氏と稱す。堯の時より、天下に大洪水ありしかば、舜禹を擧げて、これを治めしめぬ。又皐陶(カウエウ)稷契(シヨクセツ)等を用ひ、政治を整へ、王權を張り、官制を設け、刑法を定め、威德大に行はれしかば、諸侯、每歲來朝して、貢職を修む、これを述職といふ。天子も五歲每に、四方を巡遊して、政治の得失を察す、これを巡

巡狩

狩といふ、後の治をいふものは、必ず先づ堯舜を稱す。舜崩じて、其の子商均といふ者不肖なりければ、禹位に即けり。

第二章　夏

夏の興起

(一)夏の興起。　禹は、數年の間、大に力を盡して、洪水を治め功績ありしかば、舜に次ぎて位に即き。國號を夏といふ。禹、多年洪水の後、天下大に疲弊せるを知り、自ら節儉を旨とし、仁政を施して、民力を休養せり。禹崩じて、其の子啓立ちぬ。是れより先には、王統みな禪讓なりしに、此の後は世襲となりて天子の權大に張り、諸侯みな畏服せり。

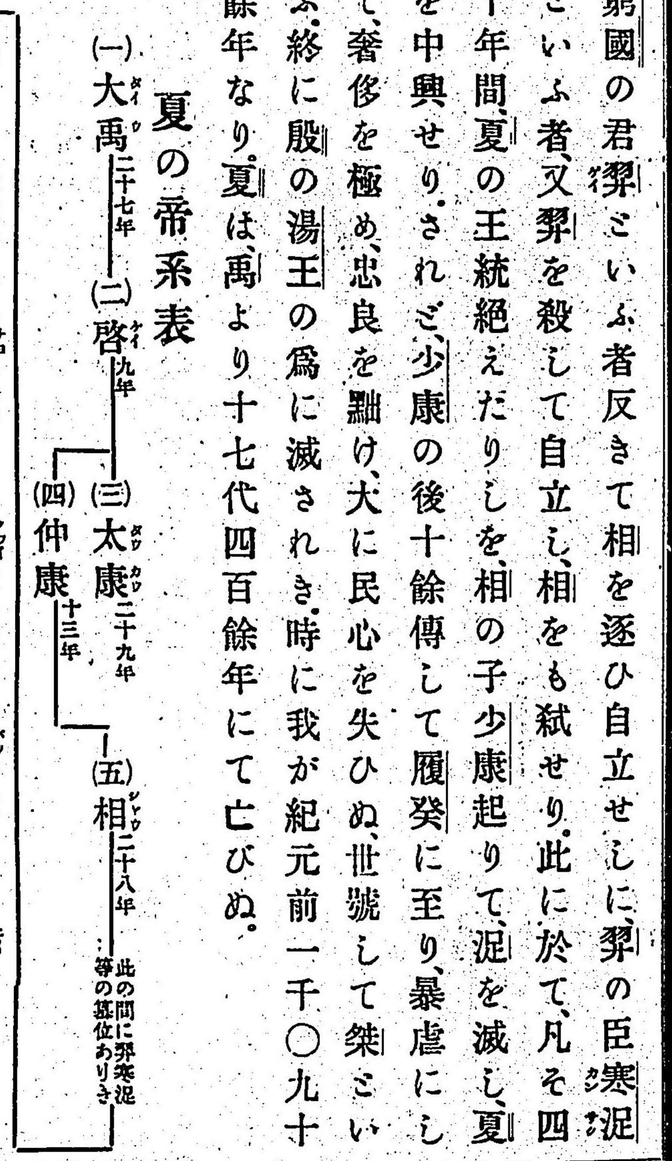
夏の滅亡

(二)夏の滅亡。　君主賢ならずして、暴政を行はゝ、人民これに叛かむこと自然の勢なり。夏の世も啓の後、相の時に至り、有窮國の君羿といふ者反きて相を逐ひ自立せしに、羿の臣寒浞といふ者、又羿を殺して自立し、相をも弑せり。此に於て、凡そ四十年間、夏の王統絶えたりしを、相の子少康起りて、浞を滅し、夏を中興せり。されど、少康の後十餘傳して履癸に至り、暴虐にして、奢侈を極め、忠良を黜け、大に民心を失ひぬ、世號して桀といふ。終に殷の湯王の爲に滅されき。時に我が紀元前一千〇九十餘年なり。夏は、禹より十七代四百餘年にて亡びぬ。

夏の中興

夏の帝系表

夏の帝系表



第三章　殷(商)

殷の興起

(一)殷の興起。　殷の祖先は、帝舜の時に仕へたりし契なり。契は商(陝西省)に封ぜられしゆゑ、國號を商といひしが、後に至りて、殷(河南省)に都せしかば殷と改めしなり。

契より十餘世を成湯といふ。時に夏の桀、暴虐なりしかば、成湯、德を修め、民望を定め、伊尹を用ひて、仁政を行ひ、終に兵を起して、諸侯を征し、桀を滅して、天下を一統せり。時に我が紀元前一千〇九十餘年なり。

伊尹

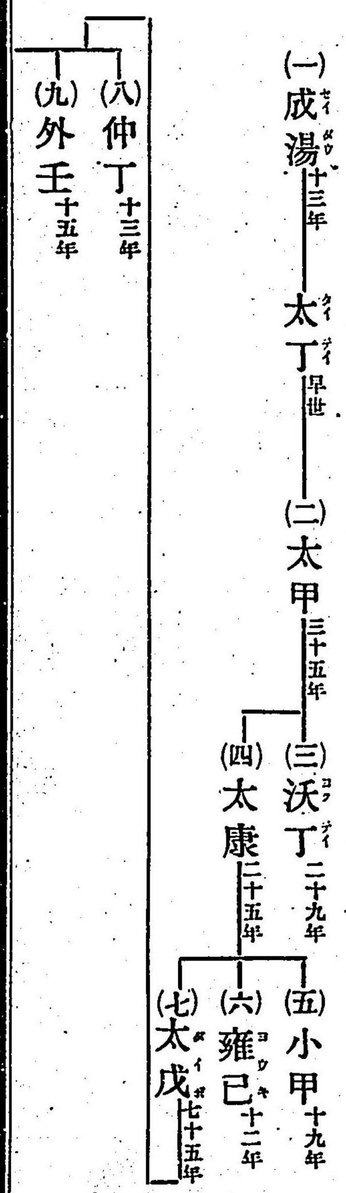
(二)殷の滅亡。　湯王の孫太甲、暴戾なりしかば、伊尹これを桐宮に放きぬ。三年にして太甲過を悔いしかば、伊尹これを迎へ、諸侯も服しぬ。爾來、殷の盛衰數次なりしが、明君數々出でゝ民望を維ぎ、殷朝、連綿として二十餘世に傳へたり。

紂

其の後殷室次第に衰へ、帝辛に至り、紂と稱す。勇にして智ありしかども、驕奢にして、賦稅を重くし、刑罰を酷にせしかば、人民大に怨望せり。微子箕子比干等屢諫めしかども皆聽かず、暴虐益甚しかりしかば、終に周の武王の爲に滅されき。時に我が紀元前四百餘年にして、殷は二十八代六百四十餘年にして亡びぬ。

殷の滅亡

殷の帝系表



(一)河亶甲(カタン)九年 — (二)祖乙十九年 — (三)沃甲二十五年 — (五)南庚二十五年
(三)祖辛十六年 — (四)祖丁三十二年

(六)陽甲七年
(七)盤庚二十八年
(八)小辛二十一年
(九)小乙二十八年 — (十)武丁五十九年 — (三)祖庚七年 — (三)廩辛(リン)六年
(三)祖甲三十三年 — (四)庚丁二十三年
(五)武乙四年 — (六)太丁三十七年 — (七)帝乙三十七年 — (八)帝辛(紂)三十三年

第四章　周

周の祖

(一)周の興起。　周の祖を棄(キ)といひ、帝嚳の子なりといふ。堯舜の世に仕へしが、十餘世を經て、古公亶父(タンボ)に至り、岐山(ギザン)(陝西)の下に居り、國を周と號せり。古公に太伯虞仲季歴の三子ありて、

文王

古公の次に季歴立ち、季歴の次に昌立つ。昌は季歴の子にして、即ち文王なり。殷の紂王の命によりて、西伯となり、太公望等を用ひ、德を修め、仁政を行ひしかば、諸侯多くこれに歸し、其の領地、天下の三分の二に及べり。文王卒して、子發立つ、即ち武王なり。武王太公望の謀を用ひ、殷の紂王を討ちて、これを滅し、天下を一統せり。

武王

武王既に天下を一統せしかば、大に、宗族功臣を封じて、王室の助けとせり。弟周公を魯に召公を燕に太公望を齊に封じ、其の他、同姓異姓六十餘人を各地に分封せり。武王また公、侯、伯、子、男の五爵を設けて、諸侯に授けぬ。而して公、侯には百里、伯には七十里、子、男には五十里の地を與へ、五十里以下は附庸といひて、他の諸侯に屬せしめぬ。

宗族功臣を封ず

五爵

附庸

周公

(二)周公。　周公は武王の弟なり。武王崩じて、子成王立ちし

が、年なほ幼なりしかば、周公攝政せり。周公英明にして大才あり、禮樂を制し、制度を定め、文物隆盛にして、周室大に振ひ、後世其の治を稱するのみならず、禮樂制度みな後世の摸範となれり。

周の制度

(一)官制

(三)周の制度

(一)官制。　堯舜の時より官制定まり、夏殷みな其の設けあり。されど、其の最も能く具はりしは周にあり。上に三公、三孤あり、有德の任なり。三公とは、太師、太傅、太保をいひ、三孤とは、少師、少傅、少保をいふ。次に六官ありて政務を掌る。六官とは、天官、地官、春官、夏官、秋官、冬官にして、天官は、諸政を總攬し、其の他は、諸務を分掌す。而して此の六官に屬するもの各六十あり、又地方には、諸侯ありて、天下全く封建の制度なりき。

封建制度

(二)兵制

(二)兵制。　周以前の兵制は、明瞭ならず。周に至りて、徵兵の制あり。男子二十歳より六十歳までを、兵役に服する年限とし、人員を定めて、軍隊を組織せり。一軍を一萬二千五百人とし、更にこれを小分す。而して天子は六軍、大國は三軍、中國は二軍、小國は一軍を置く定めなり。又牛馬、兵車、軍器等の定制もありき。

(三)田制

貢法

助法

徹法

(三)田制。　夏の時には、一人に田地五十畝を與へ、十人を一組とす。而して一人毎に五畝の收穫を上納せしむるゆゑ、十分の一の稅なり、これを貢法といふ。殷に至り、井田の法を用ひ、一區を七十畝として、九區を一組とし、これを八家にて耕さしめ、中央の一區を公田とし、其の收穫を上納せしむ、これを助法といふ。周に至りては、同じく井田の法なれども、一區を百畝とせり。而して都鄙によりて、夏殷の二法を用ひしゆゑ、これを徹法といふ。

(四)法制

(四)法制。　太古より、墨、劓、剕、宮、大辟の五刑及び流刑、鞭刑、朴刑

等ありしに、周末、戰國の世に及び、梟首、車裂等の酷刑生ぜり。

(五)學制。

(五)學制　太古より、教育に力を用ひ、既に夏殷の際に、大學、小學の設けあり、周に至りて、學制大に完備し、大學、小學の設けより、就學の年齢順序等能く整ひ、教育頗る普及せり。

周室最盛時代

(四)周の東遷。　周公は成王を助けて、周室を盛んならしめぬ。成王長ずるに及びて、政を還したれども、なほ心を盡してこれを輔佐せり。成王の次には康王立つ、康王も心を盡して父祖の業を守りしかば、成康二王の間は、周室最盛の時代にして、天下能く治り、絶えて刑罰を用ひざりきとぞ。

周室の衰兆

康王の次に昭王立ちしが、此の時より周室漸く衰へ、王も楚に巡狩の時、楚人に弑せられぬ。次に穆王立ちしかども、諸侯の心を失ひ、遠地の者入朝せざるに及べり。其の後厲王に至り、暴政を行ひしかば、國人反く者多く、王も京師を出奔するに至れり。

周室の中興

されど、次の宣王立つに及び、賢者を用ひ、諸蠻を征し、周室中興せり。

宣王崩じ、子幽王立つに及びて、國政大に亂れ、諸侯離反し、申侯兵を起して、王を弑せり。幽王の次に平王立ちしが、周室益衰へ、諸侯強大となり、又西戎次第に京師に迫りぬ。初め武王の時鎬京(陝西省に在り後世の長安なり)を營み、成王に至り、更に洛邑(河南省に在り後世の洛陽なり)に都を營めり。鎬京を西都といひ、洛邑を東都といひ、世々西都に都せり。茲に至り西戎の迫れるを以て、都を東都に遷せり。これを周の東遷といひ、是れより後を東周と號し、周室の威令また天下に行はれず、謂はゆる春秋戰國の世となり、諸侯互に覇を競ひ、雄を爭ふに至れり。武王より茲に至るまで、十二世三百五十二年にして、時に我が紀元前百十年なり。

周の衰微

(五)周の滅亡。　周室衰微するに及びて、周公の定めたる諸

制度は、名あるのみにて、實際に行はれずなりぬ。封を受けたる同姓の諸侯も、王室を助けずして、自立を企て、異姓の諸侯と共に、互に強弱相呑噬せり。されば周室の威令は、行はれず、周室は名ありて、其の實權なきなり。平王の四十九年より、敬王の三十九年に至るまで、二百四十餘年間を春秋の世といふ。敬王より數傳して威烈王に至り、周室遂に諸侯の陪臣をも制することを能はざるに至り、天下日々戰爭を事として、互に強弱を爭ふのみなり。故に威烈王の二十三年以後、凡そ二百年間を戰國の世といふ。かくて周は、西周東周に分れたりしに、兩周ども、秦の爲に滅されぬ。時に我が紀元四百十二年（孝靈天皇の御代）にして、武王より凡そ三十八世八百七十四年なり。

春秋の世

戰國の世

周の滅亡

周の帝系

周の帝系

(一)武王發七年 — (二)成王誦三十七年 — (三)康王釗二十六年 — (四)照王瑕五十一年 — (五)穆王滿五十五年 — (六)共王伊扈十二年 — (七)懿王囏二十五年 — (九)夷王燮十六年

(八)孝王辟方

(五)穆王滿五十五年 — (十)厲王胡五十一年 — (三)平王宜臼五十一年 — (五)莊王佗十五年 — (九)頃王壬臣六年 — (十一)匡王班六年

(十)厲王胡五十一年 — (二)宣王靜四十六年 — (三)幽王宮涅十一年

(三)平王宜臼五十一年 — (四)桓王林二十三年 — (六)僖王胡齊五年 — (七)惠王閬二十五年 — (八)襄王鄭三十三年

(五)莊王佗十五年 — (六)僖王胡齊五年

(九)頃王壬臣六年 — (十一)匡王班六年 — (二)定王瑜二十一年 — (三)簡王夷十四年 — (三)靈王泄心二十七年

(十一)匡王班六年

(二)定王瑜二十一年

(三)簡王夷十四年 — (四)景王貴二十五年 — (五)悼王猛一年未滿

(四)景王貴二十五年 — (六)敬王丐四十四年 — (七)元王仁七年 — (八)貞王介二十八年

(六)敬王丐四十四年

(七)元王仁七年

(八)貞王介二十八年

(五)悼王猛一年未滿

(三)靈王泄心二十七年 — (四)烈王喜七年 — (五)顯王扁四十八年

(四)烈王喜七年

(五)顯王扁四十八年

(三)考王嵬十五年 — (三)威烈王午二十四年 — (三)安王驕二十六年 — (五)顯王扁四十八年

(三)威烈王午二十四年

(三)安王驕二十六年

(三)考王嵬十五年 — (三)思王叔一年未滿 — (元)哀王去疾一年未滿

(三)思王叔一年未滿

(元)哀王去疾一年未滿

(三)慎靚王定六年 — (三)赧王延五十六年

(三)赧王延五十六年

東周　惠公七年

第五章　春秋時代

(一)春秋の形勢。

平王東遷以後の事は、孔子の修めたる春秋といふ書に在るを以て、後世是れより後を春秋の世といふなり。是の時に當り、諸侯互に相爭ひ、强は弱を幷せ、大は小を呑み、其の强大なるもの十二國あり。これを春秋十二列國と稱す。其の中、周と同姓なるもの七國にして魯衞晉鄭燕蔡曹なり。周と異姓のもの五國にして齊宋楚陳秦なり。又これに吳越を加へて十四强國ともいふ。其の他、小國なほ甚だ多かりき。

春秋十二列國

諸侯の覇業

中國既に大に亂れしかば、戎狄諸方より侵入せり。周室これを征服すべき威力なきゆゑ、諸侯の勢力あるもの周室を擁して覇を唱へ、諸侯に號令し、戎狄を攘はむと欲する者、相繼ぎて起れり。而して能く諸侯の上に立ちて、覇を唱へし者五人あり。それは齊の桓公、宋の襄公、晉の文公、秦の繆公、楚の莊王にして、これを五覇といふ。

齊の覇業

(二)五覇。

齊の桓公は、太公望の後裔なり。其の國は、今の山東省の地方にて、山海の形勝を占めき。桓公は、大略あり、賢者管仲を用ひて、兵制を革め、農商を奬め、國勢富强に赴き、周の僖王の時、諸侯を會して覇業を成し、外は戎狄を攘ひ、內は周室を尊べり。されど、管仲死して、覇業次第に衰へ、桓公の死後には、國內大に亂れ、覇權他に移れり。

宋の覇業

宋の襄王は、齊の桓公に次ぎて覇業を唱へ、一時は、其の勢盛なりしかども、楚と戰ひて、大敗するに及び、威名頓に挫折せり。

晉の覇業

晉の文公は宋の襄公に次ぎて、諸侯に覇たり。賢を用ひ、政を修め、周の襄王の爲に北狄を攘ひて、國亂を平げ、又楚を伐ちてこ

れを敗れり。文公の死後にも、晉は、なほ諸侯の盟主たりき。

秦の覇業

秦は、其の國西方に僻在すれども、天險の地理を占む。繆公に至り、百里奚・蹇叔等を用ひて、國政を修め、領地を廣め、遂に西戎に覇たり。又東は晉の境に迫り、他日天下を一統する基を開けり。

楚の覇業

楚は、南方の大國なり。莊王に至り、諸蠻を伐ち、附近の諸國を併せ、國勢大に強盛となりぬ。曾て兵を周の境上に進め、又晉と覇を爭ひてこれを敗り、雄を南方に振へり。

吳越の戰

(三)吳越の戰。　吳越の二國は、東南の海岸に在りて、互に境を接す。吳は、太伯の後にして、闔廬に至り、楚の亡臣伍子胥を用ひて、楚を伐ち、漸く強大を致し、威を上國に振ひ、一方の雄たりしが、越王勾踐と戰ひ、傷つきて死にき。闔廬の子夫差、必ず父の讐を復せむことを誓ひ、遂に兵を起して、大に越王を破りぬ。越王、會稽山に逃れて降を乞ひしかば、夫差これを許せり。

越王勾踐は、吳と和して國に歸り、其の臣范蠡と共に、兵を練り國を富し、遂に吳を伐ちて、これを敗る。吳王夫差、和を請ひたれども、聽かずして吳を滅せり。時に周の元王の世なりき。是れより越は、東南に覇を唱へたれども、勾踐より數世の後に至り、楚に破られぬ。

第六章　戰國時代

陪臣專橫

(一)七雄。　周の威烈王以後を戰國の世といふ。春秋の時は、諸侯互に覇を爭ひしかども、なほ周室を尊崇せり。戰國に至りては、大義名分全く壞れ、また周室を顧る者なきのみならず、陪臣も專橫を極めて、其の君の國を奪ふ者多きに及べり。晉には、范氏・知氏・中行氏・趙氏・魏氏・韓氏の六卿ありて、互に相爭

ひ、趙魏韓の三氏は、遂に他の三氏を滅して、悉く晉の地を分ち威烈王の命を受けて、各獨立の國を建てぬ。齊も桓公の後、數世にして大に衰へしが、其の臣田氏終にこれを奪ひ、周の安王の命によりて諸侯となりぬ。これを田齊と稱す。此の外に、秦は西方に、楚は南方に、燕は北方に雄を張り、みな僭して王と稱せり。

戰國の七雄

以上、秦楚燕趙魏韓齊を戰國の七雄と稱す。

七雄國の形勢

(二)七雄國の形勢。　今七雄の形勢を觀るに、趙魏韓の三國は、晉の故地にして、これを三晉といふ。三晉の境土甚だ大ならざれども、土肥え、人多し。楚は、南方に在りて、土地廣大なり。齊は、東方に在りて、山海の利を占む。燕は、東北に占居し、秦は、西方一帶の地を占め、他の六國と對峙の形勢ありて、兵力最も强し。

秦の勃興

(三)秦の勃興。　七雄は、各形勝の地に據りて、權勢を中原に占めむと欲し、互に雄を競ひ、智を鬪はし、戰爭虛歲なかりき。秦は、國大に兵强けれども、西方に僻在せるを以て、中國の諸侯より、夷狄を以て遇せられしを孝公に至り、大に發憤し、衞の人商鞅を用ひ、法を嚴にし、令を改め、國を富まし、兵を强くせり。是に於て、秦の勢益、强く、列國みなこれを畏るゝに至れり。されど、商鞅の、法を用ふること嚴酷に過ぎしかば、孝公薨ぜし後に、商鞅は終に讒によりて殺されき。商鞅は殺されたれども、秦は此の時より大に强盛に赴き、陰然として列國を制する勢あるに至れり。

學術の勃興

(四)學術の勃興。　春秋以來、戰爭虛日なく、列國互に攻伐を事とし、天下は、非常の大亂となりけれども、此の間には、人智また大に發達し、豪傑の士、輩出せしのみならず、學術もまた大に勃興して、百家の言說、蔚然として起り、後世文化の基を爲せり。今その概要を述べむ。

文學の創作
文運の進歩

太古黃帝の時に、蒼頡をして文字を作らしめきといふ。其の文字、多くは物に象りたるゆゑ、これを象形文字といふ。堯舜より夏殷を經て、周に至り、文運大に開け、易、詩、禮、樂等の書あり。既にして孔子老子等の如き學者輩出して、道義の敎、治國の術を說きしより、一家の說を立てし者甚だ多かりき。

孔子

孔子は、周の靈王の二十一年、(我が紀元一一〇紀靖天皇の御代)魯國に生る。至德ありて文學に通じ、仁道を說き、修身齊家より、治國平天下の道を述べ、詩經、易經、書經等を整ひ、又春秋を筆刪す。論語といふ書は、即ち其の言行を輯錄せしものなり。孔子の學統を儒家と稱し、永く支那政敎の手本となれり。孔子の孫を子思といふ。中庸を著す。その後、孟子は、敎を子思の門に受け、專ら仁義を說き、孟子といふ書を著せり。

儒家

老子

老子は、楚の人にて、孔子と同時代の人なりといふ。其の學風、全く孔子と異れり。周末の禮文虛飾を好まず、無爲自然を旨とせり。老子二篇を著しゝが、遯世して、其の終れるところを知らず。尋いで莊子出でて、老子の道を繼ぎ述べき。此の學統を道家といふ。

莊子
道家

其他の學者

右の外、楊子、墨子、韓非子等、みな書を著して自說を述べ、孫子、吳子は、兵法を談じ、蘇秦、張儀は、縱橫の雄辯を振ひて、諸侯の間を遊說し、其の他、經史、文學の書より、醫學、天文學、曆學等に至るまで、大に發達せり。

(五)蘇秦の合從說。

孔子を始めとして、當時の學者は、多く當世の人道壞亂に憤ることありて、世を救ひ、民を安んぜむと欲せしかども、其の說、みな當世に容れられざりき。されど、其の說を實地に試みて、戰國の形勢に大影響を及ぼしゝ者は、蘇秦及び張儀なり。

蘇秦の合從說

蘇秦は、洛陽の人なり。時に秦の孝公は、商鞅を用ひしより、大に富强に赴き、東向して六國に迫りしかば、六國みなこれを恐れたり。蘇秦乃ちまづ燕に行きて文公に說き、趙と從親せしめ、更に趙に行きて、六國合從して秦に當らば、秦を破ること難からざらむと說き、遂に六國を說服して合從せしめぬ。

張儀の連衡說

かく合從成りければ、秦大にこれを憂ひ、辯士を遣して、六國を離間せしめしかば、從約は僅に一年にして破れぬ。

(六) 張儀の連衡說。　張儀は魏の人なり。嘗て蘇秦と同じく、鬼谷先生に學びぬ。張儀、秦の爲に連衡の策を立つ。連衡の策とは、六國を連ねて、秦に仕へしめむとするにありしなり。遂に六國に遊說して、其の策を成せり。其の後、諸國或は合從し、或は連衡し、紛々として定まるところなかりしが、其の間に於て秦は益强大に赴きしかども、六國は、日々に衰弱に向へり。

列國の交戰

食客

齊燕の戰

趙

秦

(七) 列國の交戰。　戰國の時、諸侯互に競ひて、奇才技能の士を聘す。これを食客といふ。其の多きは三千人に及べり。齊の孟嘘君魏の信陵君楚の春申君趙の平原君等は皆その優なる者なり。

是の時に當りて、列國互に戰を交へて、殆ど寧日なかりき。齊は、燕の內亂に乘じて、大にこれを破りしが、尋いで燕將樂毅齊を伐ちて、忽ち其の七十餘城を下しぬ。されど、樂毅、燕を去るに及び、齊將田單また大に燕を破れり。

趙は、北狄を伐ちて、國勢頗る張り、廉頗藺相如の二人、力を協せて、國政を助けしかば、秦も、一時は趙に加ふること能はざりき。其の後、廉頗斥けらるゝに及び、秦將白起大に趙の軍を長平に破りて、其の降卒四十萬人を坑にせり。其の後、趙は、楚魏の援軍を得て、秦を破りしかども、六國の勢遂に振はずなりぬ。

周の滅亡

六國の滅亡

秦の一統

(八)秦の一統。　秦は、先づ近國を攻め滅して、次に遠國に及ばむと欲し、兵を三晉に加へぬ。周の赧王、秦を恐れて、諸侯と從親せしに、忽ち秦に滅されぬ。

戰國の末葉、秦王政父祖の餘烈を纘けて益兵を用ふ。時に山東の六國は、知名の相將、次第に死歿して、秦の兵を禦ぐ力いよいよ削減せり。楚趙魏韓等、互に合從して、秦を伐ちたれども、却りて大に敗られ、國勢萎靡して振はず。秦王政の二十六年、秦は、悉く六國を滅して、天下を一統せり。時に我が紀元四百四十年(孝靈天皇の御代)なり。

始皇帝

郡縣政治

儒生を坑にす

書を焚く

阿房宮

第三編　秦の一統より隋の滅亡に至る

第一章　秦

(一)始皇帝。　秦は、顓頊の後なり。春秋戰國以來、天下大に亂れて、統一するところなかりしを、秦王政、能くこれを平定せり。政、自ら其の功德、三皇五帝に過ぎたりと思ひ、王と言はずして、皇帝と稱せり。是れ即ち始皇帝なり。

始皇帝位に即くに及び、大に政治を革め、李斯の議を用ひ、從來の封建政治を改めて、郡縣政治とし、諸般の改革を行ひしかば、學者、みなこれを誹議せり。由りて李斯の建議を用ひて、咸陽の儒生四百六十餘人を坑にし、古を尙びて、今を議せしめざらむが爲、醫藥、法令等の書を除く外は、悉く天下の書を集めて、これを焚けり。

かくて始皇は、泰平を紛飾せんが爲、大に土木を起して、咸陽(陝西

省）の都を壯麗にし、宏大なる宮殿を營めり。これを阿房宮といふ。又天下の富豪を咸陽に集めて、大に中央集權を圖れり。

漢族と外夷

(二)外夷征討。　既に總論に述べしが如く、支那の種族は、一種に非ず。漢族は、中原の美地を占めたれども、其の初めは、黃河沿岸の狹小なる地方に過ぎざりしに、堯舜以來、次第に東西南北を征して、大に中國の地域を廣め、周に至りて益廣大となりしが、是れより外夷の憂患常に絕えず、春秋戰國の時、接域の諸侯これが防禦掃討に力を盡せり。これを要するに、太古より後世に及ぶまで、漢族と他の種族との抗爭は、終に絕えざるなり。

匈奴

戰國の時、燕趙秦の三國は、北方の蠻族匈奴と境を接せるを以て、時々其の侵入を蒙れり。故に三國、みな長城を築きてこれを防禦せり。匈奴とは、都爾古族にして、古の獫狁、玁狁と同類なり。始皇、天下を一統するに及び、其の將蒙恬を遣し、三十萬の大兵を發して、匈奴を伐たしめ、古の長城を修理增築して、萬里の長城を築けり。是より秦の威匈奴に振ひぬ。

南越

秦は、更に南越を征略して、安南にまで及べり。乃ち五十萬の民を發して、其の戍兵とせり。

始皇帝崩御

(三)群雄蜂起。　始皇帝、屢郡縣を巡行せしが、途に、病みて崩ぜり。（我が紀元四五二）皇帝の位に即きしより十二年なり。初め、太子扶蘇仁孝なりしに始皇帝の怒に觸れて、北の方、蒙恬が軍を監しぬ。始皇帝崩ずるに及び、趙高李斯等の奸計にて、遺詔を矯め、扶蘇及び蒙恬に死を賜ひ、少子胡亥を擁立せり。二世皇帝是れなり。

趙高李斯等の專權

二世皇帝、暗愚にして趙高李斯、政を專にし、私を營めり。初め始皇帝、內は暴政を行ひ、外は皇帝遠征を企て、賦歛日に重くして、人民みな奔命に疲れたりしに、二世また、益法令を嚴にし、刑罰を刻にせり。しかのみならず、趙高等、私を營みて、擅橫を極め、皇

族大臣にも殺さるゝもの多かりき。此に於て、秦室衰へ、群雄各地に蜂起せり。

群雄蜂起

二世皇帝の元年、陳勝吳廣等、先づ兵を起しゝに、諸郡縣爭ひ起りてこれに應ぜり。陳勝乃ち自立して、楚王と稱せしが、後、陳勝吳廣みな其の下の爲に殺されぬ。

時に楚の項梁は、其の姪項籍と共に、兵を吳中に起し、劉邦は沛（江蘇省）に起り、相共に進みて秦に迫れり。

項梁

(四) 秦の滅亡。

群雄は各地に起りたれども、趙高等は、二世皇帝に知らしめざりければ、天下太平なりと思ひ、日々遊宴を事とせり。趙高遂に李斯を讒してこれを殺し、益、政權を恣にせり。

項梁は范增を用ひ、其の議に從ひて、楚の後を立つ、これを懷王といふ。既にして項梁は、秦の將軍章邯に殺されしかば、項籍大に怒り、懷王の命を奉じ、必ず秦を滅さむことを期して進軍せり。項籍は、即ち項羽にして、豪勇の人なり。此の時、劉邦また懷王の命を受け咸陽を指して進發せり。劉邦は沛公と稱せられ、後に漢の高祖となれる人にて、蕭何張良等これを助けぬ。項籍進みて大に秦軍を破り、其の將章邯等を降しゝかば、威名諸將に冠たり。

項籍
劉邦

時に秦廷にては、趙高、二世皇帝を弑して、公子嬰を立てしに、嬰立ちて、趙高を誅せり。既にして劉邦進みて覇上（陝西省）に至り、秦軍これを防ぐこと能はずして、秦王嬰出で降りぬ。初め始皇帝は、其の統を千萬世に傳へむと欲せしに、此に至り、僅に三世十五年にして亡びぬ、時に我が紀元四百五十五年（孝元天皇の御代）なりき。

秦の滅亡

秦の帝系

秦の帝系

襄公（二十五世）―孝公―惠文王―┬悼武王
　　└昭襄王―孝文王―莊襄王┐
　　┌(一)始皇帝政（十二年）―(二)二世皇帝胡亥（三年）
　　└某―(三)嬰

第二章　漢楚の爭

鴻門の會

(一)鴻門の會。

劉邦既に秦を滅して、覇上に軍し、悉く秦の苛法を除きしかば、人民大に喜べり。時に項羽も、既に秦軍を降し、諸侯の兵を率ゐて來り、進みて鴻門（陝西省）に陣し、將に襲ひて劉邦を殺さむとす。劉邦これを聞きて大に驚き、自ら鴻門に至りて、項羽に謝す。項羽乃ち劉邦を饗せしに、范增この機に乘じて劉邦を殺し、後患を遺さざらむことを勸めしかども項羽遂に決せざりしかば、劉邦間を得て覇上に脫れ歸れり。これを鴻門の會といふ。

項羽の暴橫

かくて、項羽は、秦の降王嬰を殺し、又秦の宮室を燒き、始皇帝の冢を堀き、寶貨を收めて、東に歸り、嘗て擁立せし懷王を尊びて義帝となしゝが、尋で項羽、自立して西楚の覇王と稱せり。又天下の地を分ちて諸將に與へ、劉邦を漢中に封じ、秦の降將章邯等をして、其の東出の路を拒絕せしめ、劉邦をして、また力を天下に伸ぶること能はざらしめぬ。

漢の三傑

(二)漢の三傑。

劉邦は、先づ秦を滅したるに、却りて項羽の爲に制せられて、漢中僻陬の地に封ぜられしかば、大に怒りて、項羽を攻めむとしたれども、蕭何の諫に從ひ、漢中に在りて、兵食を整へぬ。蕭何最も理財に長ぜり。是れより先、張良も亦劉邦に從ひ、常に傍に在りて、謀略を運らせり。蕭何、更に韓信を薦め

漢楚の戰

て大將となしぬ。此の蕭何張良韓信の三人を漢の三傑と稱す。」

(三)漢楚の戰。　漢王劉邦、先づ韓信をして、章邯等を伐たしめ、次第に兵を東に進めぬ。時に項羽、義帝を弑せしかば、漢王項羽の罪を鳴して、これを討ちたれども、項羽は無雙の英雄なれば、漢王、反りて屢敗られぬ。既にして韓信魏趙燕齊を破りてこれを降しゝかば、漢王勢を得たり。又陣平の計を用ひて、反間を放ち、項羽をして、范增を疑はしめしかば、范增憤りて死せり。是れより楚漸く衰微せり。

漢楚の和

(四)楚の滅亡。　かくて漢軍の勢は、日に加はりぬ。而して韓信は、兵を進めて楚を擊たむとせしかば、項羽乃ち漢王と約し、天下を二分せんと乞ひしに、張良陣平等漢王に說きて楚軍の飢え疲れたるに乘じて急に擊たしめ、韓信も亦來り會せしかば、項羽を垓下(安徽省)に伐ちて、大にこれを破れり。項羽走りて烏

楚の滅亡

江に至り、事の爲すべからざるを知りて自殺せり。此に於て、天下は全く漢王の掌中に歸しぬ。項羽兵を起しゝより、こゝに至るまで八年、又漢と相爭ふこと五年にして亡びぬ。時に我が紀元四百五十九年なりき。

第三章　前漢

高祖の創業

(一)高祖の創業。　漢王劉邦天下を平げて帝位に即けり。これを漢の高祖とす。高祖は、寬仁大度の人にして、微賤より起りて、終に天下を一統し、數百年の基業を創せり。是の時、春秋戰國に繼ぐに、暴秦を以てしたる後なれば、天下疲弊し、文物破壞せるを以て、高祖は、即位の初め、都を長安に定め、悉く秦の苛法を除きて、法律を寬にせり。其の政治の組織を觀るに、秦の孤立し

て滅亡を招きしに鑑み、周と秦との制度を折衷して、封建と郡縣との制度を并せ用ひ、子弟功臣を各地に封じて、藩屏とし、其の間に漢室の公領地を置けり。

功臣の誅除

(二) **功臣誅除。** 高祖に從ひて、功を立てし者多かれども、その能く終を完うせし者甚だ少なかりき。韓信は、百戰の功あり、天下平定の後、楚王に封ぜられぬ。然るに、讒に遇ひて淮陰侯に貶せられしが、後また反を謀ると告る者ありしかば、捕へられて殺されぬ。彭越は、梁王に封ぜられ、英布は、淮南王に封ぜられて、共に功臣なりしが、又みな殺されぬ。張良は、中ごろ官を辭して退隱し、獨り蕭何のみ、高祖の終まで仕へたり。

匈奴の侵寇

(三) **匈奴の侵寇。** 秦の時、長城を築き、蒙恬を遣して、匈奴を伐たしめしかば、匈奴、懼れて北方に退きぬ。蒙恬死して、中國にも秦末漢初の兵亂ありしかば、匈奴、その間に勢を養ひ、次第に南侵せり。匈奴の酋長を單于と號す、單于とは、なほ天子と言はむが如し。時の單于を冒頓といふ。冒頓勇武にして、匈奴の勢甚だ強盛を致し、次第に長城以南に侵寇せしゆゑ、高祖親征して、平城(山西省)に至りしに、匈奴に圍まれて殆ど危く、纔に陳平の計に由りて、禍を免るゝことを得たり。尋いで公主を單于に賜ひて、和親を結びしかども、匈奴の侵寇は、終に止まざりき。

呂氏の亂

(四) **呂氏の亂。** 高祖の皇后呂氏は、高祖創業の時より艱苦を共にせしかば、高祖崩じ、惠帝立つに及び、皇太后として政を執り、權勢甚だ熾かりき。惠帝在位七年にして崩ぜり。太后、乃ち宮人の子を立てゝ、自ら政を執り、遂に呂祿呂產を始めとして多くの呂氏を王に立て、其の勢殆ど劉氏を滅さむとす。此に於て、高祖の封じたる劉氏の諸王は、大に憤り、太后崩ずるに及びて、齊王先づ兵を起し、陳平周勃も亦內より起りて諸呂

を誅し、高祖の子（惠帝の弟）代王恒を迎へ立つ、これを孝文皇帝といふ。

賈誼の治安策

鼂錯の上言

七國の反

(五) 七國の亂。

文帝賢明、仁儉を以て、下を率ゐ、肉刑を除き、土木を止め、田租を輕減せり。初め高祖の封ぜし諸王は、呂氏の亂後、漸く驕恣に赴き、文帝の時には、既に反を企つる者あり。是れ漢室の爲に、最も憂ふべきところなれば、賈誼治安策を上りて、其の第一に、諸侯の力を删小して、制し易からしむべきことを上言せしに、文帝も漸次其の意見を採用せむとせり。

文帝崩じて、景帝立つに及び、鼂錯また頻に諸侯の力を分ちて、禍根を除くべきことを勸めしかば、景帝これに從ひ、吳及び楚趙膠西等の地を削る。吳王遂に反して兵を擧げ、膠西膠東菑川齊南楚趙の六國、これに應じ、鼂錯を殺さむことを名とせり。景帝乃ち周亞夫をしてこれを征せしむ。亞夫は、周勃の子にして、

年號の初

文敎隆興

當時の名將なれば、大に吳楚等七國の兵を破りてこれを平定せり。而して此の間に、鼂錯は、讒に遇ひて殺されぬ。是れより景帝は、益、諸侯の力を删減して、これを抑制せしかば、漢室の威權、漸く天下に行はれぬ。

(六) 漢初の文敎。

景帝の次には、武帝位に即けり。始めて年號を立てゝ建元といへり。武帝は、雄才の人にして、內は、文敎を盛にし、外は、武威を輝せり。今先づ文敎の事を述べて、次に武威に及ばむ。

秦は、書を焚き、儒者を坑にし、苟も古書を手にする者あらば、輙ち之れを罰せり。漢起りて、高祖の時は、百事草創の際にて、未だ文敎を興すに及ばざりき。惠帝に及び、挾書の律を解き、文帝景帝に至り、大に儒者を貴べり。武帝に至りては、前代富强の餘を受け、即位の初め、主として賢良方正の士を擧げ、大學を設けて、

専ら儒學を興せり。當時經術にては、董仲舒、孔安國等あり、文藝にては、司馬遷、司馬相如等あり、其の他、文學の士輩出せり。此の後、支那の政治道德の標準は、全くこれを儒教に取りしは、武帝の功といふも不可なきなり。

匈奴を伐つ

(七)武帝の武威。　武帝、兵力を四境に用ひて、大に境土を廣め、武威を輝せり。初め高祖の時、匈奴の冒頓單于と和せしかども、冒頓死して、老上單于嗣ぎ、次に軍臣單于嗣ぎて、共に屢漢の境上に侵入せり。武帝立つに及び、衛青及び霍去病を遣し、匈奴を討たしむること、前後十餘回にして、これを漠北に驅逐せり。是れより匈奴遠く遁れ去りぬ。

朝鮮
鮮卑
烏桓

匈奴の東方に鮮卑烏桓朝鮮等あり。武帝兵を遣して先づ朝鮮を征服し、これを四部とせり。なほ朝鮮の沿革は、後に言ふべし。鮮卑烏桓は、上古に東胡といひし蒙古族にして、匈奴の冒頓單于に破られて、東に走り鮮卑山を保ちたるものを鮮卑といひ、烏桓山を保ちたるものを、烏桓といふ、何れも終に漢に服屬せり。

西域諸國

匈奴の西邊より、葱領以内の地方に、數多の國あり、是れ等を總稱して西域諸國といふ。漢族の、始めて能く西域諸國と交通を開きしは、武帝の時なり。初め今の甘肅省地方に在りし月氏は、匈奴の老上單于に破られて、西に走り、伊犁地方に至りしに、再び匈奴の附庸たる烏孫に破られしかば、今のアラル海の南方に居を定め、大月氏と稱せり。大月氏の東北には、大宛あり。大宛の北には康居あり。大月氏は、漸く其の南方なる大夏を征服して勢強大となりぬ。

西域との交通

武帝、張騫を使ごして、大月氏に遣しぬ。張騫途中にて匈奴に執へられしかども、逃れて大宛に至り、康居に至り、又大月氏に至

りて歸れり。張騫歸りて、西域の豐富及び風俗等を奏し、且つ大夏の西に安息（古の波斯）あり、南に身毒（即ち印度）あり、共に奇物多く、又蜀より身毒を通ずべきを言へり。是れより西域諸國と使節相通じ、彼我物産の交易も行はれ、文化にも多少の影響ありしことは疑ふべからず。

南越

秦の時、南越を平げて戍兵を置きしに、秦の亂るゝに及び、趙佗といふ者、自立して南越王となれり。南越の外に、閩越東甌等あり。漢の時に及び、屢相戰ひ、反服常ならざりしかば、武帝に至り、兵を遣して、これを征服せり。南越は、趙佗の王となりしより、五世九十三年にて亡びぬ。

巴蜀地方

又南越の西方、巴蜀の地方には、蠻夷甚だ多く、其の君長數百あり。中に就き、夜郎・滇・邛都・冉駹等、最も大なり。武帝の時、悉く其の地を幷せて郡縣にせり。

武帝の晚年

(八)武帝の晚年。　武帝は、四方の蠻夷を征服し、又遠く西域諸國と交通を開き、大に漢室の威力を發揚したれども、外征の爲に、國用甚だ多きが上に、帝、神仙の說を信じ、長生の術を求め、或は四方に巡狩して、神仙を求め、或は樓閣を營みて、神仙の居となし、大に奢侈を極めたりしかば、府庫全く空乏せり。由りて租稅を重くして、人民を苦め、又官を賣り、紙幣を造りなどせしかば、盜賊各地に起り、天下頗る騷擾せり。されど、晚年巫蠱の亂ありしより、帝大に悟る所あり、悉く苛法を除き、弊政を革めき。

霍光の輔佐

(九)宣帝の中興。　武帝崩じて、昭帝立ちしかども、幼少なりしかば、大將軍霍光（霍去病の異母弟）、遺詔に由りて、これを輔けぬ。霍光は、忠厚の人にして、心を盡して帝を輔け、國家疲弊の後を承けしが故に、人民の窮乏を賑し、賦役を輕くし、專ら民力を休養せむことを謀れり。帝、在位十三年にして崩ぜしかば、霍光、昌邑王

漢室中興の主

賀を立てしに、君德なかりければ、霍光大に憂ひ、更に群臣と議して宣帝を迎へ立てぬ。宣帝は、武帝の曾孫にて、實に漢室中興の主と仰がれたる明德の君なり。（昭帝の時、蘇武、匈奴より歸りき。蘇武は武帝の時匈奴に使して抑留せられ、大に艱苦すること十九年にして歸りぬ）宣帝、幼より民間に在りて、能く下民の疾苦を知りしかば、位に即くに及び、心を政治に盡し、朝廷には、霍光を始め、魏相丙吉等の賢相あり、地方にも、良吏多かりき。帝また刑獄を明かにし、信賞必罰にして、吏は、其の職に協ひ、民は、其の業に安ぜり。

宣帝の內治

宣帝の武威

宣帝の內治は、已に述べしが如し。而して帝は、また武帝の遺圖を繼ぎて、大に國威を匈奴及び西域に輝せり。宣帝の時に至り、既に東北の烏桓、西方の烏孫（今の新疆）等、みな使を遣して降附せり。然るに匈奴、兵を出して烏孫を攻めしかば宣帝、大軍を發し、烏孫と共に匈奴を伐ちて、大にこれを破りぬ。匈奴是れより衰弱して漢の邊境を侵さず。後には、匈奴二國に分裂して、呼韓邪單于と郅支單于とになりしが、呼韓邪單于は、藩臣と稱して漢に入朝し、郅支單于も、遂に使を遣して入朝せり。かくて西域の諸國も、續々として來り屬せしかば、都護府を置きて、西域三十六國を管せしめぬ。

宦官外戚の專橫

(十) 王莽の簒立。

宣帝の次には、元帝成帝、相繼ぎて立ちぬ。初め高祖、後代を慮り、同姓を封じて藩屏となしゝに、此の藩屏、一時は却りて漢室の禍を爲しゝかども、幸にして七國の亂後、諸侯大に分裂して、漢室の權大に振ひぬ。又武帝より宣帝に至りては、遠く匈奴、西域を威服するに至りしが、尋いで內憂漸く生じ、宦官、外戚、互に軋轢して、終に漢室を覆すに至れり。

初め霍光、宣帝の時、外戚となりて、其の戚族、朝に滿ちしに、終に宣帝に誅滅せられたり。元帝の時、外戚史高、宦官石顯、共に結び

て朝政を恣にせり。成帝に及び、石顯を斥けて、宦官の勢を除きしかども、外戚王鳳、權を專にし、其の五弟みな列侯となりぬ。尋いで王鳳の後姪王莽政を執れり。

王莽の簒奪

王莽邪智陰險にして、賢を禮し、學を勉めしかば、大に人望を得たり。成帝崩じ、哀帝平帝相繼ぎて位に即きしが、王莽遂に平帝を弑し、宣帝の玄孫嬰を立てゝ諸政を專にせり。當時劉氏の諸侯は、甚だ微弱にして、これを制すること能はず、王莽遂に漢室を簒奪して、國を新と號せり。前漢は、十二世二百十年にして亡びぬ、時に我が紀元六百六十八年（垂仁天皇の御代）なり。

王莽の失政

(二)王莽の滅亡。

王莽位に即きしより、諸制を革め、州縣の境界を變じ、新貨を鑄造し、又諸種の稅を課せしかば、人民みな漢の德を慕ひて、天下騷然たり。且つ外交にも失敗多く、匈奴邊境を擾し、西域諸國も、都護を殺して背き、其の他、東方及び南方の蠻夷もみな背けり。

昆陽の戰

かく王莽は、內外とも人心を失ひしかば、反者各地に起り、赤眉・綠林の兵を始めとして、漢の宗室劉縯劉秀の兄弟起りて新を伐ち、劉秀は、大に新軍を昆陽（河南省）に破りしかば、四方の豪傑競ひ起りて、これに應ぜり。漢軍進みて長安に入り、王莽を誅しぬ。王莽帝と稱すること、十五年にして亡びぬ。劉秀、なほ諸方の兵を平げ、終に諸將に推されて帝位に即けり、是れ即ち後漢の光武皇帝なり。

前漢の帝系

前漢の帝系

(一)高帝劉邦（八年）
(二)惠帝盈（七年）　呂太后（攝政八年）
(三)文帝恒（二十二年）
(四)景帝啓（十七年）
(五)武帝徹（五十四年）
(六)昭帝弗陵（十三年）
戾太子據
史皇孫進
(七)宣帝詢（二十五年）

- (八)元帝奭（セキ）十六年
  - (九)成帝驁（ガウ）二十六年
    - (一〇)哀帝欣 六年
    - (一一)平帝衎（カン）五年
    - 定陶王康
    - 中山王興
    - (一二)孺子嬰（エイ）三年
  - 東平王

前漢＝西漢
後漢＝東漢
諸方平定

第四章　後漢

(一)後漢の興起。

光武帝は、前漢景帝の六世の孫なり。王莽を滅し、諸將の勸によりて帝位に即き、洛陽に都せり。前漢の都は長安に在りしかば、前漢を西漢と稱し、後漢を東漢とも稱せり。「時に赤眉の賊、長安に入りしかば、兵を遣して、これを平げ、又隗囂を隴西に、公孫述を蜀に破りて、これを平げしに、河西（甘肅省）の竇融等畏れて來り降り、天下全く平定せり。

文教隆興

光武帝、王莽の新政を改めて、漢の舊に復し、武事を偃せて、文教を興し、柔を以て、剛を制せむとせり。故に西域使を遣して內屬を乞ひたれども、これを謝絕し、匈奴を討たむと乞ふ者ありしかども、これを許さゞりき。而して大學を興し、禮樂を修め、また高節の士を重じ、文物粲然たり。

光武帝崩じて明帝立つ。また學校を盛にし、文學を重じ、吏もまた其の人を得たり。たゞ帝は、苛察の人なりしゆゑ、人みなこれを恐れぬ。次に章帝立つに及び、寬厚にして、禮樂を重ぜしかば、朝野みなこれを喜び、海內無事なりき。

西域征討

(二)後漢の外交。

光武帝は、外國と事あらむを厭ひたりしが、明帝章帝は然らざりき。初め匈奴及び西域諸國は、前漢の武帝宣帝の時に服屬せしに、王莽の時に及びてみな背けり。光武帝の時に當り、匈奴は、南北に分れ、其の勢大に衰へぬ。然るに、西

班超

太秦

匈奴

鮮卑

域の諸國は、大半匈奴に通ぜしかば、耿秉の策を用ひ、先づ西域を伐ちて、匈奴の應援を絶たむと欲し、班超を西域に遣して、これを討たしめぬ。班超先づ鄯善王をして匈奴と交を絶たしめ、更に進みて諸國を征服せしかば、西域また漢に通ぜり。

章帝の時、西域の五十餘國、質を納れて漢に屬せり。是れ全く班超の力に據りしなり。超西域に在ること、前後凡そ三十年なりき。また嘗て使を太秦に遣せりといふ。太秦は羅馬なり。當時羅馬は、常に支那に通ぜむと欲せしかども、波斯に遮られて志を果さず、班超の遣しゝ使者も羅馬に至らずして歸りぬ。

是れより先、匈奴は、次第に衰弱し、南匈奴既に内附し、北匈奴も、四方に敵を受けて、國内大に亂れ、單于は遠く北方に逃れしかば、五十八部の匈奴みな漢に服屬せり。この頃、鮮卑次第に匈奴の地を占領して強盛となりぬ。

外戚宦官の專横

外戚竇憲

宦官鄭衆

外戚鄧氏

外戚閻氏

(三)外戚宦官の專横。

章帝の次に、和帝位に即けり。初め光武帝、前漢の衰亡に鑑みて、深く外戚宦官等の參政の弊を防ぎしに、和帝の時に至り、再び其の禍の萌芽を兆しぬ。

和帝即位の時は、未だ十歳なりしかば、母の竇太后政を聽き、太后の兄竇憲を始めとして、其の族の要職に任用せらるゝもの多く、頗る專横なりしかば、帝稍長ずるに及び、宦官鄭衆と謀り、竇憲に迫りて自殺せしめ、悉く竇族を斥け、鄭衆をして、代りて政を執らしめぬ。是れより宦官專横の弊を生ぜり。

和帝の後、殤帝位に即きしが、幾許ならずして、崩ぜしかば、鄧太后其の兄鄧隲と謀り、僅に十三歳の安帝を立て、政權を專らにせり。帝また宦官の力によりて、鄧氏を斥けしに、帝の皇后閻氏の族、宦官と相倚りて奸邪を爲せり。揚震といふ賢者、時事の非なるを憂ひ、上書してこれを諫めしかども用ひられず、却りて

宦官孫程

外戚梁氏

宦官單超

清節の士

讒に遇ひて自殺せり。

安帝の次に、順帝立ちしが、宦官孫程等、閻氏及び其の黨を斥けて政を專にす。皇后の族梁氏も專横にして、次の冲帝質帝の間に、梁冀專横を極め、終に質帝の聰慧を惡みて、これを弑するに至れり。桓帝立ちて益專横なりしかば、帝、宦者單超等と謀りて梁氏を滅せり、是より宦官また大に專横を極めぬ。

(四)清節の士。　外戚と宦官とは、互に漢室を亂し、梁氏の誅滅せられし後には、宦官の凶暴日に甚だしかりしかば、清節の士起りて、これを排斥せむと企てたり。

初め光武帝、大學を興し、文敎を奬勵せしかども、その方針老莊に偏する所あり。清節の士は、實に其の結果に成れりと謂ふも可なり。桓帝の時に當り、陳蕃李膺等を始めとして名士多く、大學の諸生もこれに應じて時政を非議し、宦官を見ること仇讐の如し。遂に宦官の黨を案して罪を正しゝかば、宦官怒りて膺等を讒し、『膺等は、大學の諸生と黨して、朝廷を誹り國家を亂さむとす』と奏せしゆゑ、帝怒りて膺等二百餘人を獄に下しぬ。これを黨人の獄といふ。此の獄によりて、膺等の名聲は、益顯れ、人々みな其の氣節を高しとし、三君八俊等の名目を立てゝこれを稱せり。

黨人の獄

清節の士の敗亡

桓帝崩じ靈帝立ちて、陳蕃竇武李膺杜密等用ひられ、密に宦官を誅滅せむと謀りしに、謀泄れ、却りて陳蕃以下の名士百餘人殺害せられ、其の他清節の黨人六百人、或は死刑、或は禁錮に處せられしかば、清節の士も全く敗亡し了りぬ。

(五)漢末の擾亂。　漢室大に亂れしかば、群雄各地に起り、是れより天下の騷亂、久しく絶えざりき。長角といふ者、妖術を以て、人民を惑し、兵を起しゝに、其の徒數十萬に及び、みな黃巾を

黄巾の賊

外戚何氏

袁紹、宦官を絶す

董卓の専權

着けしゆゑ、これを黄巾の賊といふ。曹操等起りて、長角を討滅したれども、是れより盜賊各地に蜂起せり。

霊帝崩じ、子辨位に即きて、太后何氏政を聽き、太后の兄何進大將軍たり。何進、袁紹と謀り、四方の猛將を徵して、宦官を誅滅せむとしたりしに、謀泄れて、進は殺されたれども、袁紹兵を勒して、宮中に入り、宦官二千餘人を殺して、悉く其の黨を滅せり。已にして董卓といふ者、何進の命に應じて、洛陽に至りしが、袁紹と意見合はず、辨を廢して獻帝を立て、何太后をも弑して、政を專にせり。是れより州郡の兵、袁紹を盟主として、董卓を伐ちしかば、董卓遂に郡を長安に遷して、これを避けたれども、終に殺されぬ。

是の時に當り、袁紹曹操劉備孫權等を始めとして、群雄各地に據り、互に攻略し、漢室の威令は毫も行はれず、天下は終に魏吳

後漢の滅亡

後漢の帝系

蜀三國分立の勢となり、漢は魏の曹丕（曹操の子）の爲めに亡されぬ。後漢統を傳ふること凡そ十二世百九十六年にして、時に我が紀元八百八十年神功皇后攝政の御代なり。

後漢の帝系

前漢 景帝 ― 發 ― 買 ― 外 ― 回 ― 欽

武帝

(一)光武帝劉秀 三十三年 ― (二)明帝陽 十八年 ― (三)章帝炟 十三年 ― (四)和帝肇 十八年 ― (五)殤帝隆

(二)明帝陽 十八年 ― (五)殤帝隆

(三)章帝炟 十三年 ― (六)安帝祐 十九年 ― (七)順帝保 十九年 ― (八)沖帝炳 一年 ― (九)質帝纘 一年

(三)章帝炟 十三年 ― (六)安帝祐 十九年 ― (七)順帝保 十九年 ― (八)沖帝炳 一年 ― (九)質帝纘 一年 ― (一〇)桓帝志 二十一年

(三)章帝炟 十三年 ― (六)安帝祐 十九年 ― (七)順帝保 十九年 ― (八)沖帝炳 一年 ― (九)質帝纘 一年 ― (一〇)桓帝志 二十一年 ― 蠡五侯翼 ― 解瀆亭侯淑 ― 同　萇 ― (二)靈帝宏 二十二年 ― (三)獻帝協 三十一年

清河王慶 ― (六)安帝祐 十九年

千乘王伉 ― 樂安王寵 ― 渤海王鴻 ― (九)質帝纘 一年

河間王開 ― 蠡五侯翼 ― (一〇)桓帝志 二十一年

第五章　三國　魏呉蜀

曹操

孫堅
孫策
孫權

(一)三國の分立。　漢室亂れ、黄巾の賊起りしとき、曹操、これを討ち平げて、英名を擧げぬ。曹操は、沛國の人にて、字を猛德といふ。董卓を伐ちしとき、袁紹を盟主とし、孫堅等と共に力を合せたりしが、已にして互に乖離し、曹操は次第に勢を得て、遂に袁紹等を滅し、自ら亟相となりて政權を執り、天子を挾みて四方に號令せり。

長沙の大守孫堅早く戰死し、其の子策嗣ぎしに、策もまた不幸にして人に暗殺せられ、策の弟權代り立ち、魯肅周瑜等の名臣を用ひ、江東を占領して、父兄の志を成せり。孫權字は仲謀、沈重にして果斷の人なりき。

劉備

三國の分立

諸雄の交戰

是れより先、涿郡の人劉備、字は玄德といふ者、關羽張飛等と共に兵を起せり。備は前漢の景帝の後なりといふ。寛厚にして大志あり、漢室を興復せむことを期せり。

曹操孫權劉備の外に群雄なほ多かりけれども、次第に滅亡に歸し、此の三人のみ、能く一方に割據して、國を立てたれば、これを三國の分立といふ。

(二)三國の交戰。　袁紹は、冀州に據りて、雄を張りしに、曹操と官渡（河南省）に戰ひて敗れ、尋いで病歿せしかば、曹操乃ち冀州を平げ、北方一帶の地を領せり。劉備は、初め曹操に歸せしが、既にして曹操を誅せむことを謀りけれども、却りて曹操に敗られて、袁紹に歸し、袁紹敗るゝに及びて、荆州の劉表に據り、諸葛亮（字は孔明）を得て、其の說を用ひ、三國鼎立を畫策す。是の時、孫權は江東を據有せり。既にして劉表卒し、其の子劉琮、曹操に降りし

赤壁の戰

かば、劉備は江陵に走れり。劉備、諸葛亮を遣して、救を孫權に求めしむ。孫權、魯肅の言に從ひ、周瑜をして三萬人を督せしめ、劉備と力を并せて曹操を逆へしむ。曹操八十萬の大軍を率ゐて、赤壁(湖北省)に至る。周瑜火攻の策を以て、大にこれを破りしかば、曹操繞に免れて走り還れり、これを赤壁の戰といふ。

天下三分

劉備是れより荆州を得、關羽をしてこれを守らしめ、自ら益州を取り、尋いで蜀より漢中を領し、自ら漢中王となれり。此に於て、曹氏は、江北の地に據り、孫氏は、江南に據り、劉氏は、巴蜀に據りて、天下全く三分せられぬ。時に關羽の威勢甚だ盛なりしかば、曹操孫權等これを恐れ、共に結びて關羽を攻殺せり。

關羽の死亡

魏帝—曹丕

是の時に當り、曹操は、漢室の政權を專にし、魏公より魏王に進みしが、未だ全く其の志を達せずして卒し、子丕立つ。に及び、終に獻帝に迫りて位を簒ひ、高祖文帝と稱し、國を魏と號し、洛陽に都せり。尋いで漢中王劉備も、群臣の勸めによりて、帝位に即く。これを蜀漢の昭烈帝といひ、成都に都せり。次に孫權も吳王より、遂に帝位に即き、太祖皇帝と稱し、建業に都せり。此の魏蜀吳は、即ち謂はゆる三國なり。

蜀帝—劉備

吳帝—孫權

諸葛亮

蜀の昭烈帝は、關羽の殺されたるを以て、吳に向ひて、仇を復せむと欲し、大兵を發して吳を伐ちたれども、志を得ず、遂に吳と連和す。既にして昭烈帝崩じ、後皇帝立つ。諸葛亮、遺詔を受けて、これを輔け、外は吳と親み、內は國政を修め、魏を伐ちて、中原の地を取らむと欲し、自ら兵を率ゐて、屢、魏を伐ちぬ。號令嚴明にして、軍隊の整齊、戎陣の奇法、古今第一と稱せられ、魏の名將司馬懿も、恐れて出で戰はざりしが、亮終に志を得ずして、陣中に

司馬昭の專權

蜀の滅亡

魏の滅亡

吳の滅亡

病死せり、蜀是れより振はずなりぬ。

(三)三國の滅亡。

蜀、既に勢を失ひて、吳もまた兵を魏に加ふること能はざりき。由りて魏は、遼東を討ちて、これを平げ、威を東北に振へり。既にして司馬懿政を專にし、其の子師に至りて、廢立を行ひ、師卒し、其の弟昭、晉公に封ぜられ、專權益、甚だしく、遂に弑逆を行へり。

蜀は、亮の歿せしより、其の勢益、微なり。魏の司馬昭、兵を遣して、これを伐ちしに、後皇帝出で降りしかば、蜀漢二世四十三年にして亡びぬ。(我が紀元九二三神功皇后攝政の御代)是より先き、司馬昭、晉王に進みしが、尋いで卒し、子炎立ち、魏の元帝に迫りて、位を禪らしめ、晉の世祖武皇帝と稱す。魏、五世四十六年にして亡びぬ。(蜀漢の亡び)時に吳なほ江南一帶の地を有ちしが、魏の亡びしより十六年にして、又晉に滅されぬ。吳、四世五十二年なり。

三國の帝系

兩晉の形勢

三國の帝系

- 蜀
  - 前漢の景帝……(一)昭烈帝劉備二年——(二)後主禪四十一年
- 魏
  - 曹操
    - (一)文帝丕七年
      - (二)明帝叡十三年
        - (三)廢帝芳十四年
      - 東海王霖
        - (四)廢帝髦二年
    - 燕王宇
      - (五)元帝奐十年
- 吳
  - 孫堅
    - 孫策
      - (一)太帝權二十四年
        - (二)廢帝亮六年
        - (三)景帝休六年
        - 南陽王和
          - (四)歸命侯皓十六年

第六章　兩晉及び五胡十六國

(一)兩晉の形勢。

晉の武帝、魏の禪を承けて、帝位に即き、洛陽に都す、これを西晉と稱す。尋いで吳を滅して、久しく亂れた

りし海内を一統せり。然るに其の後、内亂外寇相繼ぎて起り、終に胡人に滅されぬ。されど、晉の宗統再び起りて江東に據り、帝業を起す、これを東晉といふ。然るに、當時は、胡夷中國を擾亂して、天下非常の紛雜を極め、謂はゆる五胡十六國の興亡となり、東晉も終に亡びて、南北朝分立の世となれり。今其の變遷を左に述ぶべし。

八王の亂

(二)八王の亂。　武帝は、晉室の藩屏たらしめむと欲し、大に宗族を封ぜり。されども吳を平げしより、また心を武備に用ひず、日々遊宴を事とし、邊境の防を忽にして、異日の紛亂を馴致せり。武帝崩じて、惠帝立ちしに、暗愚にして、皇后賈氏權を專にし、失政益〻多かりき。汝南王亮朝に入りて、政を輔け、頗る專横なりしかば、楚王瑋をして、これを誅せしめ、尋いで又瑋を誅せり。此に於て趙王倫、兵を起して、賈后を弑せり。是れより齊王冏成都王穎河間王顒長沙王乂東海王越等迭に起りて、骨肉相屠り、東海王越、帝を奉じて洛陽に歸り、漸く事なきを得たり。これを八王の亂といふ。

竹林の七賢

この頃老莊の學を旨とし、虛無を貴び、飲酒を縱にし、また禮法を顧みず、常に世事を愚弄せしもの多かりき。中に就き、山濤嵇康阮籍阮咸向秀王戎劉伶を竹林の七賢と稱す。

諸胡の侵入

(三)諸胡の侵入。　後漢の末より、三國の時に及び、匈奴鮮卑等の諸胡、漸く塞内に侵入せり。晉の武帝の時、天下を一統したりしかば、其の威に乘じて、諸胡をも驅逐すべしと勸めたる者ありしかど、武帝これを聽かず、終に中國の大患を爲すに至れり。晉室に八王の亂ありて、中國大に亂れしかば、これに乘じて諸胡の侵入するもの益〻多かりき。

淡(劉淵)

劉淵は、南匈奴の後にして文武に通じ、聲望甚だ高く、遂に大單

于となり、國號を漢といひ、自ら漢王と稱せり。懷帝の時、更に帝と稱し、平陽(山西省)に都す。淵殂して、子聰立ち、益南下して晉境に迫れり。

成(李雄)

是れより先、氐種の李雄、蜀の地を略して、勢を張り、劉淵と同年に成都に入りて、成都王と稱し、尋いで、帝位に即きて、國を成と號せり。

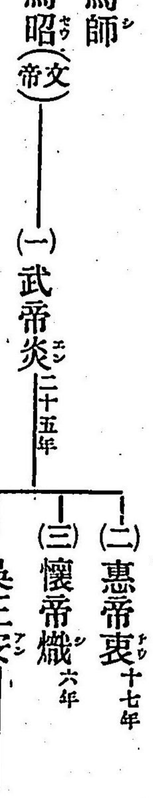
慕容廆
拓跋猗㐌

鮮卑は後漢の末より、大に勢を得しが、中に就き慕容氏拓跋氏最も著る。こゝに至り、慕容廆といふ者諸部を從へて、大單于と稱せり。又拓跋氏も次第に勢を得しが、猗㐌といふ者、西方の地三十餘國を從へて、拓跋氏强盛の基を開けり。

西晉の滅亡

(四)西晉の滅亡。　漢の劉聰立つに及びて、劉曜石勒等を遣して、大に晉軍を破り、洛陽を陷れ、懷帝を執へ、後これを弑せり。」愍帝、長安にて即位し、漢兵を拒ぎたれども利あらず、遂に劉曜の爲に、長安を陷られ、愍帝出で降り、西晉は、武帝より、凡そ四世五十二年にして亡びぬ。

西晉の帝系



東晉の興起

(五)東晉の興起。　西晉既に亡びたれども、司馬懿(宣帝)の曾孫睿といふ者、王導等の輔佐に由り、江東に據りて、帝位に即き、建業に都せり。これを東晉の元帝といふ。西晉東晉は、もと同族なれども、帝都の位置によりて、かく稱せるなり。

王導の輔佐

(六)その內亂。　王導、能く元帝を輔け、又務めて人材を登庸し、中原を恢復せむと謀りたれども、內には王敦の反あり、外に

王敦の反

蘇峻の反

前趙（劉曜）

後趙（石勒）

魏（冉閔）

は胡族強盛にして、天下意の如くなること能はず、纔に江東を有せしのみなりき。王敦は、王導の從兄にして、功を恃みて驕恣の行あり、久しく不臣の志を抱きしが、明帝の代に至り、遂に兵を擧げたれども、誅滅せられぬ。その後成帝の代に至りて、又蘇峻の反あり。一時は、帝都を犯して、其の勢盛なりしに、溫嶠陶侃等の力に依りて、これを滅せり。

(七) 五胡の形勢。

漢は、劉聰殂して、太子粲立ちたれども、弑逆に遇ひ、劉曜位を繼ぎて、長安に都し、國號を趙と改む。これを前趙といふ。趙の臣石勒自立して、別に國を立て、趙王と稱す。これを後趙といふ。石勒は、羯種の人なり。劉聰と共に聰の父淵に仕へて英名あり。當世の偉人なりしかば、遂に劉曜を滅し、北方を幷有して、帝と稱せり。勒殂して、其の子弘立ちしに、勒の從子虎、これを弑して自立し、鄴（河南省）に都して、屢諸方を征したれど

前燕（慕容皝）

前秦（符健）

後秦（姚萇）

五胡十六國

も、其の死後、國亂れて、冉閔の爲に滅さる。冉閔自立して、國號を魏と稱せしに、間もなく燕に滅されぬ。

是れより先、鮮卑の慕容廆、大に强大を致して、諸方を征服せり。廆殂して、子皝燕王と稱し、東は高勾麗を伐ち、南は後趙の兵を破り、北は宇文氏（鮮卑の族）を滅せり。皝殂して、其の子儁立つに及び冉魏を滅し、鄴に都して、帝と稱す、これを前燕といふ。

氐種の蒲洪といふ者、群氐を威服せしが、後趙の石虎の時、姓を符と改め、羌種の姚弋仲と、關中の地を相爭へり。其の子健に至り、長安に入りて、自ら帝と稱し、國號を大秦と稱す。これを前秦といふ。姚氏は、弋仲死して、其の子襄立ち、秦と戰ひて、敗死せり。襄の弟萇、秦に降りしかば、後に自立して秦王と稱す。これを後秦といふ。

前趙の劉氏は匈奴、後趙の石氏は羯、前燕の慕容氏は鮮卑、前秦

の符氏は氐、後秦の姚氏は羌なり。これを總稱して五胡といふ。此の後、前秦は、大に勢を得て、殆ど江北を一統せむとせしかども、淝水の戰に大敗して、江北再び分裂せり。この間、國を建て、帝と稱し、王と號するもの、前後十六國ありしゆゑ、これを五胡十六國といふなり。

成漢の滅亡

桓溫

(八)淝水の戰。　東晉は、成帝より康帝を經て、穆帝の世に至り、桓溫を用ひて、中原を恢復せむことを謀れり。桓溫は、豪爽の人なり。是れより先、蜀に據りたる成國の李氏は、國號を漢と改稱せしが、李勢政を失ひしかば、桓溫西征して、先づこれを滅せり。

かくて溫は、更に北方を征略せむと欲し、兵を率ゐて秦の符健を長安に圍みしに、利あらずして歸り、後、燕を伐ちて、又敗北せり。時に穆帝崩じて、哀帝立ち、哀帝崩じて、その弟奕立つに及び、

前秦の強盛

淝水の戰

溫陰に異謀を蓄へ、奕を廢して、簡文帝を擁立し、威權を恣にせしかども、次の孝武帝の時に至りて、遂に病歿せり。桓溫の歿後、謝安政を輔けて、名相の聞え高かりき。

是の時に當り、秦の符健既に殂し、子生立ちしに、暴虐なりしかば、從弟堅、生を弑して自立せり。堅、王猛を用ひて、國勢益〻強大を致し、東、燕を滅し、南、晉と戰ひて、江北の地を取り、西、前涼（其の先は、西晉に仕へたる張氏にして、涼州に據り王と稱せし者なり）を滅し、北、代を征せり。代は拓跋氏の據有せし北方一帶の地方なりしが、是の時、內亂ありしかば、堅これを伐ちて、二部に分てり。かくて、慕容氏姚氏も亦皆秦に服屬せしかば、江北殆ごその有に歸し、秦の勢甚だ盛になりぬ。

堅、深く王猛を信用したれども、猛、堅に先だちて卒す。卒するに臨み、『晉を圖る勿れ』と遺言せしに、堅、自國の强盛に驕り、戎卒六十餘萬、騎兵二十七萬を發して南侵せり。晉の將謝石（謝安の弟）謝玄

江北の再亂

（謝安の姪）等、これを淝水（安徽省）に迎ふ。秦軍、衆多なれども、固より烏合の種族にして、且つ慕容氏姚氏等、機を見て、其の舊業を恢復せむとの希望あれば、人心統一せず。これに反し、晉軍は、上に謝石謝玄の如き名將あり、且つ精鋭の軍隊なれば、一戰にして秦軍大敗し、堅狼狽して長安に還る。これを淝水の戰といふ。

（九）江北の再亂。　淝水の大敗によりて、秦王符堅の慾望は達せざるのみか、既に一統したりし江北も、忽ち四分五裂を致し、慕容氏姚氏を始めとして、各方に割據して、國を立てたる者甚だ多く、淝水の戰後、十餘年にして、堅、捕殺せられ、國遂に滅亡せり。今淝水の戰の前後に勃興せし十六國を左に表示すべし。但し十六國は、同時に興起せるあり、前後に滅亡せるもありて、頗る錯雜すれども、今見易からむが爲に、國名の類似によりて記すべし。

五胡十六國の表

五胡十六國

一 趙	前趙	劉淵	匈奴
	後趙	石勒	羯
四 燕	前燕	慕容皝	鮮卑
	後燕	慕容垂	同
	南燕	慕容德	同
	北燕	馮跋	漢人
三 秦	前秦	符健	氐
	後秦	姚萇	羌
	西秦	乞伏乾歸	鮮卑
五 涼	前涼	張茂	漢人
	後涼	呂光	氐
	南涼	禿髮傉檀	鮮卑
	北涼	沮渠蒙遜	匈奴
	西涼	李暠	漢人
成（漢）		李雄	氐
大夏		赫連勃々	匈奴

右の外、冉魏(冉閔)西燕(慕容冲)は、國を立てゝ間もなく亡びしゆゑ、列國に數へず。

後魏の勃興

前秦の衰へしより、代の拓跋珪起りて、其の國を回復し、國號を魏といひ、皇帝と稱す。これを後魏の道武帝といふ。再傳して太武帝に至り、終に北方の諸國を征服して、これを一統せり。時に我が紀元一千〇九十九年なり。

(ロ) 東晉の滅亡。

晉は淝水の戰に大捷を得たりしかば、謝安、その勢に乘じて、中原を經略せむと謀りしに、孝武帝驕惰に流れ、飲酒に耽り、且つ會稽王道子、政を專にし、紀綱大に亂れぬ。

道子の專權

既にして謝安は病卒し、孝武帝は宮人に弑せられ、子安帝立ちたれども、道子の父子、政を專にして、國亂を生ぜしむるに至れり。

桓玄の擧兵

孫恩及び桓玄(桓溫の子)等兵を起し、殊に桓玄は、建業に侵入して、道子及び其の子元顯を殺し、安帝に迫りて、位を禪らしめ、劉裕といふ者、賊を討ちて、悉くこれを平げ、安帝の位を復せり。

東晉の滅亡

是れより劉裕の勢力、强盛に赴き、再燕後秦を滅して、晉の政を專にし、遂に安帝を弑して、恭帝を立て、東王となりしが、尋いで恭帝の禪を受けぬ。これを宋の高祖武皇帝といふ。東晉は、凡そ十一世百四年にして亡びぬ。時に我が紀元一千〇八十年(允恭天皇の御代)なり。

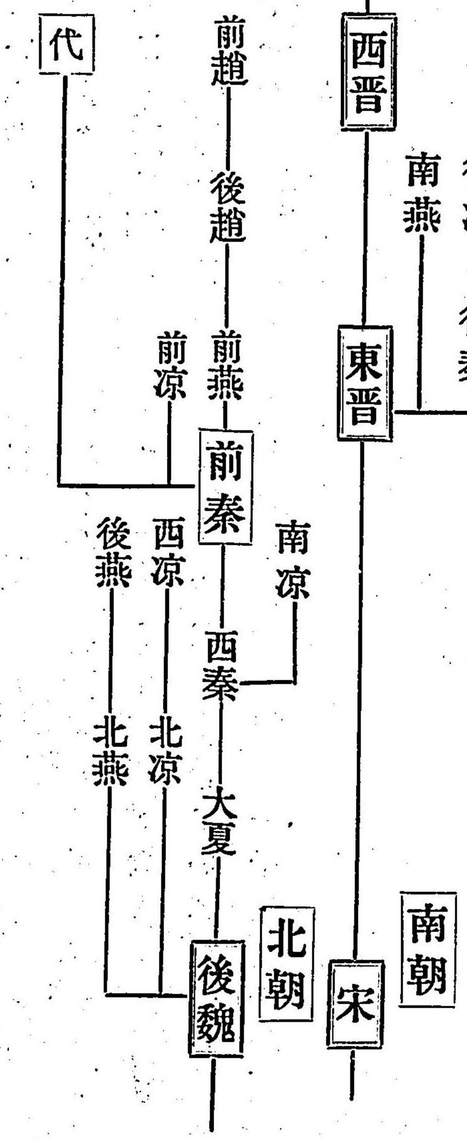
東晉の帝系

東晉の帝系

- 司馬懿(宣帝)
  - 司馬昭(文帝)
    - 西晉
  - 瑯琊王伷
    - 覲
- (一)元帝睿(六年)
  - (二)明帝紹(三年)
    - (三)成帝衍(十七年)
      - (六)哀帝丕(四年)
      - (七)廢帝奕(五年)
    - (四)康帝岳(二年)
    - (五)穆帝聃(十七年)
  - (八)簡文帝昱(二年)
    - (九)孝武帝曜(二十四年)
      - (一〇)安帝惠(二十二年)
      - (一一)恭帝德文(二年)

五胡十六國の興亡表

(二)五胡十六國の興亡表。西晉の武帝、海内を一統したれども、再び亂れて五胡十六國の騷亂となりしは、既に述べたり。今其の興亡幷呑を見易すからしめむが爲に、これを圖表に製して左に示すべし。



南北兩朝

兩朝の相傳

兩朝の表

第七章　南北朝

(一)南北朝の形勢。劉裕、已に晉の禪を受けて、南方を一統し、宋國を立てしに、北方にては、後魏の拓跋珪、次第に强勢に赴き、終に北方一帶を占領せり。是れより宋を南朝といひ、後魏を北朝といひ、更に興亡變遷ありて、兩朝の攻伐、久しく打ち續けり。

南朝は、宋の後、齊梁陳相傳へて、終に隋に征服せられ、北朝は、後魏久しく雄を張りしが、遂に東魏西魏に分れて、相對立し、東魏は、北齊に傳へ、西魏は後周に傳へて、尙對立せしに、北齊は遂に後周に幷せられ、後周は隋に滅されぬ。されば南北兩朝は、隋に至りて一統せられしなり。

宋

齊

梁

(二)南朝の興亡。　宋の高祖武皇帝は、在位僅に三年にして崩じ、文帝に及び、兵を南に出して、林邑等の諸國を征服し、又北に向ひて魏の地を伐ちしかば、魏の太武帝、自ら將ごして來る、其の兵百萬と號せり。宋の軍大に破れ、魏軍、追躡し、江に至りて歸りしかごも、其の殺掠極めて甚しかりき。是れより宋の國勢振はず。簒弑相繼ぎ、終に權臣蕭道成に滅せらる。道成國を齊と號す、これを太祖高皇帝といふ。宋は、統を傳ふること八世五十九年なり。(我が紀元一一三八)

齊の太祖は、深沈大度の人なりしが、其の崩後、弑逆相繼ぎて、國政又大に亂れ、終に蕭衍に、帝位を簒はる。これを梁の高祖武帝といふ。齊は統を傳ふること七世二十二年なり(我が紀元一一六一)。

梁の武帝は、もと齊と同族にして、漢の蕭何より出でたりといふ。學を好み、文を能くし、篤く佛敎を信奉せり。是の時に當り、北

陳

後魏

方の後魏は、東魏西魏に分れて、頗る亂れしかば、武帝は、東魏と和せり。已にして侯景といふ者反して武帝を臺城に圍みしに、武帝憂憤して崩せり。是れより內亂相繼ぎ、又西魏の侵入ありて、國內大に亂れしかば、王僧辨陳霸先等、侯景を誅して、內亂を鎭定せしかごも、陳霸先は、王僧辨を殺して、遂に簒奪を行ふ。これを陳の高祖武帝といふ。梁は統を傳ふること四世五十六年なり。(我が紀元一一二一七)

陳は武帝の後、三傳して宣帝に至り、兵を江北に出したれども志を得ず。次の後主叔寶に至り、暴虐にして、政事を顧みず、國民みな怨嗟せり。遂に隋の爲に滅されぬ。陳は統を傳ふること五世三十三年なり。(我が紀元一二四九)

(三)北朝の興亡。　後魏の始祖は、拓跋珪にして、道武帝と稱す、もと鮮卑の族なり。次の明元帝太武帝、みな勇武にして、四方

を征服し、終に北方を一統せり。又兵を柔然及び西域に出して、威を振ひ、南采を伐ちて、江上に至りて歸れり。太武帝より二世を經て孝文帝に至り、大に漢族の文學を尊び、禮樂を制し、學校を建て、鮮卑固有の風俗の野卑なるを嫌ひ、國服をも、國語をも改め、都を洛陽に遷し、又國姓を元と改めぬ。かくて魏の國運は大に隆盛に赴きたれども、極盛は、やがて衰運の基とかや、文運の隆興は、漸く優柔奢侈の風を養成せり。

後魏の極盛

孝文帝崩じて、宣武帝立ちしに、此の頃より國勢漸く浮華に流れ、又佛教、儒學、大に行はれ、其の後には、弑逆絶ゆることなく、遂に爾朱榮といふ者出でゝ、國亂を平げたれども、政權を恣にして、不軌を圖りしかば、誅せられぬ。尋いで高歡、兵を起して、洛陽を攻めむとせしかば、時の天子孝武帝、長安に出奔して宇文泰に據りぬ。由りて高歡は、別に天子を擁立して、鄴(河南省)に都せり。

魏の二分

此に於て魏は、二分して、東、鄴に在るを東魏といひ、西、長安に在るを西魏といふ。かくて兩魏相爭ひしかば、南方は頗る無事なるを得たり。

北齊

東魏の政權は、高歡の手に在り。歡屢、西魏の宇文泰と戰ひて、互に勝敗あり。其の子洋、遂に簒奪して、帝位に即く。これを北齊の文宣帝といふ。

後周

西魏の實權は、宇文泰に在り。泰國政を整へ、官制を改め、東、東魏と戰ひ、南、梁を攻めて、威を張れり。されど、專横にして或は弑逆を行ひ、或は廢立を行ひ、其の子覺に至りて、遂に西魏の帝位を簒奪す。これを後周の孝愍帝といふ。

兩魏の滅亡

魏は、凡そ十世百四十九年にして、東西に分れ、(我が紀元一九四)東魏は、一世十七年、(我が紀元一二一〇)西魏は四世二十四年(我が紀元一二一七)にして亡びぬ。

北齊の文宣帝即位の後、心を政事に留めず、次第に淫虐を爲し

北齊の滅亡

しかば、國勢振はず。後主に至り、南陳の兵を蒙りて、數郡を失ひ、西、後周の兵を受け、遂に其の爲に滅されぬ。五世二十八年なり。（我が紀元一二三七）

後周の滅亡

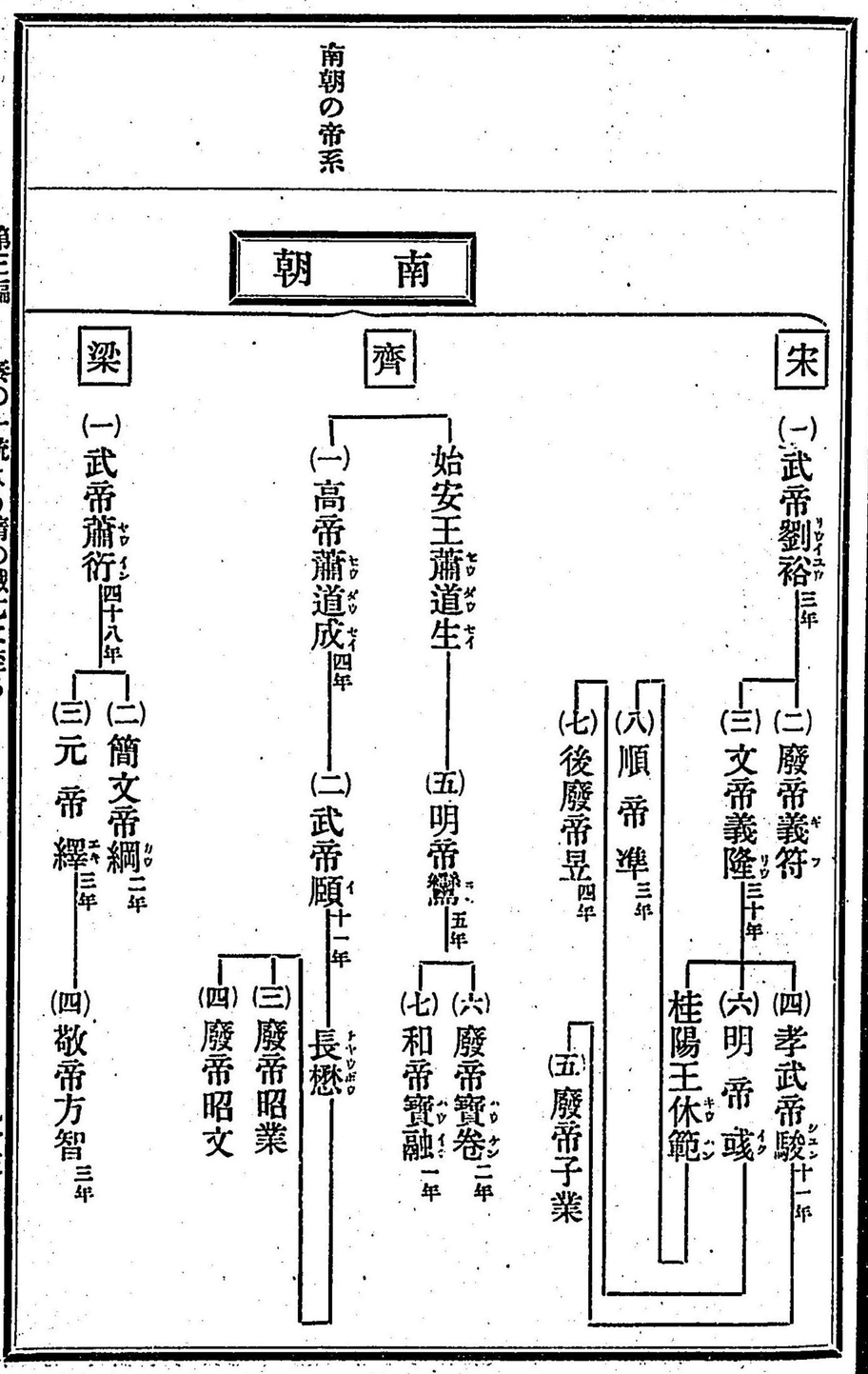
後周の孝愍帝及び明帝共に宇文護（孝愍帝の兄の子）に弑せられしかば、武帝これを誅して、弊政を改め、國勢を振起し、遂に北齊を滅し、又陳を伐ちて、北方を一統せり。然るに武帝崩じ宣帝立つに及び、皇后の父楊堅政を專にし、次の靜帝に至り、堅遂に帝位を簒奪す。これを隋の高祖文皇帝といふ。後周は、五世二十五年にして亡びぬ。（我が紀元一二四一）

隋の一統

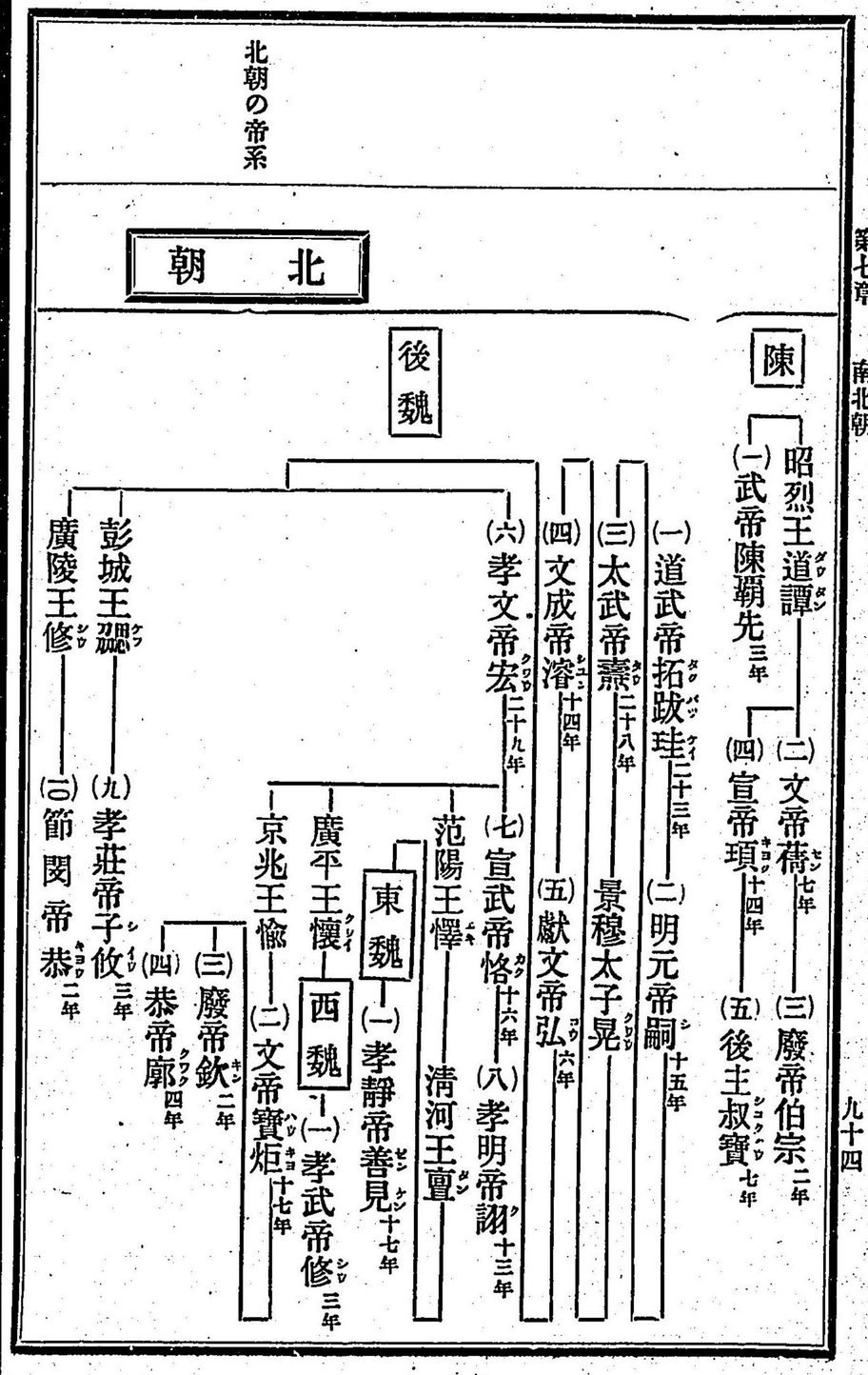
かくて、隋は、北方を一統せしが、更に南方の陳を滅して、久しく擾亂せし南北兩朝を一統す。時に我が紀元一千二百四十八年（崇峻天皇の元年）なり。

南北兩朝の帝系

南朝の帝系



北朝の帝系



隋一統の功

第八章　隋

(一)隋の隆興。

漢末より南北朝に至るまでの騷亂は、恰も周末の春秋戰國の如く、强弱大小、相呑噬して、また人倫の道義を顧みず、國を奪ひ君を弑するが如きことは、敢てこれを怪む

者なかりき。されば人民も久しく塗炭に陷れるが如き苦をなせりしに、隋の高祖文皇帝能くこれを一統し、且つ心を政事に用ひ、勤儉を以て、下を率ゐ、官制を改め、刑律を寛にし、農桑を奬め、百姓を愛ゐゝ如きは、其の功もまた大なりと謂ふべし。

煬帝の驕奢

煬帝、文帝を弑して位に即けり。我が推古天皇の朝に、小野妹子を隋に遣されしも、帝の時なりき。帝は、奢侈を好み、土木を起し、帝都は長安なれども、別に宏大なる宮殿を洛湯に營みて、游宴の用とし、又處々に離宮四拾餘所を置き、其の往來に便せむとて、大溝渠を穿てり。其の溝渠は、終に黄河楊子江を貫き、南は杭州（浙江省）より、北は琢郡（直隷省）に達せり。かくて、巡遊を事とし、日々驕奢に耽りしかば、大に天下の人心を失へり。

諸方の征伐

(二) **外交。**　文帝の時、北方の突厥と和親を結びたりしに、煬帝、更に南は林邑を征伐し、西は吐谷渾等を服從せしめて、西域に通じ、東は高勾麗（今の朝鮮の地）を諭して、入朝せしめむとしたれども、從ばざりしかば、煬帝、自ら百餘萬の大軍を率ゐて、これを伐ちしに、大敗して還れり。

高勾麗征伐の失敗

かく、内には弊政起り、外には大軍を發して、功なかりしかば、百姓困窮して、反賊處々に起れり。尋いで、煬帝、再度高勾麗征伐の軍を起したれども、國内已に亂れたれば、志を達せずして引き歸れり。

(三) **隋の衰亡。**　是の時に當りて、天下再び群雄割據の世となり、或は王と稱する者あり、或は帝と稱する者あり、隋の威令は、また天下に行はれずなりぬ。既にして唐公李淵といふ者、其の次子世民の勸によりて兵を起し、諸郡を征服して、長安に入る。時に煬帝は、江都に在りしかば、李淵、恭帝を擁立し、尋いで其の禪を受く。これを唐の高祖といふ。既にして煬帝、其の下に弑

群雄蜂起

唐公李淵

隋の滅亡

せられ、李淵は、更に群雄を伐ちて、悉く天下を一統せり。隋一統の業を保つこと僅に三世三十七年にして、時に我が紀元一千二百七十七年（推古天皇の御代）なり。

隋の帝系

隋の帝系

(一)文帝楊堅（二十四年）——(二)煬帝廣（十二年）——太子昭——(三)恭帝侑（一年）

第九章　朝鮮

朝鮮の開闢

(一)開闢。

隋の煬帝の征したる高勾麗とは、今の朝鮮の北方半部をいふなり。而して其の開闢より、今の朝鮮に至るまでの變遷を尋ねなば、頗る錯雜せるものあり。今左に其の上古の要を述べむ。

朝鮮の開闢說は、甚だ漠然たれども、傳ふる所によれば、檀君といふ者、始めて國を朝鮮と號し、平壤に都せりといふ。こは支那の堯舜の頃なりといへば、我が國の神代の早き頃なり。かく開闢は、太古にあれども、史蹟は、久しく不明なりき。

箕子

古朝鮮

箕氏亡ぶ

衛滿

(二)古朝鮮。

朝鮮太古の史蹟は、明瞭ならざれども、支那の諸種族と關係ありしは疑ひなく、我が日本とも往來ありしなるべし。殷の紂王の亡ぶるに當り、箕子、殷の民凡そ五千人を率ゐて朝鮮に入り、平壤に都し、教育を施し、德政を布き、人民みなこれを戴きて、禮讓を重ぜり。是れ即ち古朝鮮國なり。されども其の德化は、なほ未だ南部に及ばず、今の黃海道以北の地に限れり。

箕子より四十代の孫を否といひ、秦に屬せしが、其の子準の時に、秦大に亂れ、支那東北部の燕齊趙等の民、亡げ來る者多かりき。燕の人衛滿も來りて箕準に屬せしに、遂に箕準を逐ひて自

漢に討滅せらる

立せり。こゝに至りて、箕氏亡びて衞氏の代となりぬ、時に我が紀元四百六十七年（孝元天皇の御代）なり。衞滿、勇敢にして、近傍を征服し、頗る勢を得たりしかども、其の孫右渠に至り、前漢の武帝に討滅せられぬ。是れより漢は、其の地を眞番臨屯樂浪玄菟の四郡とせり。されど、能く漢の支配を受けしは、僅に五十餘年なりき。

三韓

(三)三韓。　漢江以北の沿革は、右に述べたる如し。而して漢江以南には、馬韓辰韓辨韓の三國ありて、これを三韓と號す。馬韓は、最も大にして、半島の西南部に在り、辰韓は、馬韓の東に在り、辨韓は、辰韓の南に在りて、其部內各數國に分れぬ。

三國の興起

(四)三國。　前漢の末に當り、三韓にては、新羅百濟の二國、漸く强大となり、北部は、前陳の如く、漢の郡縣となりたれども、久しからずして、高勾麗國起れり。新羅は、辰韓辨韓の地にして、百濟は、馬韓の地なり。かくて、新羅百濟高勾麗の三國、鼎立の形勢となりたれども、なほ前稱を襲ぎて三韓と稱せり。

新羅

新羅の祖先は、朴氏にして、朴赫居世といふ者、始めて王と稱せり。（我が紀元六〇四崇峻天皇の御代）今の慶尙道の地を占め、禮節を敎へ、農桑を勸め、國家能く治れり。其の後、賢君相繼ぎて出で、國愈鞏固になりぬ。

高勾麗

高勾麗は、大略古朝鮮の地にして、今の平安咸鏡黃海三道の地なり。其の王業を創めしは、新羅より二十年の後なり。是れより先、古朝鮮の北方に、扶餘國あり。我が紀元六百二十四年（崇峻天皇の御代）其の王子高朱蒙（カウ）といふ者、其の兄弟に惡まれ、逃れ來りて、高勾麗國を建つ。是れ即ち高勾麗建國の初めなり。一時は、國勢盛にして、北は鮮卑、西は漢を侵畧し、又扶餘國をも破りしことあり。されど、後漢の光武帝の時には、其の爲に、幷呑せられたり。

百濟

百濟の祖を温祚といひ、高勾麗王朱蒙の第三子なり。馬韓の地を征服して、國號を百濟と稱す。其の建國は、高勾麗に後るゝこと二十二年なり。

高勾麗の沿革

(五)三國の興亡。　三國中にて、高勾麗は、境域最も大なりしかども、支那と境を接せるを以て、屢、其の兵を蒙れり。後漢の光武帝の時、好を通じたりしが、幾ばくもなくして、これに背き、漢末に至り、遼東王公孫氏の兵を蒙りぬ。其の後、高勾麗は、三國(支那)の魏の將、司馬懿と力を合せて、公孫氏を滅しゝが、已にして魏と隙を生じて、又其の兵を蒙り、尋いで前秦の符堅に從屬せり。

新羅の王系

新羅の王系に、朴氏昔氏金氏の三氏あり。昔氏の奈解王のとき、

日本の三韓征服

我が神功皇后の兵を蒙り、百濟高勾麗と共に、我が國に朝貢せり。

百濟の沿革

百濟は、東方新羅に、北方高勾麗に接せり。我が國に通ぜしより、忠誠にして、常に貢獻を缺かず。漢學及び佛教を我が國に傳へしは、この國なり。佛教は、もと印度より支那に傳へたるものにて支那の晉國よりまた百濟に傳へたるものなり。曾て百濟は、高勾麗と隙を生じて、相戰ひしが、終に新羅高勾麗、相連合せしかば百濟敗軍せり。

百濟の滅亡

新羅は、三國中にて、境域最も小なりしが、制度、文物、頗る他の二國に勝れるものあり、且つ常に支那に通じ、終に唐の援兵を乞ひて、百濟を滅せり。時に我が紀元一千三百二十年にして、齊明天皇の御代なり。

高勾麗の滅亡

高勾麗は、隋の煬帝の大兵を蒙りしかども、これを却けたり。されど、その後再三唐の兵を蒙りて、終に滅されぬ。時に我が紀元一千三百二十八年にして天智天皇の御代なり。

新羅の一統

かく百濟高勾麗の二國は、唐に滅され、一時は、唐の管下に屬せ

しかども、既にして新羅これを蠶食して、終に三國を一統す。これを新羅の一統といふ。

第十章　印度

(一)印度の建國。

印度の地理

印度は、南部亞細亞に在りて、北は、喜馬拉耶山を負ひ、東西南の三面は、みな海に瀕す。內地は、肥沃にして、西北部には、印度河あり、東北部には、安日河(恒河)及びブラマプートラ河あり。是れ等の河畔には、何れも早くより人民繁殖せり。

印度の建國

印度の開闢は、支那に讓らぬ太古に在りしが如けれども、其の初めヅラビタと稱する頗る野蠻の人種棲息せり。然るに、今より大凡そ四千年以前に亞利亞人種の一部、中央亞細亞より印度の西北部なるパンヂャブに侵入して、王國を建て、終にヅラビタ人種と戰ひて、或はこれを征服し、或はこれを驅逐せり。是れより印度の文明大に進み、政治、哲學、宗教、工藝、技術等大に進歩せり。當時の著書の後世に遺れるものに「昆陀の經典」、「摩奴の法典」等あり。

四大族

(二)階級制。　亞利亞人の侵入せしより、土人を壓抑し、自然に種族の階級を生じて、四大族となり、其の別甚だ嚴格なりき。第一を婆羅門族といひ、僧族にして、祭祀、教導、學術を掌り、最上の階級に位す。第二を刹諦利族といひ、王族にして、兵權、政權を掌り、第三を吠舍族といひ、商賈、農業を掌り、第四を首陀羅族といひ、耕作、匠、牧畜等を掌り、最下の種族なり。

婆羅門教

(三)釋迦。　印度には、其の初め、婆羅門教能く行はれしかども、其の後、教學發達して、異論百出し、多くの教派を生ぜり。又婆羅門族は、大に專横を極め、國家の大權を、みな其の手に收めて、

他族を凌ぎ、社會もまた腐敗して、殆ど救ふべからざるに至れり。」

釋迦

釋迦は、名を悉達（シッダカ）曜曇（ガウタマ）といひ、喜馬拉耶山下なる迦毘羅伐窣都（カピラバストウ）國王の長子なり。其の出生の年代には、數說あれども、凡そ我が紀元一百餘年、綏靖天皇の御代にして、支那の周の靈王の時なりといふ。此の說に由れば、孔子の年代と、少しく差違あるのみなり。釋迦は、王國の太子なれば、世上の榮華は、求めて得られざるものなき程なりしかども、一は婆羅門の弊を破りて、世を救ひ、一は老病生死の苦を解脫せむと欲し、山林に遁れて、苦學し、終に婆羅門教の外に、新宗教を開き、四十餘年の間、その教旨を說けり。これを佛教といふ。

佛教

波斯王の侵入

(四) 印度の外交。　亞利亞人種の侵入以來、外交のこと少かりしが、其の後、始めて波斯王ダライアスの侵入を蒙り、印度河邊の地を掠められぬ。（我が紀元一四三、西洋紀元前五一八）當時、波斯は、西部亞細亞より、希臘の地方までを征服したる一大帝國なりしに、印度は、數王國に分れて、互に攻伐し、其の力一致せざりければ、能く波斯軍に敵すること能はざりしなり。

歷山大王の侵入

其の後、凡そ百九十年を經て、希臘の歷山大王（アレクサンダー）の侵入に遇へり。大王は、パンヂャブを略し、更に東方に進まむと欲したれども、將士みな遠征に疲れて、歸國を思ふこと切なりければ、大王も、止むことを得ずして引き去れり。尋いで歷山大王の將にして、シリア王國を建てたるセリューカスの侵入を蒙りたれども、遂に和を媾ぜり。

阿輸迦王

(五) 佛教の盛衰。　印度は、數多の王國に分れたりしが、中部東方なる摩伽陀（マガダ）國、最も隆盛なり。これを毛利亞朝といふ。其の初め王は、首陀羅（スドラ）族より起りしなり。阿輸迦（アショカ）王（阿恕迦又は阿育王の字を用ふ）は、仁慈にして、心を政事に用ひ、學術、農工等、みな隆興し、又處々に

佛教隆興

石標を立て、勅諭を刻して、人民を教へぬ。王また深く婆羅門教を惡みて、佛教に歸依し、力を布教に盡して、佛教を弘めたり。王は我が紀元四百三十五年に殂せり。

佛教兩派に分る

阿輸迦王の死後、毛利亞朝は、衰亡せしかども、佛教は、なほ行はれき。されど、其の後、婆羅門教再び勢力を得て、佛教を驅逐せり。是れより佛教南北に分れ、南方の錫蘭島に入りしを南派佛教といひ、北方の支那に入りしを、北派佛教といふ。

佛教支那に入る

佛教の支那に入りしは、已に秦の代に在りと傳ふれども明かならず。後漢の明帝の時、(我が紀元七二四)蔡愔といふ者印度に入り、佛經、僧徒を求めて歸り、其の後、次第に支那に行はれ、終に朝鮮を經て、我が日本に傳來するに至れり。されば、佛教は、其の發生、本土なる印度にては、却りて衰微し、支那に至りて、大に信奉せられ、印度には、婆羅門教、回々教等、盛に行はれたり。

第四編　唐の一統より宋の滅亡に至る

第一章　唐

唐の興起

(一)唐の興起。　唐の高祖李淵、既に隋に代りて、帝位に即き、國號を唐といふ。時に群雄なほ諸方に割據せしかども、次子世民の英武に由りて、悉くこれを平定し、支那歷代中にて、最も隆盛と稱せらるゝ唐朝三百年の基を開けり。

太宗の英明

(二)太宗の英明。　高祖の天下を一統せしは、世民の力多きに居るを以て、世民遂に高祖に繼ぎて位に即きぬ。これを太宗皇帝といふ。太宗即位の後、杜如晦房玄齡魏徵王珪等の如き名臣を用ひて、心を政事に注ぎ、仁慈節儉を以て民を率ゐ、文學を奬勵し、武備を整頓せり。故に內に在りては、國家能く治り、外に向ひては、武威遠く四表に振へり。時に年號を貞觀といひしかば、後世貞觀の治と稱す。

貞觀の治

唐の制度

官制

(三)唐の制度。

唐は、高祖の時より太宗の世に亙りて、官制、兵制より、學制に至るまで、能く整頓せり。支那の制度は、漢以來、久しく紛亂の姿なりしが、隋の一統に及びて、能くこれを整理し、唐に至りて、始めて完備せり。我が國の大化の改新には、摸範を隋唐の制に取られしなり。

(一)官制。　上に三公(大尉、司徒、司空)の官あれども、有德の任にして實務に與らず。次に尚書、中書、門下の三省あり、其の長官を尚書令(尚書省の長官)中書令(中書省の長官)侍中(門下省の長官)といひ、國政の樞機を握れり。中に就き、尚書令は、百官を總理して、其の位置最も高し。三省の外に、なほ秘書殿中、內侍の三省あり、合せて六省といふ。又尚書省の下に、吏、戶、禮、兵、刑、工の六部あり、所謂六部尚書是なり。この外に一臺(御史臺)九寺(大常寺、光祿寺、衛尉寺、宗正寺、大僕寺、大理寺、鴻臚寺、司農寺、大府寺)五監(國子監、少府監、將作監、軍器監、都水監)等ありて、諸政を分掌せり。

兵制

田制

稅制

又武官には、十六衛を置き、各衛に將軍あり。地方の制度は、天下を十道に分ち、其の下に府、州、縣あり。府には牧尹、州には刺史、縣には令ありて、地方の制令を掌れり。

(二)兵制。　天下十道の下に、六百三十四の府あり、各府に兵を備へ、將校を置き、これを京師の諸衛府に隸屬せしめて、其の中より番上宿衛せしむ。若し事ある時は、契符を下して、兵士を徵集す。其の制、簡にして整へり。然るに、中世以後、一たび破壞するや、唐室滅亡の一因となりき。

(三)田制。　男子十六歲以上、六十歲以下の者に、田百畝を班(ワカ)ち與へ、八十畝を口分田とし、二十畝を永業田とす。老人、篤疾、癈疾等の者には、其の數を減ず。

(四)稅制。　稅法に、租、庸、調の三種あり。租は、百畝の田より粟二石を出し、庸は一歲に二十日間、役に就き、役に服することなくば、

法制

一日三尺の割を以て、絹を出す。調は其の鄉土に產する絹、絁、綾の類を出す定めなり。

(五)法制。唐の法律は、十二篇より成る。刑名に笞、杖、徒、流、死の五等あり、罪の輕重によりて、これに處す。

學制

(六)學制。學校は、京師に國子學、四門學、律學、書學、算學等ありて、國子監に屬し、弘文館、崇文館ありて、門下省に屬せり。各府州縣にも學校ありて、敎育の道頗る開けたり。是等の諸學校にて成業したる學生をば、更に試驗を經て、官吏に登庸する制なり。

太宗の武威

(四)唐の外交。　太宗は、たゞ內治を整へしのみならず、武威をも四表に輝して、大に版圖を廣めぬ。其の武威の及びし所は、夐に秦漢に超え、東は朝鮮、南は林邑より、印度に及び、北は西比利亞の地方、西は西域の諸國に及べり。

三韓

前章に述べしが如く、今の朝鮮は、當時新羅百濟高勾麗の三國に分れ、隋の煬帝、高勾麗を伐ちて克たざりき。唐に至り、太宗兵を出して新羅を援け、先づ百濟を滅し、次に高勾麗を伐ちて、これをも滅し、都護府を置きてこれを治めしめぬ。是れより先、三韓は、我が日本に朝貢せしかば、是の時、我が國より兵を遣して、百濟を救ひしかごも、意を達せずして止みぬ。爾來新羅は、專ら唐に恭順を表せしに、其の後終に百濟高勾麗の地を奪ひて朝鮮を一統せり。

突厥

初め柔然、頗る盛なりしが、突厥次第に起りて强大を致し、南北朝の時、柔然を滅せり。かくて突厥は、隋の時に東西に分れぬ。突厥は都爾古族にして、匈奴の別種なり。隋天下を一統するに當り、突厥は、一時來降せしかごも、隋の亂るゝに及びて、忽ち背きて、勢威日に盛んなり。されば、唐の高祖の如きも、其の初め、兵を起すに當り、東突厥の援兵を借りし事ありき。其の後薛延陀回

紇等、突厥に叛きしがば、太宗これに乘じて李世勣李靖等を遣して、突厥を伐たしめ、其の酋頡利可汗を擒にす。是れより東突厥、唐に服從し、回紇等の諸部亦みな歸降せり。

近隣の諸國

時に西突厥は、遠く西域諸國を占領せしかば、太宗討ちて又これを破りぬ。是れより近隣の諸國、みな唐の武威を恐れ、室韋高昌吐蕃吐谷渾黨項林邑等、前後相繼ぎて來り降れり。太宗又王玄策を印度に遣し、其の諸國王を諭して入貢せしめしかども、

印度

聞かざりければ、討ちて其の一王を擒にし、更に西域の諸國を伐ちて、今の波斯東北境の地方に至るまでを服屬せしめぬ。

波斯の隆盛時代

(五) **波斯の隆盛時代。** 唐隆盛の時に當り、西部亞細亞諸國の發達盛衰を觀察せむか。

中央亞細亞に發生せし亞利亞人種の、東南に向ひて印度に入りしことは、既に前に述べたり。其の西方に向ひしものは、ユーフラテスチグリス兩河の地方に繁殖して、數國を建て、迭に興亡ありき。乃ち前を亞述巴比倫尼亞といひ、後を波斯といふ。

亞述及巴比倫尼亞の起原は、今より凡そ四千年以前に在りしが、屢變遷を經て、其の衰亡するに及び、馬太國起り、一時は頗る盛んなりしが、次に波斯國起り、其の王サイラス、馬太を滅せり。時に西洋紀元前五百五十八年(我が紀元一〇三紱靖天皇の御代)なり。是れより波斯國大に强盛に赴き、其の版圖西は地中海、東は印度河に至れり。サイラス王の子、カムビセス、埃及に侵入し、次にダライアス王、位に即くに及び、大に國政を整ひ、東、印度に侵入してパンヂャブの一部を取り、西、歐羅巴に侵入して、屢、希臘を伐ちぬ。かくて波斯の隆盛は、凡そ二百年間打ち續きしが、遂に希臘の歷山大王の爲に征服せられぬ。

サラセン帝國

(六) **サラセン帝國の勃興。** 亞細亞州西南方の大半島國を

亞刺比亞といふ。其の人種は高加索人種のセミナック族なり。初め國内は、數多の小國に分れ、互に爭ひしが、モハメット（マホメットともいふ）の出づるに及びて、形勢一變し、終に廣大なる帝國を建つるに至る。サラセン帝國是なり。

モハメット

モハメットは、西洋紀元五百七十一年（我が紀元一二三一）に生れ、同六百三十二年に歿せり。初め行商を業とせしに、四十歳に及び、一の新宗教を唱へて、國人を教化せり。モハメットは、其の宗教を弘めむ爲に、武力を用ひ、血を流すを避けざりき。遂に國内をして悉く其の教を奉ぜしめ、更に外國を征服して、其の宗教を奉ぜしめむとせしかども、遂に其の志を得ずして病歿し、其の繼續者、能く遺志を繼ぎて、東西を征服せり。

サラセン帝國の盛衰

モハメットの繼續者を、世々「カリフ」といふ。「カリフ」、兵を率ゐて西部亞細亞の諸國より、南部歐羅巴及亞非利加の北部を征服し、非常なる大帝國を建てゝ、大に其の宗教を弘布せり。其の後西洋紀元七百五十五年（我が紀元一四一五）に至りて、帝國は、東西に對立し、其の西部は、西班牙に首府を置き、東部は、チグリス河畔のバグダットを首府と定めぬ。

回教の東漸

是れより先、モハメット教、印度にも、支那にも入り、唐の太宗は、公然と其の弘布を許可するに至れり。かくてバグダットの「カリフ」は、次第に衰へ、終に土耳其人に並呑せられしかども、其の盛なる時に當りては、東西通商の中心となり、歐亞二州の交通を助けしこと多く、終に唐代には、西部亞細亞の諸國より、海路を經て、印度及支那と交通するに及べり。

武后の禍

(七)武后の禍。　唐の太宗崩じて、高宗嗣ぎ立ちぬ。高宗、太宗の遺業を繼ぎ、内治外交共に功蹟あり。されども、武氏を立てゝ皇后となすに及び、國政次第に亂れ、唐室の禍を釀せり。

武氏、性明敏にして、廣く文史に通じ高宗を助けて大に旨に適へり。高宗病によりて、政事を視ることはざりしかば、武后代り決して威權甚だ盛なり。長孫無忌、褚遂良等の良臣を貶し、又太子を廢しなどして、少しも憚るところなし。高宗崩じ、中宗立つに及びて、忽ちこれを廢し、中宗の弟睿宗を立てしに、やがて又これを廢し、宗室大臣の已れに服せざる者を殺し、自ら璽といひ、皇帝と稱し、國を周と號す。

武氏は、かく簒奪を行ひたれども、明敏にして權略に富みしかば、徐有功、魏元忠、狄仁傑等の賢人も、能くこれに仕へ、狄仁傑最も重んぜられぬ。武氏、其の姪武三思を太子に立てむと欲せしかども、狄仁傑の諫めによりて、曩に廢せし中宗を太子となせり。仁傑、張柬之を薦めて宰相となせしに、張柬之終に兵を發して、佞人等を誅し、武氏を他に遷して、則天大聖皇帝と尊稱し、中宗の位を復しぬ。武氏の周と稱せしこと、凡そ十六年なり。

韋氏の亂

(八) **韋氏の亂。** 中宗既に位に即きしに、皇后韋氏朝政に與りて、大に專恣を極め、武三思を用ひ、張柬之等の功臣を殺し、又帝を弑せり。是れより韋氏政を攝行せしが、相王（即ち曩に廢せられし睿宗皇帝也）の子隆基といふ者、兵を起して韋后及その黨與を斬り、相王をして位に即かしめぬ。これを睿宗皇帝といふ。睿宗在位三年にして、位を隆基に傳ふ。これを玄宗皇帝といふ。

開元の治

(九) **安祿山の反。** 玄宗即位の初め、大に心を政事に盡し、奢侈を禁じ、節儉を行ひしかば、國家無事なりき。且つ姚崇、宋璟、相繼ぎて政を輔け、賢相の聞え高く、後世に至り、前の房杜（房玄齡杜如晦）と此の姚宋（姚崇宋璟）とを並せ稱して、唐代の賢相となす。又時の年號を開元といひしかば、貞觀の治に比して開元の治と稱す。其の後、韓休、張九齡等の名相もありしが、李林甫代りて相となり、

頗る専横をなし、君明を蔽へり。尋いで又、楊太眞を寵し、安祿山を信任するに及び、終に大亂を釀成せり。

安祿山の反

楊太眞は、宮に入りて貴妃となりしゆゑ、楊貴妃と稱し、寵、後宮を傾く。安祿山は、もと突厥の降將なり。狡黠にして權略あり、深く楊貴妃に結びて、玄宗の信任を得、頻に官位を進められしが、終に兵を擧げて反せり。時に天下昇平久しかりければ、唐初の兵制も壞れ、人民戰を知らず、能く祿山の兵を防ぐこと能はず。祿山進みて洛陽を陷れ、大燕皇帝と僭稱せり。

勤王の兵起る

されども、隆盛なる唐室、豈一二の忠臣なからむや。顏杲卿顏眞卿郭子儀李光弼等の諸將、前後勤王の兵を起して、恢復を圖りぬ。されども、賊將史思明等の勢盛にして、長安に迫りしかば、帝出奔せり。將士みな怒りて、途に宰相楊國忠及楊貴妃を殺しぬ。尋いで肅宗皇帝位に即きぬ。

國亂平定

既にして郭子儀等、回紇の援兵を率ゐて長安を復せり。是れより先、張巡許遠、義兵を起して、屢賊軍を敗りしが、睢陽を守りて死せり。尋いで安祿山は、其の子安慶緒に殺され、慶緒は、史思明に殺され、思明亦其の子朝義に殺されぬ。時に玄宗肅宗、共に崩じて代宗位にあり、賊を討じて洛陽を復す。賊將李懷仙、朝義を殺して出で降りしかば、國亂始めて平定せり。

藩鎭の跋扈

(ロ)藩鎭の跋扈。　安史の亂に、邊備の兵をも徵集せしかば、吐藩等隙に乘じて、屢入寇せり。玄宗の時、十節度使を置きて、邊警に充て、後には、內地にもこれを置きしが、節度使みな兵を統べて、土地人民を領し、其の勢日に强大となりぬ。これを藩鎭と稱す。德宗の世に及びて、藩鎭いよ〳〵驕傲にして、其の意に充たずば、兵を擧げて、一方に據有し、或は互に黨援して、朝命に背きけれども、朝廷殆ごこれを制すること能はざりき。

憲宗の英明

德宗順宗を經て憲宗に至り、英明にして、杜黃裳の議を用ひ、果斷を以て、藩鎭を制し、節度使の反する者は、直にこれを誅し、朝命に抗する者は、悉く其の罪を正しゝかば、諸藩鎭みな畏服し、唐室の威令、また天下に行はるゝに至りぬ。されど憲宗は、晩年に及び、頗る驕恣にして、朝政を顧みず、或は神仙道士の說を信じ、或は佛骨を宮中に迎へしかば、當時、儒學及文章の大家なりし韓愈の如きは、表を上りてこれを諫めたりしかども、その功なかりき。且つこの時、宦官漸く專恣を致して、終に憲宗を弑せり。

韓愈の諫奏

學藝

(二)學藝。唐代には、學者前後に輩出して、古書の註釋大に具はり、殊に詩文は非常なる發達を爲せり。

初め、後漢の鄭玄は、博學にして、古書に詳密なる註釋を爲し、其の學說大に行はれたりしが、魏の王肅は、これに反對して、一派を爲せり。その後、王肅の學說は、重に南朝に行はれ、鄭玄のは、北朝に行はれて、學風に南北兩派を生ぜり。隋を經て、唐に至り、太宗大に儒學を奬勵し、經義の區々たるを一定せむと欲し、孔穎達顏師古等に命じ、五經正義を撰ばしめたり。安祿山の亂後、儒學やゝ衰へ、唯、韓愈等の說ありしのみなり。これを要するに漢唐は、謂はゆる訓詁註釋の學にして、眞理の講窮は、五代を經て宋以後なりとす。

儒學の南北兩派

五經正義

訓詁註釋の學

文章

詩文は、後漢の末より浮華に流れ、殊に駢儷の文專ら行はれき。唐に及びて、次第に其の弊風を矯め、殊に韓愈(字は退之)は、力を極めて、六朝以來の駢儷の文體を打破して、專ら古文を唱へ、柳宗元(字は子厚)これに次ぎて起り、全く文弊を一洗せり。

詩

詩も、唐に至りて、大に發達し、李白(字は太白)杜甫(字は子美)白居易(字は樂天)は、最も有名なりき。韓愈は、獨り文章のみならず、詩にも長ぜしか

ば、以上四人を合せて詩の四大家と稱せり。其の後、杜牧(字は牧之)出で、先の杜甫と合せて二杜と稱せられぬ。

宗教

(三)宗教。隋唐の際には、佛教、道教、回教等能く行はれ、殊に佛教は、大に隆盛に赴けり。

佛教

佛教は、後漢の明帝の時に、支那に入りし以來、印度の僧侶、支那に來り、支那の僧侶、また印度に入りなどして、佛典を翻譯し、佛教を弘布せり。唐の太宗の時、玄奘三藏、印度に入り、十餘年間の歲月を經て、經典六百十餘部を得て歸り、これを翻譯せり。是れより以前の翻譯を舊譯と稱し、玄奘の翻譯を新譯と稱す。尋いで義淨三藏も印度に入れり。

かくて、佛教は、次第に隆盛に赴き、宗派も從ひて多く、三論、法相、律、華嚴、禪、天台、眞言、淨土等、みな能く行はれぬ。各宗に名僧甚だ多く、我が國より入唐して、諸種の宗旨を學び傳へ、又支那の僧侶の日本に來り傳へし者も多し。

道教

道教とは、もと老莊の流に出づ。或は神仙不死の術を說き、或は上天羽飛の方を說きて、奇怪の說多かりしも、秦漢以來、頗る行はれたり。唐に至り、其の國姓李にして、老子の姓も李なるを以て、方士等、附會の說を立て、老子は唐の祖先なりといへり。是れを以て、道教上下に行はれ、又玄宗の時には、士民をして家毎に老子の道德經一本を藏せしめらるゝが如きに至りぬ。されど民間に在りては、其の勢力、遙に佛教に及ばざりき。

回教

回教は、唐の太宗の時、支那に入り來りしかば、廣東に一寺を建つることを許せり。其の後、亞剌比亞人の廣東地方に來りて貿易する者多かりし故、其の教、次第に弘布せり。此の宗教は、モハメットの立てしものなれども、其の後、支那西方の回人多くこれを信ぜしかば、終に回教と呼ぶに至れり。

基督教

基督教の一派「ネストリウス」の僧、太宗の時また唐に入り來り、長安に居りぬ。これを景教と稱す。こは、基督教の支那に入りし初めなり。其の後、次第に廣まりしが、武宗の時、大にこれを排斥せしかば、殆ど滅絶に歸せり。

右の外、波斯の拜火教、摩尼教なども入り來りたれども、皆盛に行はるゝに至らざりき。

(三)宦官の專横。　安祿山史思明等の亂に次ぎ、藩鎮の跋扈に由りて、唐室は、一時に頗る危かりしが、幸に憲宗の英明果斷を以て、藩鎮を畏服せしめたり。されども、宦官の專横、朋黨の紛爭、相次ぎて起りしが爲、さすがの唐室も遂に滅亡を免れざりき。

初め、太宗は、漢以來の弊に鑒み、宦官を卑位に置きしに、中宗の時より、次第に其の數を增し、玄宗の時には、三千人に及べり。德

宦官の專横

朋黨の紛爭

宗以後、宦官終に軍務に參與し、國政に與り、其の權勢、人主を凌ぐに至れり。憲宗は、宦者陳弘忠に弑せられ、穆宗繼ぎて立ちしかども、政權全く宦官に歸し、次の敬宗も亦宦官に弑せられぬ。文宗立ちて、心を政治に用ひ、前には、宋申錫を引きて、宦官を誅せむと謀りたれども成らず。後には李訓鄭注と共に謀りて、復成らざりしかば、是れより宦官いよ〳〵專横を極め、天下の事皆其の掌中に歸し、爾後の諸帝中には、たま〳〵明主ありしも、奈何ともする能はざりき。

(四)朋黨の紛爭。　穆宗の時、李德裕といふ者、翰林學士たり。德裕、李宗閔が嘗て己れが父李吉甫を譏りしを怨み、宗閔を讒して、其の官を貶せり。その後、宗閔は、牛僧孺を引きて、黨となし、宦官の助を借りて、相となり、德裕を斥けたりしかば、是れより互に黨を立てゝ相爭ひ、或は朝に入り、或は野に下り、反目益甚、甚

し。文宗の宦官を誅りし時、これに關せりとて、德裕も宗閔も、一時朝を斥けられしが、武宗の時、德裕また相となり、大に權勢を得たりしかども、宣宗の時に及びて、德裕並に宗閔僧孺の三人、相繼いで死歿し、朋黨の爭、始めて止みぬ。此の爭は、前後四十餘年に及べり。

宣宗

懿宗

(五)唐の滅亡。

宣帝英明にして、心を政治に用ひしかば、治績頗る擧れり。是の時、宦官の專横は益甚しかりしゆゑ、これを誅除せむ志ありしが、如何ともすること能はざりき。懿宗立つに及び、奢侈を好みて、賦歛を重くせしかば、人心漸く離れ、處々に反賊起りぬ。唐乃ち沙陀の力を假りて、僅にこれを平ぐることを得たり。沙陀は、西突厥の一種なり。是の時、その酋長に、名を李昌國と賜ひぬ。

黃巢の亂

懿宗崩じて、僖宗の世となり、盜賊諸方に起り、黃巢といふ者、諸州を陷れ、洛陽を奪ひ、進みて長安に入り、大齊皇帝と僭號せしかば、僖宗は、蜀に出奔せり。時に沙陀の李昌國の子に李克用といふ者あり、召に應じて來り、連戰賊を敗りて、長安を復す。尋いで黃巢その下に殺されて、亂平ぎ、僖宗、長安に還りぬ。

李克用の功

朱全忠

黃巢の將朱全忠といふ者、唐に降りしが、李克用と隙を生じて、相反目し、是れよりまた盜賊蜂起するに至れり。

僖宗崩じ、昭宗立つに及び、內には、宦官專恣を爲し、外には、强鎭跋扈し、海內、四分五裂せり。時に朱全忠の兵勢、次第に强盛に赴き、悉く宦官を誅滅して、帝を洛陽に奉じ、終に帝を弑して哀帝を立て、尋いで迫りて其の禪を承けぬ。これを後梁の太祖といふ。唐は、高祖より、凡そ二十世二百九十年にして亡びぬ。時に我が紀元一千五百六十七年（後醍醐天皇の御代）なり。

唐の滅亡

唐の帝系表

- (一)高祖淵九年
  - (二)太宗世民二十四年
    - (三)高宗治三十四年
      - (四)中宗哲四年（重祚）
      - 則天武后十六年
      - (五)睿宗旦九年（重祚）
      - (八)代宗豫十七年
        - (九)德宗适二十六年
      - (六)玄宗隆基四十四年
        - (七)肅宗亨七年
        - (十)順宗誦一年
          - (二)憲宗純十五年
            - (三)穆宗恒四年
              - (三)敬宗湛二年
              - (四)文宗昂十四年
              - (五)武宗炎六年
            - (六)宣宗忱十三年
            - (七)懿宗漼十四年
              - (八)僖宗儼十五年
              - (九)昭宗傑十六年
              - (十)哀帝祝三年

第二章　五代

(一)五代の形勢。

唐の中世以後、藩鎭跋扈し、其の季世に至りて益甚しく、終に豪傑各地に割據して、唐室を滅すに至れり。

唐室の亡びしより、後梁後唐後晉後漢後周の五代、相繼ぎて起りしかば、これを五代の世と稱し、其の間凡そ五十四年なり。されど、この頃、五國の外にも、なほ十餘の强國、各地に割據し、互に王號を僭して、爭亂止まず、天下殆ど寧日なかりき。故に五代諸國の領地は僅に江北の一部に偏在せしのみにて、其の勢力支那全體に及びしに非ざるなり。

後梁　後唐　後晉　後漢　後周

(二)後梁。

後梁の大祖を朱全忠といふ。唐の禪を受けて、位に即けり。時に、群雄各地に割據し、中にも李克用は、黃巢を平げし功に由りて、晉王に封ぜられ、最も强大なりき。大祖素より李克用と不和にして、屢、相戰ふ。克用死して、其の子存勗立ちしに、兩雄の戰爭益甚しく、梁軍多く利を失せり。既にして太祖、其の次子友珪に弑せられしかば、友珪の弟友貞、兄を殺して、位に即く。

後唐

れを末帝といふ。是の時に當り、晉軍、連勝の勢に乘じて梁に入りしかば、末帝自殺して梁亡びぬ。梁は、二世十七年なりき。

(三)後唐。李存勗、後梁を滅して帝位に即き、國を唐と號す、莊宗皇帝是れなり。帝、父克用の時より屢梁と爭ひしが、既に梁を滅し、又蜀を滅して、天下頗る定りしかば、是れより次第に驕奢の念を生じ、意を政事に用ひず。群小を近づけ、賦歛を重くせしかば、怨聲諸方に起りて、兵を擧ぐる者あり。李嗣源反するに及び、帝これを討ちて克たず、流矢に中りて崩じ、嗣源位に即きぬ、これを明宗といふ。

明宗、もと胡人にして、李克用の養子なり。寛厚にして身を慎み、國家平安なりき。明宗崩じ、閔帝立ちしに、明宗の養子從珂、位を簒ふ、これを廢帝といふ。廢帝、もと石敬塘と相善からず。敬塘遂に契丹の援兵を得て入寇す、唐兵破れて、帝自殺せり。後唐は、五

後晉

代の中にて領地最も大にして、國勢も隆盛なりと稱せられしが、四世十四年にして亡びぬ。

(四)後晉。石敬塘、後唐を滅して帝位に即き、國を晉と號す、これを後晉の高祖皇帝とす。高祖は、もと沙陀の人にして、後唐の明宗の養子なりき。其の天下を得しは、契丹の力を假りたるに由れるゆゑ、位に即くに及び、東北の地を割きて契丹に與へ、且つ毎歲多くの金帛を贈りて臣禮を執りぬ。

契丹は、もと東胡の別種なり。渤海靺鞨等の地を併せ、國勢次第に强盛に赴きぬ。耶律阿保機に至り、諸部を一統して帝と稱せり。石敬塘をして、中國に主たらしめしは、其の子德光なり。

高祖崩じて、出帝立つに及び、契丹に對して臣と稱せず、且つ書辭、毫もこれに下らざりしかば、契丹主大に怒りて入寇せり。晉軍これを防ぎて、大に敗れ、出帝擒にせらる。こゝに後晉は、凡そ

後漢

二世十二年にして亡びぬ。

契丹、既に後晉を滅し、胡騎を出して、四方を剽掠し、頗る殘酷を極めしかば、志士群起して、契丹を逐はむとせり。契丹主、中國の治め難きに驚き、兵を引きて國に歸りぬ。此に於て、劉知遠、後晉に代りて帝位に即く。これを後漢の高祖皇帝といふ。

(五)後漢。後漢の高祖劉知遠も、沙陀の人なり。嘗て晉帝石敬塘に仕へて功多く、河東の節度使たりき。契丹の主、中國の民心を失ひて、退去するに及び、帝位に即きしかども、在位一年にして崩じ、隱帝位に即く。時に王章、崇、趙思綰、李守貞の三人、共に兵を擧げて反きしに、郭威これを平定せり。是れより、帝漸く驕奢に耽り、又讒を信じて良臣を殺し、郭威をも殺さむとせしかば、郭威遂に兵を率ゐて、寃を訴へむとせしに、亂兵、帝を弑し、郭威を擁して帝位に即かしむ。これを後周の太祖皇帝とす。後漢二

後周

世四年にして亡びぬ。

(六)後周。後周の太祖即位の時に當りて、後漢の隱帝の叔父劉崇、晉陽に據りて帝と稱し、國を北漢といふ。かくて、北漢主、契丹の援兵と共に、屢、北邊に寇したれども、周の兵能くこれを防ぎぬ。既にして太祖崩じて、世宗嗣ぎしに、北漢の兵、喪に乘じて來り寇す。世宗その將趙匡胤等と共に、兵を率ゐて、これを高平に迎へ擊ちて大に破りぬ。

當時、群雄の各地に割據する者甚だ多かりしかども、世宗英邁にして、天下を一統せむ志あり。意を政事に留めて、文武を振起し、後蜀、南唐、北漢及契丹を伐ちて、次第に諸州を平定し、更に北進せむとせしが、未だ志を果さずして崩ぜり。其の子恭帝立つ、僅に七歳なり。契丹の兵入寇せしかば、趙匡胤をして、これを防がしめしに、將士遂に匡胤を擁立し、恭帝をして、位を讓らしめ

ぬ。匡亂終に後周に代る。これを宋の太祖皇帝といふ。後周は、凡そ三世十年にして亡びぬ。時に、我が紀元一千六百二十年（村上天皇の御代）なり。

五代の帝系表

- **後梁**
  - (一)太祖朱全忠（六年）
    - (二)末帝眞（十一年）汴（初名友貞）
- **後唐**
  - 李克用
    - (一)莊宗存勗（三年）
    - (二)明宗嗣源（八年）
      - (三)閔帝從厚
      - (四)廢帝從珂
- **後晉**
  - (一)高祖劉知遠（一年）
    - (二)隱帝承祐（三年）
- **後周**
  - (一)太祖郭威（三年）
    - (二)世宗榮（六年）
      - (三)恭帝宗訓（一年）
- **後晉**
  - (一)高祖石敬塘（七年）
    - (二)出帝重貴（五年）
    - 石敬儒

宋代の形勢

第三章　宋

(一)宋代の形勢。

宋、新に國を建てたれども、五代の衰運を承けたれば、國家を唐の隆盛に回復せむこと、極めて難し。時に南方は、服從したれども、北方には、契丹の如き勁敵あり、西方には、西夏新に起りて、また蔑るべからざる勢あり。此に於て、宋、先づ契丹の隣邦金と力を合せて漸く契丹を滅し得たれども、其の後は、金また次第に勢力を增して宋の禍をなすに至りぬ。

右の如く、宋は、支那の主權を占めたれども、實力は却りて常に外に在り、一旦金に滅されしより、更に江南に據りて、帝業を回復し、南宋と稱したれども、其の後は、僅に江南に偏在するのみにして、國力甚だ微弱なりき。宋金交戰の時、北方の蒙古族大に起りて、金を滅し、又其の勢力を西域諸國より歐洲に及ぼし、終

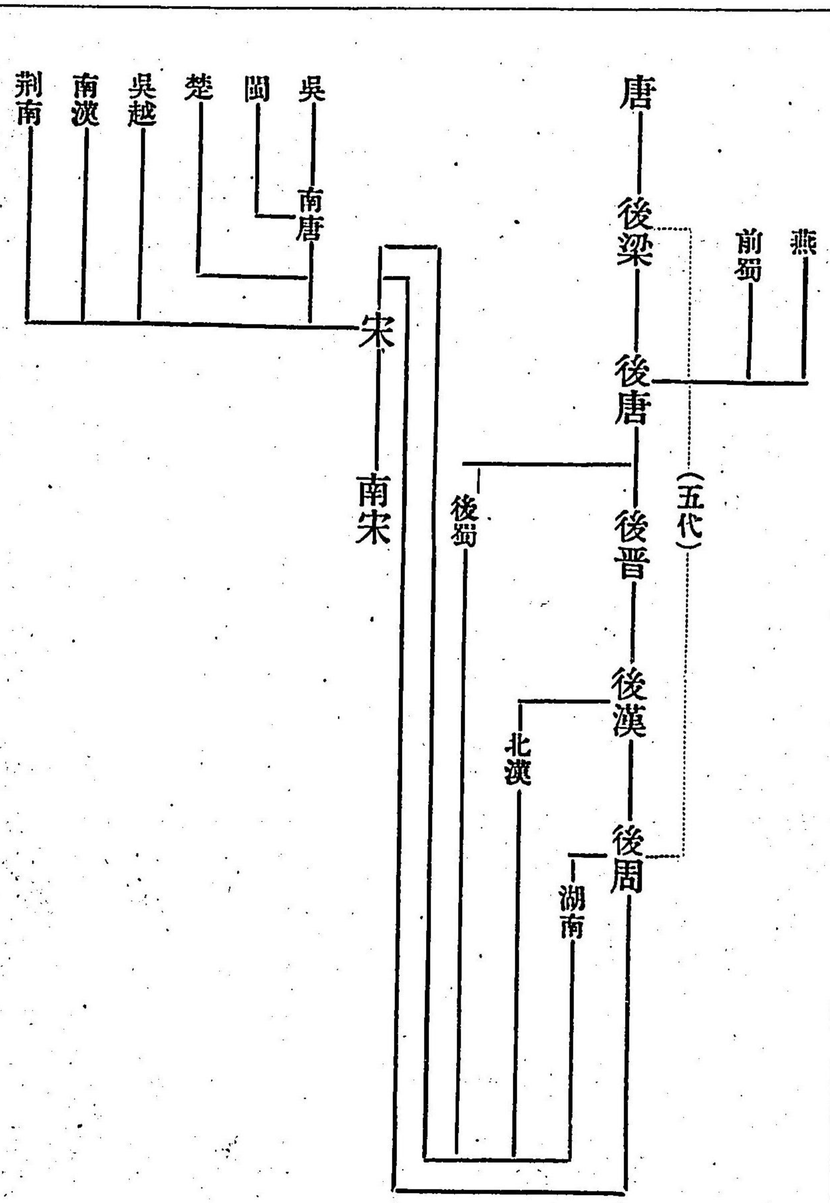
に宋朝をも滅す、元是なり。されば、宋の興起より滅亡に至る間は、東洋の形勢、頗る錯雜なりと謂ふべし。

宋の興起

(二)宋の興起。　太祖帝位に即くに及び、趙普の議を用ひて、先づ藩鎭の權を抑へ、節度使の死去、若くは致仕する者ある時は、文臣を以て、これに代へ、漸く地方の權を朝廷に收め、又諸道の驍兵を選びて、禁旅を補ひ、禁旅を分遣して、邊城を守らしめしに、宋室の威信頓に加はり、武人の暴横も次第に止みぬ。

宋の一統

かくて、內治の基礎略、整ひしかども、天下尙未だ平がず、五代以來の群雄、各地に割據せり。先づ此に於て、兵を東南に出して、荆南湖南後蜀南漢南唐を平げ、然る後、兵を北方に出して、屢、北漢を討ちしに、志を得ず。次の太宗の時に至りて、始めてこれを滅せり。今左に唐以後、諸國互に興亡して、宋に至るまでを圖表にて示すべし。



契丹の入寇

(三)契丹の入寇。　太祖崩じて、太宗立つ。太宗屢兵を出して、北漢を伐ち、終にこれを滅せしかば、更に勢に乘じて北進し、契丹と戰ひて克たず、是れより契丹屢入寇して宋の大患を爲せり。契丹は、德光より二世を經て、景宗に至り、宋と相和せしが、景宗殂し、聖宗立つに及びて、宋の太宗北伐せしかば、再び戰を交ふるに至れり。

澶淵の盟

太宗崩じ、眞宗立つに及び、契丹の聖宗、大擧して來寇し、深く內地に入る。中外大に驚き、或は江南に幸せむといひ、或は蜀に避けむといふ者あり。宰相寇準、性剛毅にして果斷あり、帝に親征を勸む。帝これに從ひ、澶州に至る。宋の軍、勢甚だ盛なりしかば、契丹氣を奪はれて、戰ふこと能はず、和を議す。帝これを許し、每歲絹二十萬匹、銀拾萬兩を、宋より契丹に與ふることを約し、宋を兄とし契丹を弟とし、各兵を解きぬ。これを澶淵の盟と稱す。

西夏

澶淵とは澶州の古名なり。

是れより寇準重く用ひられしかども、幾何もなく讒に遇ひて罷めらる。既にして眞宗崩じ、仁宗の世に至り、契丹使を遣して關南の地を求めしかば、富弼を契丹に遣して、これを議せしむ。富弼反覆論難して、地を與ふることを拒み、每歲、銀、絹各十萬を增すことを約して、和議を定めぬ。

(四)西夏の入寇。　西夏は、唐の末に、黨項の人拓跋思恭が、黃巢の賊を伐ちて功あり、唐より李姓を賜はり、夏州の治となりしに始まる。後數世を經て、李繼捧に至り、宋の太宗の時、入朝して姓を趙と賜はる。其の後、反服常なかりしが、仁宗の時、李元昊といふ者、雄武にして大略あり、諸州を併せ、自立して大夏皇帝と稱し、興慶(甘肅省)に都せり。

是れより元昊は、屢宋に入寇して、西邊を騷擾せしかば、仁宗、邊

西夏の入寇及和約

備を修め、韓琦(カンキ)・范仲淹(ハンチウエン)等を遣して、これを伐たしむ。元昊終に其の欲を逞くすること能はず、且つ兵を用ふること久しくして、國漸く疲弊せしかば、和を望む。仁宗も、亦兵を厭ひしかば、和議成り、毎歳銀二萬兩、絹二萬匹、茶三萬斤を賜ふことを約し、夏國王に封じぬ。

朋黨の爭

(五)朋黨の爭。　宋の契丹及西夏と事ありしは、右に述べしが如し。當時、内を顧みれば、學術大に開け、朝廷には、君子頗る多かりけれども、執政者屢、交迭して、遂に朋黨の軋轢を生ぜり。初め、呂夷簡(リヨイカン)といふ者、仁宗即位の時に相たりしが、皇后郭氏(クワクシ)を怨むことあり、帝に勸めて、郭后を廢せしめぬ。時に范仲淹等、其の非を論じて、反りて貶黜せられ、歐陽修(オウヤウシウ)以下これに坐して、左遷せらるゝ者多かりき。既にして呂夷簡、相を罷め、范仲淹・歐陽修等再び用ひらる。時に夏竦(カシヨウ)といふ者樞密使たりしが、其の職を罷められ、杜衍これに代りしかば、夏竦大にこれを憾み、杜衍・范仲淹等を目して黨人となせり。歐陽修、朋黨論を作りて、その非を辯ぜり。是れより兩黨相排して、黨爭益甚しかりしが、仁宗英明にして、韓琦・歐陽修等を用ひて、小人を斥けしかば、國勢能く整ひ、上下寧靜なりき。

王安石の新法

(六)王安石の新法。　仁宗崩じて英宗立ち、次に神宗位に即けり。神宗、契丹・西夏等に對して、國威を張らむが爲、王安石を用ひて、富國强兵の實を擧げむとせり。安石、博學にして文を能くせり。朝政に參與して、新法を建議し、神宗の納るゝ所となる。新法には、均輸法・青苗法・預買法・方田均稅法等、數種ありしが、青苗の法に就きては、最も議論多かりき。この法は、春、錢を農民に貸し、秋に至りて、二分の利子を附し返納せしむるなり。

新法反對者

新法は、悉く惡しきに非ざれども、急激の變化は、往々人心を害ふものなれば、これに反對する者多く、又新法の、當時に適せざるものも多かりしかば、弊害百出せり。富弼蘇轍范純韓琦司馬光呂公著程顥蘇軾等、みな新法に反對して、官を罷めらる。されど、其の後、安石も遂に朝を去りぬ。

文學

(七)文學。かく、內外多事の日に當り、當時文章の大家輩出せり。先づ歐陽修(字は永叔)出でゝ、唐末より五代の間の衰運を引き起し、これに次ぎて、蘇洵(字は允明)蘇軾(字は子瞻)蘇轍(字は子由)曾鞏(字は子固)王安石(字は介甫)等、みな文章に長ぜり。是れ等の人は、また兼ねて詩をも能くせり。又司馬光は有名なる資治通鑑を撰述したる史家なり。

(八)朝臣の黨派。神宗崩じて、哲宗位に即きしが、なほ幼なりしかば、太皇太后高氏政を聽き、司馬光を擧げ用ひ、新法の不便なるものを除きぬ。司馬光は、大に衆望を負ひ、呂公著と共に、

黨派

心を協せて弊政を改め、王安石の黨を斥け、文彥博程頤蘇軾蘇轍等を登用せり。然るに司馬光、相たること僅に八箇月にして薨ぜしかば、朝臣漸く和せず、互に黨派を立てゝ、相爭ふに至りぬ。其の黨派に、洛黨・蜀黨・朔黨の三あり、洛黨は程頤を領袖とし、蜀黨は、蘇軾を領袖とし、朔黨は劉摯等を領袖とせり。かく黨爭起りしが爲、王安石復勢力を强くせり。たまゝ太后崩じ、哲宗政を親らせしかば、安石の部下なる章惇呂惠卿等用ひられ、新法に反對せる知名の士は、みな斥けられ、既に故人となりし司馬光呂公著等をも追罰せり。

徽宗の世

哲宗崩じて徽宗位に即きぬ。帝亦幼なりしかば、皇太后向氏政を聽き、章惇等を罷めて、范純仁蘇軾等の官を復し、又司馬光等の官爵を追復せり。尋いで韓忠彥(韓琦の子)及曾布を用ひて、共に政に與らしめしに、二人相善からず。曾布、新法の黨なる、蔡京を引き

て己れの助けとせり。既にして忠彦曾布の二人、相次ぎて罷めしかば、蔡京、政權を專らにし、大に新法に反する者を貶斥せり。」蔡京、相位に在ること前後二十年にして、其の勢威甚だ盛なりき。京、徽宗に勸めて、奢侈を爲し、土木を起さしめ、國用を費し、人民を苦めしかば、宋室、大に衰頽し、外には、邊境に事多く、終に其の社稷を失ふに至れり。

金の興起

(九)**金の興起。**　金は、もと女眞と稱せり。古の肅愼靺鞨などの地なり。其の女眞と稱せしは、五代の時にあり。南部を熟女眞といひ、契丹に屬す。北方を生女眞といひ、其の初め、甚だ微弱なりしが、阿骨打に至りて大に興れり。

阿骨打、雄略大志の人なり。時に契丹は、國號を遼と改めしが、國勢頗る衰へたり。阿骨打、遂に遼を侵して、數十州を取り、國號を金といひ、皇帝と稱せり。時に宋の徽宗の世なり。

遼の滅亡

西遼

(一)**遼の滅亡。**　契丹、國號を改めて遼と稱し、宋の神宗の時、來りて地を求めしかば、王安石の議によりて、東西百餘里の地を與へたりしが、金興るに及びて、遼は次第に衰へ、屢、金の侵略を蒙れり。その後、宋金連合して遼を攻めしかば、遼軍大に敗れて、諸城を陷れられ、遼主は、西に走りて西夏に寄らむとせしに、西夏は、既に金に通じて藩と稱せりしかば、これを容れず、遼主終に金兵に捕へらる。遼、凡そ九世二百十年にして亡びぬ。時に宋の徽宗の末年にして、我が紀元一千七百八十五年（崇德天皇の御代）なり。かくて遼は、亡びしかども、阿保機八世の孫なる耶律大石といふ者、西走して西域の一部を占有し、國を立て西遼といへり。

(二)**宋の中滅。**　初め、宋金連合して、遼を滅さむことを約せしとき、事成らば、宋は十七州の地を取り、金には、從來遼に贈りた

りし歳幣を、宋より與へむことを定めぬ。然るに、既に遼を滅して、宋の受けたる地は、僅に六州にして、金はなほ歳幣の増額を求めて已まず。宋は、勉めて金の求に從ひしが、金はまた漸く南侵を謀り、宋に來寇せり。尋いで宋の徽宗は、位を欽宗に讓りぬ。

金の來寇

時に宋には、主戰説と非戰説とありて、李綱は、主戰説を主張し、李邦彦は、非戰説を固守せり。李邦彦欽宗に勸めて、莫大の金銀を與へ、又土地を割きて、和を金に請はしめしに、金人一時兵を撤せしが、やがて復來寇せり。時に宋廷にては、和を主として、兵備を設けざりしかば、圍を受くること四十餘日にして、京城陷り、徽宗欽宗共に捕へられて、宋室一時滅亡せり。尋いで金主は、二帝を擁して、北に歸りしかば、欽宗の弟康王構位に即く、これを高宗といふ。高宗江南に都せしかば、此の後を南宋と稱せり。

宋の滅亡

南宋

宋は、太祖より金に滅さるゝまで、凡そ九世百六十七年にして、時に我が紀元一千七百八十六年（崇德天皇の御代）なり。

宋と金との和戰

(三) 宋と金との和戰。

高宗立ちて、宋室を再興し、李綱を用ひて邊防を修めしが、黄潛善等、和議を主張し、李綱を斥け、帝を擁して南方に移り、臨安（浙江省）を帝都とせしに、金人、諸道より入侵せしかば、高宗、黄潛善等を罷めて主戰黨を用ひ、宗澤韓世忠等をして、これを禦がしむ。是れより先、宋の將劉豫といふ者、金に降り、金より關中の地を受けて、齊帝と號し、金軍と共に南侵せしに、韓世忠岳飛等これを破りて、金齊の軍を退けぬ。

岳飛

岳飛、忠勇にして氣節あり、屢、大功を立てしかば、高宗、精忠岳飛の四字を、旗に書して賜ひしことありき。かくて岳飛、次第に北方を經略せしかば、宋の勢頗る隆盛に赴き、人々中原の恢復を期せしに、秦檜入りて相となり、專ら和議を主張して、遂に岳飛を殺し、主戰黨を斥け、節を屈して和を講じ、歳幣として、銀絹各、

秦檜の和議

二十五萬を金に贈ることを約せり。是れより凡そ二十年間、兩國の間に事なかりき。

金主亮の南侵

此の後、金主も頗る驕惰なりしが、阿骨打の孫亮立つに及び、再び侵略を企て、盟に背き、大軍を擧げて南侵せしも、宋軍能く禦ぎて、江を渡らしめず、亮も亦其の下に殺されて、和議を爲しぬ。

孝宗の時の和約

高宗の後、孝宗位に即きしが、英氣あり、意を鋭くして恢復を圖り、大兵を發して北伐したれども、終に志を得ずして、また和約を結べり。されど、此和議に由りて、歳幣の銀絹、各十萬を減じ、又從來金に對して臣禮を執りしを止め、叔姪の國となしたれば、大に宋の國權を張れりと謂ふべし。

韓侂胄

孝宗、位を光宗に讓り、光宗位を寧宗に讓る。時に韓侂胄といふ者、頗る權勢を振ひ、宰相趙汝愚を貶し、又朱熹等の名士を斥け、驕奢を極めぬ。この時に當りて、金、蒙古の兵を受けて、國勢頗る衰へしかば、これに乘じて、北伐を企てしに、却りて大に破られしかば、宋は、韓侂胄を殺して、其の首を金に送り、且つ歳幣を增せり。

理學

周敦頤

邵雍

程顥

程頤

張載

朱熹

(三)儒學の發達。

宋に至りては、義理の學大に發達せり、これを宋の理學といふ。蓋し佛教の影響を受けて、儒學を解說せし所あらむ。

仁宗の時、周敦頤出でて理學を創說す。敦頤、字は茂叔、濂溪と號す、太極圖說及通書を著せり。同時に邵雍といふ人あり、康節先生と稱せられ、易學に精通せり。敦頤、其の學を洛陽の程顥程頤の兄弟に傳ふ。程顥、明道と號し、定性書を著す。程頤、伊川と號し、易傳を著せり。時に關中の張載も盛名あり、橫渠と號し、正蒙等の著あり。是等の門下には、學者甚だ多かりき。

其の後、數十年を經て、南宋の高宗の時に、朱熹といふ人、閩中に

起りて、理學を集成す。朱熹、字は元晦、晦庵、と號し、文公と謚せらる。易本義、四書集註、小學、近思錄等の著述あり。朱熹、久しく朝に在りしが、韓侂胄、朝に立つに及び、僞學を以て目せられ、朱熹以下、當時の名士、みな斥けらる。されど、朱熹の著書は、永く儒學者の摸範となれり。

陸九淵

朱熹と同時に、陸九淵といふ人あり。象山先生と號す、德行を主として朱熹と對峙せり。

佛敎

(四)宗敎。　佛敎は、五代の末に、後周の世宗多くの寺を廢し、又僧尼を度することを禁ぜしかば、一時大に衰へしかども、宋に至り、太祖以來、佛敎を盛にし、屢、僧侶を印度に遣し、又大藏經等の經典を印行し、又荐に經論を翻譯せしめぬ。當時、諸宗派ともに盛なりしが、禪宗最も勢力ありて、蘇東坡、朱晦庵、陸象山等の諸儒、兼ねて禪學を學べりといふ。

道敎

蒙古の勃興

乃蠻

道敎も、眞宗以來、仁宗、徽宗、みなこれを信じて、遂に道士を先生と貴びしかども、南宋に至りて、次第に衰へぬ。

(五)蒙古の勃興。　蒙古は黑龍江の上流なる斡難河と克魯倫河との間に住みし遊牧の民にして、遼及金に貢を納めたりしが、也速該に至りて、近隣を併せ、勢始めて强くなりぬ。其の子鐵木眞、雄材大略の人にして、諸部を伐ち、西は乃蠻を破り、東は韃靼を伐ちて、これを降し、斡難河上にて帝位に上り、成吉斯汗と號す。これを太祖といふ。蒙古是れより勃興せり。

(六)西夏、西遼の滅亡。　蒙古の成吉斯汗、次第に內政を整ひ、勢力甚だ盛なり。時に金、衰勢に赴きしかば、成吉斯汗諸道よりこれを攻めて、大に金軍を敗り、和を結べり。

是れより先、成吉斯汗の位に即くとき、乃蠻來りしかば、成吉斯汗怒りてこれを伐ち、其の酋太陽汗を[illegible]せざりしに、其の

西遼

子屈出律は西遼に走りぬ。西遼は、遼の族耶律大石の建てし國なりしが、屈出律遂にこれを簒へり。

西夏の滅亡

又成吉斯汗は、先づ西夏を滅して金に及ばむと欲し、西夏を伐ちて、一たびこれと和したれども、其の後、更に兵を遣して、これを滅せり。

西遼の滅亡

此の間に成吉斯汗は、西域諸國をも伐てり。西域にては、西遼の耶律大石、諸國を征服して、大に强勢を張りしが、其の死後、國勢振はず、遂に屈出律に簒はる。（西遼は蒙古にて黑契丹と稱す）既にして、宗教の爭より西遼頗る衰へぬ。時に西域には、花剌子模も、國勢盛なり。成吉斯汗先づ西遼を滅して屈出律を殺し、次に花剌子模を滅せり。成吉斯汗更に將を遣して、波斯より裏海の南方を廻り、高加索地方より、露西亞の南方に侵入せしめぬ。

(七) 金の滅亡。

蒙古の太祖崩じて、第三子窩濶台嗣ぎて帝位に即く。これを太宗といふ。是の時に當り、金は屢宋と戰ひ、國勢次第に衰頽せしかば、太宗、宋と連合して、弟拖雷と共に夾み攻めて、これを滅せり。金、凡そ九世百二十年にして亡びぬ。時に宋の理宗の世にして、我が紀元一千八百九十四年（四條天皇の御代）なり。

金の滅亡

蒙古の侵略

(八) 蒙古の侵略。

初め花剌子模の滅ぶるとき、王子札蘭丁走りて印度に入り、デルヒ王の援兵を得て、故地の回復を圖りたれども、蒙古軍に敗られ、札蘭丁も土民に殺されぬ。

かくて、太宗は、其の兄朮赤の子拔都、其の弟拖雷の子蒙哥及其の孫海都等を遣して、西方を侵略せしむ。蒙古軍、破竹の勢を以て進み、波斯アルメニア不里阿耳等を略し、進みて露國に侵入し、莫斯科府に至り、一旦南に返りしが、遂に殆ど露西亞全土を略せり。

是れより、更に軍を分ちて、拔都は、匈牙利に入り、向ふところ敵なく、多腦河を渡りて侵略せり。海都は、波蘭に入り、獨逸及波蘭の大兵をワールスタットの野に逆へ擊ちて、大にこれを破り、更に進みて諸方を侵略せり。會、太宗の訃音達せしかば、諸軍國に歸りしも、獨り拔都は、南露の地に留り鎭して、國を建てぬ。これを金黨又は欽察と稱す。其の後、二百餘年の間、歐州に勢を振へり。

蒙古にては、太宗崩じて、長子貴由立つ、これを定宗といふ。定宗在位三年にして崩じ、蒙哥（拖雷の子）代り立つ、これを憲宗といふ。憲宗の弟忽必烈、これを輔けて、國勢益盛なり。

初め波斯は、「モハメット」教主イスマイル家に治められ、其の勢、西方亞細亞に振ひしが、成吉斯汗に征服せられぬ。憲宗更に其の弟旭烈兀を遣して、これを征せしむ。旭烈兀進擊して、これを滅し、更に進みて埃乃の兵を敗り、遂に西部亞細亞に伊蘭汗帝國を建てぬ。是れより先、太祖の次子察合台の子孫、中央亞細亞に察合台國を建てしかば、この頃、蒙古の侵略地には、欽察察合台伊蘭汗の三帝國ありき。

三帝國

蒙古の南侵

(元)南宋の滅亡。

金の亡ぶるに當り、宋にては、中原復すべしと思ひ、兵を北に出したれども、利あらざりき。然るに蒙古にては憲宗、其の弟忽必烈等をして四方を伐たしめ、先づ吐蕃高麗雲南等を平げ、諸道より宋に侵入せしめぬ。時に宋の理宗は、位に在る既に久しくして、漸く政に倦みしかば、賈似道、政を執りて威權を振ひ、私に使を蒙古軍に遣し、臣と稱し、地を割き、幣を納れむことを乞ふ。會、蒙古の憲宗崩ぜしかば、忽必烈兵を引きて國に歸り、帝位に即く、これを世祖といふ。尋いで國號を大元と稱せり。

大元

賈似道の專横

宋にても理宗崩じ、度宗立つ。賈似道益政權を專らにし、正人斥けられて、小人朝に充ちぬ。元兵入寇すれども、これを力拒せず、度宗崩じ、恭宗立つに及び、元益大軍を發して來寇す。似道これを拒ぎしかども、軍衆大に潰えて退き、將士相繼ぎて元に降りしかば、恭宗、似道を貶し、詔して勤王の師を召せしに、文天祥張世傑等の義士兵を率ゐて入衞せり。

宋、元に降る

時に元兵、益進みて臨安に迫らむとす。宰相陳宣中、和を主とし天祥等に詔して、兵を罷めしめ元に降る。元兵臨安に入り、恭宗と理宗及度宗の后とを執へて、その國に送りぬ。

宋の恢復を圖る

陸秀夫張世傑等なほ恢復を圖り、端宗を立つ。文天祥も、義兵を集めて來會したれども、宋軍利あらず、尋いで、端宗崩ぜしかば、その弟昺を立つ。元將張弘範等、大軍を率ゐて來り攻む。文天祥敗れて擒にせられ、陸秀夫は、帝を擁して、崖山に逃れしが、元兵來り侵すに及び、秀夫遂に帝を負ひ、海に投じて死す。張世傑、安南に赴き、再擧を謀らむとしたれども、海上颶風に遇ひて溺死せり。元、文天祥に降を勸めたれども從はず、慨然として、國の亡びたるを嘆き、正氣の歌を作り、終に殺さる。此に南宋は、九世百五十三年にして亡び、北宋と合せて、十八世三百二十年なりき。時に我が紀元一千九百三十九年にして、後宇多天皇の御代なり。

南宋滅亡

宋の帝系表

- (一)太祖趙匡胤（キヤウイン）十六年
  - 燕王德昭　九世の孫
  - 奏王德芳　六世の孫
- (二)太宗光義　二十二年
  - (三)眞宗恒（コウ）　二十五年
    - (四)仁宗禎（テイ）　四十一年
    - 元汾（ゲンフン）
      - 允讓（インジヤウ）
        - (五)英宗曙（シヨ）　四年

- (六)神宗頊 十八年
  - (七)哲宗煦 十五年
    - (八)徽宗佶 二十五年
      - (九)欽宗桓 一年
      - (一)孝宗瑋 二十七年
      - (二)光宗惇 五年
      - (三)寧宗擴 三十年
      - (四)理宗昀 四十年
      - 福王與芮
        - (五)度宗禥 十年
          - (七)端宗昰 二年
          - (六)恭宗㬎 一年
          - (八)帝昺 一年
- 南宋
  - (一〇)高宗構 三十六年

第五篇　元の一統より明の滅亡に至る

第一章　元

元の一統

(一)元の一統。支那の主權は、上古より宋に至るまで、漢人種に在りしが、元の起るに至り、始めて蒙古族にて、支那を一統せり。蒙古は、遠く東西を征服し、世祖に至りて、國號を元と改め、宋を滅して、支那の主權を掌握せり。世祖英明にして大度あり、能く人を用ひて、其の材を盡さしむ。當時、名臣も亦多く、國勢愈盛なり。

高麗

(二)高麗。今の朝鮮半島は、新羅の一統せしより、國内能く治まりしが、其の後、國勢漸く傾き、盜賊竝び起りて、群雄各地に割據せり。其の最も大なる者は弓裔と甄萱となり、弓裔は、もと新羅王の庶子なりしが、自立して王と稱し、國號を摩震といひ、都を鐵圓(江原道鐵原府)に定め、殆ど全國の三分の二を有す。後、國號を泰

封と改めしが、其の行爲、暴虐なりしかば、其の下これに服せず、終に將軍王建を推戴して王となし、國號を高麗といふ。甄萱は、自立して王と稱し、國號を後百濟と稱せしが、高麗と戰ひて敗亡し、新羅亦高麗に滅されぬ。時に我が紀元一千五百九十五年（朱雀天皇の御代）なり。

高麗の興亡

かくて王建は朝鮮半島を征服せり、これを高麗の一統といふ。王建政事を勉め、教育を施し、富强の國となりしに、其の後、內憂外患相繼ぎて起り、屢、契丹女眞等の侵略を蒙りしが爲、初めは宋の正朔を奉じ、次に遼（即ち契丹）に屬し、遼亡びて金（即ち女眞）に屬し、元の太祖の時に至り、又其の侵入を蒙りて、これに屬せり。

日本と支那との交通

(三) 元、日本に寇す。　世祖既に高麗を服從せしかば、之れを介して、使を日本に遣し、招諭せり。抑、日本と支那との交通は、頗る久しき以前にて、隋の時に、公然の使節往來せしより、互に使聘を通ぜしが、唐の季世、國內大に亂るゝに及び、我が宇多天皇の朝に、菅原道眞の上奏によりて、遂に遣唐使を廢しゝ以來、支那との國際上の交通は中絕せり。此に至りて、元、日本を併呑せむとの慾望より、使を派遣するに至りたるものなれば、書辭甚だ無禮なりしが爲、却けられしに、元更に再三の使者に及びしかば、日本は、鎌倉の執權北條時宗怒りて、之れを斬りしかば、世祖亦大に怒りて、前後二回、日本を伐ち、殊に第二回には、十萬の大軍と數千の戰艦とを送り、一戰にして日本を征服せしめむとしたれども、海上の颶風と日本の掩擊とに遇ひて大敗し、生きて還りし者僅に三人なりきとぞ。是れより流石の世祖も、遂に日本に兵を用ふることを斷念し、鋒を南に向けて緬國占城安南瓜哇等を伐てり。

元、日本に寇す

(四) 元室の衰勢。　世祖崩じて、其の孫鐵木兒（ティムール）立つ、これを成

宗といふ。是れより先、元は、外侵の爲に、連年兵を用ひしかば、國用缺乏して、重稅を課し、人民頗る苦めり。又世祖の時より、西方の察合台等、往々元に反きて兵を動かし、彼の西方の三帝國の如きは、全く獨立の姿をなせり。

西方三帝國の獨立

成宗崩じて、武宗仁宗相繼ぎて位に即きしが、是れより後、帝位相續の亂絕えず。又權臣の專恣、其の間に行はれて、大に元室を衰頽せしめたり。仁宗の次に英宗位に即きしが、こは鐵木迭兒の擁立にかゝりしを以て、鐵木迭兒、功を恃みて、專恣をなせり。尋いで其の黨鐵失といふ者、英宗を弑して、泰定を立てぬ。尋いで燕帖木兒、相となりて政權を專らにせし以來、順帝の時には伯顏、亦相となりて權勢を逞くし、遂に異謀を蓄へて、其の義子脫々に斥けらるゝに至る。是れより朝政大に衰へ、天下漸く亂れて、終に又元室の衰亡を招けり。

元室衰頽

宗教

反賊蜂起

朱元璋

(五)元の滅亡。　順帝、遊宴を事として、心を國事に留めず、物價騰貴し、賦斂重く、人民大に苦めり。この時、諸種の宗教國內に行はれ、道教は正一教、眞大道教、太乙教の三派に分れ、佛教の異派にも、喇嘛教、白蓮教等の諸派あり。僧侶寵を恃みて、驕暴なる者多かりしかば、かくて民心愈元室を離れて、反者諸方に起れり。

時に、韓山童といふ者あり、白蓮教を唱へて、衆を惑はし、劉福通と共に兵を擧げ、江南及江淮の邊を亂す。既にして山童は擒にせられたれども、福通は益勢を張れり。其の他、方國珍、郭子興、張子誠、陳友諒等、諸方に起りて、或は帝と稱し、或は王と號せり。郭子興の部下に、朱元璋といふ者あり。子興衰ふるに及びて、これに代りて、諸方を征服せり。朱元璋は泗州(江南省)の人なり。遂に方國珍を諭し降し、陳友諒を殺し、國を吳と稱し、益諸方を伐ち、

元の滅亡

又張士誠を擒にし、更に大兵を遣して、元の帝都に迫らしめしかば、順帝出奔せり。元璋乃ち帝位に即き、國號を明といふ。元は、世祖の宋を滅して、天下を一統せしより、凡そ十世八十八年にして亡びぬ。時に我が紀元二千〇二十八年（慶長天皇の元年）なり。されど元は、なほ其の殘喘を漠北に保てり。

元の帝系表

- (一)太祖鐵木眞 二十二年
  - 朮赤 ― 拔都
  - 察合台
  - (二)太宗窩濶台 十三年 ― (三)定宗貴由 三年
  - 拖雷 ― (四)憲宗蒙哥 九年
  - (五)世祖忽必烈 三十五年 ― 太子眞金
    - (六)成宗鐵木兒 十三年
    - (七)武宗海山 四年
      - (八)仁宗愛育黎拔力八達 九年
      - (二)明宗和世球
        - (九)英宗碩德八剌
        - (三)文宗圖帖睦爾 五年
      - (四)順帝妥懽帖睦爾 三十六年
      - (三)寧宗懿璘質班
    - 答剌麻八剌
  - (十)泰定帝也孫鐵木兒 五年 ― 天順帝阿速吉八
- 晉王甘麻剌

明の一統

第二章　明

(一)明の一統。　明の太祖朱元璋、帝位に即きて、中國に君臨せり。されどこの時諸方に割據する者なほ多く、又元の順帝は、大都に在りて、未だ帝號を去らず。太祖乃ち常遇春等を遣して、これを伐たしむ。順帝、大都を去りて、なほ上都を保てり。尋いで順帝崩じ、太子立ち、和林を保ち、屢明に寇せり。既にして太祖兵

を遣して夏梁雲南等を平定せしめぬ。此に於て、漢北の元は、時時邊患を爲しゝかども、其の他は全く明の一統に歸しぬ。

制度

太祖は、たゞ武を用ひしのみならず、大に內治を整へり。先づ官制を定め、吏部、戶部、禮部、兵部、刑部、工部の六部を置きて、政務を分掌せしめ、地方には、各省に、布政使と按察使とを置き、其の下の府に、知府あり、州に知州あり、縣に知縣ありて、政令を分掌す。又律令を改修して、大明律を制定し、學制を定め、學校を建てゝ、學藝を奬勵し、胡俗を禁じて、衣冠の制を定め、大に唐代の舊に復せり。

封建制

太祖は、また宋元の時、藩屏なくして亡びしに懲り、諸子を要地に封じて、封建の制を立てぬ。されど、其の封建の制は、大に前代と異にして、秩祿を與へ、護衛兵を附せるのみにて、土地人民を私有せしめず。そは、地方專橫の弊を豫防せるなり。

靖難の役

方孝孺

(二)靖難の役。　初め、太子標早く薨ぜしかば、其の子允炆を皇太孫とす。未だ幼弱なりしを以て、諸功臣の、後に專恣ならむことを慮り、功臣を殺しゝこと甚だ多かりき。太祖崩じて皇太孫立つ、これを惠帝といふ。

惠帝、齊泰黃子澄の議を用ひて、諸藩主の勢を殺がむとし、次第にこれを貶せしかば、諸王みな疑懼し、燕王先づ兵を擧げ、齊泰等を誅し、君側を清めむを名とし、其の兵を靖難と號す。朝廷乃ち李景隆等を遣して、これを討たしめしに、克たず、燕王進みて、京師に迫る。李景隆等、遂に燕王を迎へて降りしかば、惠帝遂に城を焚き、火中に崩ず。燕王位に即く、これを成祖となす。

此の役に、學士方孝孺も執へられぬ。燕王、孝孺に命じて即位の詔を草せしめけれども、孝孺從はず、燕賊簒位の四字を大書して殺さる其の他、齊泰黃子澄等の殺されし者多かりき。

元の遺族

(三)明の外征。　元、和林に退きしより、其の遺族は、國を韃靼と稱す。明の成祖の時に當り、阿魯台といふ者、本雅失里を奉じて明に服せず、其の使を殺し、又邊に寇せり。初め明は、金陵に都し、南京應天府と稱せしに、茲に至り、京師は、南方に在りて、元の侵寇を防ぐに便ならざるを以て、都を元の故都燕京に遷す。これを北京順天府といふ。

かくて成祖は、前後二回、親ら北征して、大に阿魯台等を敗れり。其の後、蒙古の瓦剌部の酋脫懽といふ者、諸部を兼幷して、强大となり、阿魯台を殺せり。其の子也先に及び、また來寇せしかば、英宗親征して、土木に至り、大敗して虜にせらる。これを土木の役といふ。景帝立ちて、也先を討ち退けしかば、也先乃ち英宗を送り還して去りぬ。其の後も屢、蒙古の入寇ありて、明の憂患を爲せり。

土木の役

八虎の專横

宸濠の亂

是れより先、安南王陳日焜は、其の臣黎季犛に弑せらる。黎季犛自立して安南王となり、其の子蒼に傳ふ。成祖、兵を遣して、これを討ち、安南を平げて、明の有とせり。

右の外、なほ東西に事多かりしを以て、次節に之れを述べむ。

(四)宸濠の亂。　英宗は土木の役に虜にせられしが、其の後、國に歸り、位に復せり。次に憲宗を經て、孝宗に至り、邊境益多事なり。武宗立つに及び、正士斥けられて、奸臣朝に充ち、劉瑾等八人、事を專らにし、八虎と稱せらる。尋いで劉瑾は誅せられ、其の黨與斥けられたれども、地方の盜賊大に蜂起せり。

時に寧王宸濠、異志を蓄へて、兵を起し、將に南京を衝かむとせり。王守仁、變を聞き、兵を起し、これを討ち、宸濠を擒にして自盡せしめ、事平ぐ。王守仁は、有名なる學者なり。

(五)學藝。　元の時には、學藝盛なりといふこと能はざりし

元代の儒者

かごも、趙復ありて、始めて程朱の學を唱へ、尋いで許衡（魯齋先生と稱す）劉因（靜修先生と稱す）吳澄（草廬先生と稱す）等出でぬ。みな元代の大儒たり。

明代の儒學

明に至り、太祖、學事を奬勵し、成祖も五經大全四書大全等の書を作らしめ、儒學の隆興を致したが、遂に姚江、河東の二學派を生じて、相對するに至れり。河東派の祖は、薛瑄にして英宗の時に出で、篤く程朱學を信ぜり。姚江派の祖は、王守仁にして、陸象山の說に基きて、一派の學說を唱へたる者なり。守仁、陽明先生と稱せられ、其の學を王學とも陽明學とも稱す。是れより學者、門戶を分ちて相爭へり。

二學派

王守仁

詩文

詩文にては、元の時元好門（遺山と號す）あり、明に及びて靖難の役に大節を顯したる方孝孺は、文章を能くし、又高啓は青邱と號して、詩を能くせり。其の他李東陽李夢陽等の、詩文の名家多く、明末に至りては歸震川出でゝ文名を顯しぬ。

戲曲、小說

元の時より、戲曲出で、小說もまた大に進歩せり。元の時に有名なる水滸傳出で、明の時に西遊記、金瓶梅等出でぬ。後世、水滸傳、演義三國志、西遊記、金瓶梅を四大奇書と稱せり。

倭寇

(六)倭寇

宸濠の亂後、北方には、屢蒙古の侵寇ありしが、是れより先、東南沿海の地には、我が日本の海賊等の侵略絕えざりき。これを倭寇といふ。

嘗て元の世祖は、日本に入寇して大敗せり。其の後、日本と支那との交通絕えたりしかごも、なほ商賈僧侶等の、私に相往來する者少なからざりき。又我が國の南北朝爭亂の時より、諸國の豪族競ひて元及高麗と通商せり。遂に西海諸國の流民等は、通商を名として、高麗の沿海を剽掠し、明の時に及び、方國珍張士誠の餘黨と結びて、支那の近海を侵寇し、明人大にこれを憂へたれごも、倭寇猖獗にして、これを如何ごもすること能はず、屢、

使を日本に遣して、其の侵略を禁ぜむことを請ひたれども止まざりき。成祖の時には、我が足利義滿と好を通じ、爾後屢使聘相往來せしが、倭寇の侵掠なほ止まず。我が應仁の亂後には、最も甚しかりき。世宗の時に及び、倭寇は、やゝ鎭定したれども、我が邦人は、なほ臺灣に占據せり。

新朝鮮

(七)新朝鮮。　初め、高麗は元に服屬せしが、其の後、元の虐待を蒙ること甚しく、又內には、奸臣ありて紛亂生じ、外には、倭寇の爲に侵掠せられ、國勢頗る衰微せり。既にして元亡び明起るに及びて、明に服屬したれども、またこれに背きて兵を動かせり。將軍李成桂といふ者、其の不可を諫め、遂に國王の廢立を行ひぬ。尋いで李成桂は、民望を得て、王位に即き、國號を朝鮮といへり。即ち今の朝鮮王統の初祖にして、時に我が紀元二千〇五十二年、後龜山天皇の末年(明の太祖の洪武廿五年)なり。

日本、朝鮮を伐つ

(八)日本、朝鮮を伐つ。　朝鮮は、倭寇以來、日本と交通を絕てり。其の王李昭の時、日本の豐臣秀吉其の來聘を促す、李昭これに從ふ。秀吉また明國を伐ちて、國威を大陸に擧げむと欲し、李昭に命じて、先導を爲さしめしに、李昭、明國を恐れて、秀吉の命を聽かざりしかば、秀吉大に怒り、先づ朝鮮を伐ちて、次に明國に及ぼむとせり。

日本の兵、朝鮮に入るや、朝鮮の兵、これを防ぐこと能はず。京城陷れられて、李昭は義州に走り、急を明に告げぬ。時に明は、神宗の世にして、祖承訓李如松等を遣し、大軍を率ゐて、朝鮮を救はしめけれども、悉く日本の兵に敗られぬ。由りて沈惟敬を遣し、和議を爲さしめしに、書辭無禮なりとて、秀吉の怒に觸れ、再び日本の兵を蒙りしかども、秀吉薨ずるに遇ひて、交戰止みぬ。

清の勃興

(九)清の勃興。　明は右に述べしが如く、北には蒙古、東南に

は倭寇あり。又朝鮮援軍の爲に、大に兵力を費して、國用窮乏せり。然るに、此の際に當り、東北滿州地方より、强敵起りて、次第に明の邊境を蠶食せむとする者あり。强敵とは、即ち愛親覺羅氏なり。

愛親覺羅氏

愛親覺羅氏は、金と同種族なり。是れより先、滿州の諸部、互に相爭ひしが、奴兒哈赤に至り、諸部を伐ち平げて、國勢大に盛になりぬ。奴兒哈赤は即ち太祖なり。國號を後金と稱し、漸く諸方を侵略し、又明の軍を破りて遼東に向ひ、瀋陽遼陽等を陷れ、遂に都を瀋陽に定めぬ。故に其の領地、西は遼河に及び、東は海を窮め、北は黑龍江に達せり。太祖崩じて、太宗立つに及び、國號を清と改めぬ。

後金

(二)明朝の黨爭。

明朝の黨爭

明室の外患は、既に迫れり。然るに、朝廷には、朋黨の爭起りて、互に軋轢せり。神宗の初年より、張居正といふ者、政を輔けて、紀綱大に振ひしに、其の死後、神宗頗る政を怠り、顧憲成を朝より斥く。憲成、剛直にして學識あり。其の貶せられしより、鄉に歸り、東林書院に在りて、學を講ぜり。朝に志を得ざる士太夫等の、これに從ふ者多く、講學の間に、朝政を諷議せり。

崑黨、宣黨、東林黨

時に、朝廷には、崑黨、宣黨などありて、憲成等を東林黨と稱せり。既にして、憲成等の薦により、李三才といふ者を、戶部尚書に任用せむとせしより、崑黨等と意見合はず、大に論諍軋轢せしが、遂に東林黨全く斥けられて、朝には正人なく、紀綱いよ〳〵衰へぬ。

神宗崩じ、光宗喜宗、相繼ぎて立つ。喜宗の世に、東林黨、朝廷に勢力を得たり。然るに反對黨は、宦者魏忠賢と結びて、東林黨を排斥し、魏忠賢、朝政を執り、暴橫を極めぬ。毅宗立つに及び、忠賢貶

せられて自殺し、其の黨與、或は貶せられ、或は殺さる。されど、此の時、流賊諸方に起り、清軍また次第に南侵せり。

流賊蜂起

(二)明の滅亡。 時に明の東北は後金に侵され、國内には、流賊蜂起し、張獻忠李自成等、これに乘じて、兵を擧げ、次第に諸州を攻略す。朝廷にては、兵食の缺乏を補はむとて、賦稅を重くせしかば、民心日に離れて、流賊月に多し。官軍これを征すれども、賊勢益猖獗を極め、李自成は、西北の諸州を敗りて、京師に迫り、官軍これを防ぎて利あらず、毅宗も自刎して崩じ、李自成自ら帝位に即きぬ。

清軍侵入

是れより先、後金の太祖崩じて、太宗立ち、國號を大清と稱し、明境を侵し、又朝鮮を伐ち從へぬ。清軍益勢を得たりしかば、明軍これを防ぎたれども克たず。既にして清の太宗崩じて世祖立つ。時に李自成、京師に迫り、明室大に危く、京師遂に陷りしかば、明將吳三桂は、援兵を清に求め、李自成を討ちて、これを走らす。是れより清の世祖は、明の京師北京に入りて都し、令を下して服制辮髮等、滿州の俗に從はしめむぬ。吳三桂遂に清に屬し、諸方を征せり。

明の末路

明にては、毅宗既に崩じ、福王由崧、南京にて、帝位に即く。清兵二軍に分れ、一は西に向ひ、一は南に向ふ。西に向ひし軍は、張獻忠李自成を滅し、南に向ひし軍は、南京を陷れ、明帝由崧を降しぬ。明人また唐王聿鍵を福建に立てゝ帝となし、勢やゝ振ひしかども、また清兵に敗られ、帝も執へらる。明人乃ち桂王由榔を立てしも、また利あらず。鄭成功といふ者、厦門に在り、魯王を奉じて、勢なほ盛なりしが、終に力足らずして、臺灣に遁れ去り、尋いで魯王も成功も卒して、天下は全く清の有となり、明は、太祖より、二十世二百九十六年にして亡びぬ。時に我が紀元二千三百

明の滅亡

二十二年にして、後西院天皇の末年（徳川四代將軍家綱の時代）なり。

明の帝系表

- (一)太祖朱元璋 三十一年
  - 懿文太子標
    - (二)惠帝允炆 四年
  - (三)成祖棣 二十二年
    - (四)仁宗高熾 一年
    - (五)宣宗瞻基 十年
      - (六)英宗祁鎮 十四年
        - (七)景帝祁鈺 七年
        - (八)英宗祁鎮（重祚） 八年
      - (九)憲宗見深 二十三年
        - (十)孝宗祐樘 十八年
          - (十一)武宗厚照 十六年
          - (十二)世宗厚熜 四十五年
        - 興獻王祐杭
          - (十三)穆宗載垕 六年
          - (十四)神宗翊鈞 四十七年
          - (十五)光宗常洛 一ケ月
            - (十六)熹宗由校 七年
            - (十七)毅宗由檢 十七年
            - (十八)帝由崧 一年
            - (十九)帝聿釗
            - (二十)帝由榔 十二年
            - 桂王常瀛
            - 福王常洵
            - 大祖九世の孫

西亞の三帝國

欽察

第三章　西部亞細亞の形勢

(一)西亞細亞三帝國。

初め、蒙古の勃興せしこと、其の侵略を中央亞細亞以西に及ぼして、欽察（キプチャク）・察合台（チャガタイ）・伊蘭（イル）汗の三帝國を建てしが、此の三國は、其の後、元の亡びしより、又次第に衰勢に傾けり。

欽察は、我が紀元一千九百〇三年、（西洋紀元一二四三）即ち南宗の理宗の世に、拔都（バツ）の建てたる國にて、其の領地、歐亞二洲に跨りぬ。拔都殂し、其の弟別兒哥汗（ベルケ）立つに及びて、耶蘇教徒を虐待せしかば、羅馬法王、十字軍を起さむとせり。されど、欽察の軍、これに先ちて起り、波蘭（ポーランド）に侵入して、大に威を振ひ、終に其の勢力を、埃乃にも及ぼせり。其の後、數世を經て、内憂外患、相繼ぎて起り、國勢大に衰へ、終に東方欽察の爲に滅されぬ。

東方欽察

東方欽察とは、求赤の長子斡魯朶の建てし國にて、白黨と稱す。圖克達密西に至りて、金黨を征服し、露西亞を伐ちて、莫斯科を降し、大に四隣を抄掠せり。既にして中央亞細亞の撒馬罕より起りたる帖木兒（タメルラン）と、花剌子模の地を爭ひて、相戰ひしに、圖克達密西、大に敗れて遂に死せり。

察合台

察合台は、元の太祖鐵木眞の次子、察合台の建てし國にて、其の後、元に反きて相抗せしが、國運終に衰微せり。

伊蘭汗

伊蘭汗は、元の憲宗の弟、旭烈兀の建てし國にて、旭烈兀の子孫、世々君臨せしが、終に帖木兒の爲に征服せられぬ。

帖木兒の雄圖

(二)帖木兒の雄圖。

帖木兒は、我が紀元一千九百九十六年（西洋紀元一三三六）中央亞細亞の撒馬罕の近傍に生れ、察合台の衰運に乘じ、諸方を征服して、帝位に上り、遂に伊蘭汗國を滅し、又欽察國を征し、西部露西亞を蹂躪して歸れり。時に印度の國內大に亂れて、國勢衰へしかば、帖木兒はこれを伐ち、ペンヂャブデルヒ等を取り、更に進みて安日河に達せり。

オットマン帝國

是れより先、成吉思汗に逐はれたる種族、小亞細亞の地に、オットマン帝國を開けり。バジヤゼットに至り、更に希臘に侵入して、マセドニアセッサリー等を略し、其の勢頗る盛なりき。時に帖木兒、印度より歸り、西征の軍を起し、シリアを伐ち、又ダマスカスバグダット等の都府を陷れ、バジヤゼットと戰ひて、これを擒にせり。是れよりオットマン帝國の勢大に衰へき。されど、バジヤゼットの孫、ムラッド二世立ちて、オットマン帝國、再び勢を振ひ、其の子マホメット二世に至り、コンスタンチノープル府を陷れて、今の土耳古國を立て、東羅馬帝國を滅せり。時に我が紀元二千百十三年（西洋紀元一四五三）なり。

帖木兒は、西征より歸り、明を伐ちて元の代を復せむとしたれ

帖木兒の大領土

ども、病に罹り、途中にて殂せり。（我が紀元二〇六五）實に帖木兒の領土は、支那の西疆より、西は地中海に達し、西北は露西亞の中部に至り、南は印度に入り、古來未曾有の大國をなせり。されど、其の死するに及び、版圖忽ち分裂せり。

回教徒の侵略

第四章　印度及び後印度諸國

(一)回教徒の侵略。

亞剌比亞（アラビヤ）のマホメット（マホメッド）起るに及び、兵力を以て、其の宗教を弘めしかば、印度にても、大にその侵略を蒙れり。

印度にては、河輸迦王の後、國内數多の小國に分れ、互に相爭ひて、統一せざりければ、屢回教徒の侵入を蒙りたれども、能くこれを防ぐこと能はざりき。我が紀元一千六百三十七年に、回教の勇將スブクトジンといふ者、河富汗斯坦（アフガニスタン）のガズニより侵入して、ペンヂャブ（パンジャブ）を略し、其の子マンムード（マハムード）に至り、ペンヂャブの地、全くこれに歸せしかば、佛寺佛像を破壞して、大に暴行を極めたり。其の後、屢變遷を經たれども、印度の國勢、終に振はざりき。

莫臥兒朝

(二)莫臥兒朝（モーグル）。

印度の國勢、振はざるに當り、帖木兒來りて、これを侵略したれども、其の去りし後、國内また混亂を極め、人民も大に苦みしが、其の後、帖木兒五世の孫、婆伯爾（バーバル）といふ者、屢印度を伐ちて、帝位に即き、莫臥兒朝を立つ、時に我が紀元二千百八十六年（西洋紀元一五五二）にして、明の世宗の世なり。

婆伯爾崩じ、其の子ブマウン立ちしに、國内に反徒起り、阿富汗人の侵入もありて、帝は一時外國に走りたれども、其の子アクバン帝に至り、英明にして大略あり、遂に印度全國を討平して、國勢大に振へり。實に莫臥兒朝最盛の時期にして、後世アクバ